三重県埋蔵文化財調査報告３３８

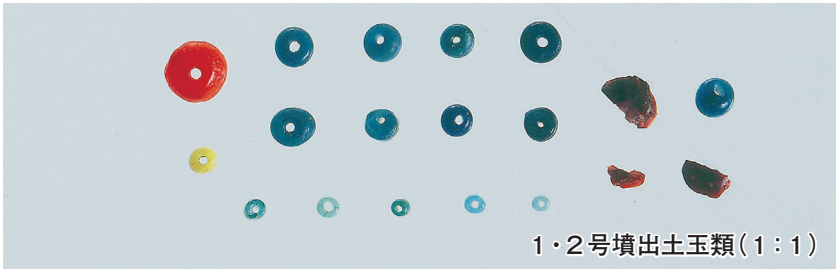
才良吉田谷古墳群・才良山ノ谷古墳群ほか
発掘調査報告
～伊賀市才良～

２０１３（平成25）年３月

三重県埋蔵文化財センター

３号墳石室内遺物出土状況（南から）

２号墳石室内遺物出土状況（南から）



１・２号墳出土玉類（１：１）

１号墳出土耳環・馬具他

２号墳出土土器

例　　言

1　本書は、三重県伊賀市才良に所在する才良吉田谷古墳群（１～３号墳）・才良山ノ谷古墳群(28号墳)および才良吉田谷遺跡の発掘調査報告書である。
2　この調査は、農免農道(上野依那古２期地区)整備事業に伴い、平成21年度から23年度に実施した。
3　発掘調査および報告書作成は、次の体制で行った。
調査主体　　三重県教育委員会
調査担当　　三重県埋蔵文化財センター（調査研究Ⅰ課）
平成21年度　主査　伊藤裕偉　　同　　奥田勝久
平成22年度　主幹　伊藤裕偉　　技師　髙松雅文
平成23年度　技師　髙松雅文
4　調査にかかる諸費用は、三重県農林水産部(平成22年度までは農水商工部)が全額負担している。
5　発掘調査にあたっては、地元の沖地区・才良地区および伊賀農林商工環境事務所から多大な協力を受けた。
6　本報告の基となる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
7　当報告書の作成業務は当センター調査研究１課が行った。報告文の作成は伊藤・髙松が行い、目次等に分担を示した。編集は伊藤が行った。

凡　　例

＜地図類＞
1　本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、三重県共有デジタル地図(平成19年測図)、農免農道(依那古２期地区)事業地平面図である。これらの地図は、全て世界測地系(測地成果2000)に対応している。
2　調査区の座標は、測地成果2000に対応した新座標第Ⅵ系で表記している。挿図の方位は全て座標北で示している。なお、磁針方位は西偏７°　00′　(平成10年)である。
＜遺構類＞
3　土層図は、層の区分を実線で、調査区壁面および採録深度に相当する部分を一点鎖線で表現している。また、遺構面や層位の大区分となる層については、他の土層線よりも太い線で表現した。
4　土層図の色調と土質は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』(日本色研事業株式会社　1967年初版、2003年第23版)を基準に、調査担当者が現地で目視した状況による。
5　当報告書での遺構は、それぞれの遺跡単位で通番としている。
6　遺構等の断面図で、平面図の相当位置に矢印があるものは、立面図となっている。
7　遺構番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けている。
ＳＤ‥‥周溝
8　遺構は、調査時に付加した遺構番号を踏襲している
＜遺物類＞
9　当報告での遺物実測図類は実物の1/2・1/4・1/8などがあり、その都度指示した。
10　遺物の断面図は、土器は白抜きで、鉄製品・石製品は斜線で表現した。
11　当報告書での用語は、「つき」は「坏」、「わん」は「椀」に統一している。
12　遺物観察表は、以下の要領で記載している。
番号‥‥‥挿図掲載番号である。
実測番号‥‥‥‥実測段階の登録番号である。
様・質‥‥‥「土師器」「須恵器」といった区分をここに示した。
器種など‥‥‥遺物の器種を示す。
グリット‥‥‥調査時に設定したグリット名を記した。
遺構・層名‥‥‥遺物の出土した遺構や層名を記した。
法量(cm)　‥‥‥遺物の法量を示す。(口)は口縁部径、(底)は底部径、(体)は体部径を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での　「接地点」ではない。
調整・技法の特徴‥‥‥主な特徴を外面(外；)・内面(内；)で示した。「Ａ→Ｂ」はＡの後にＢが施されたことを示す。
胎土‥‥‥小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。
色調‥‥‥その遺物の代表となる色調を記載した。表記は、前掲『新版標準土色帖』に拠る。
残存度‥‥‥指示部位を12分割した際の残存度を示した。6/12は約半分、12/12は全体が残っていることになる。
特記事項‥‥‥遺物の特徴となる事項を記した。
＜写真図版＞
13　挿図と写真図版の遺物番号は、遺物実測図の番号と対応している。
14　遺物の写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

本　文　目　次

Ⅰ　調査の契機・経過と行政的諸手続 ……伊藤…（1）
1　調査の契機と経過
2　調査の経過と法的措置
3　発掘調査と記録の方法
4　整理作業とその方法

Ⅱ　遺跡と周辺の諸環境 ……伊藤…（7）
1　位置と地形
2　歴史的環境

Ⅲ　才良吉田谷古墳群の遺構……伊藤…（9）
1　調査区の地形と基本層位
2　才良吉田谷１号墳
3　才良吉田谷２号墳
4　才良吉田谷３号墳

Ⅳ　才良吉田谷古墳群の出土遺物 ……伊藤…(31)
1　１号墳出土遺物
2　２号墳出土遺物
3　３号墳出土遺物
4　その他

Ⅴ　才良山ノ谷古墳群ほかの調査 ……髙松…(41)
1　調査区の設定
2　基本層位
3　遺構
4　遺物

Ⅵ　才良吉田谷遺跡の調査 ……髙松…(50)
1　調査区の設定
2　吉田谷Ａ区
3　吉田谷Ｂ区
4　吉田谷Ｃ区

Ⅶ　調査のまとめと検討 ……伊藤・髙松…(58)
1　古墳と古墳群の変遷
2　横穴式石室の形態とその空間
3　出土遺物の特徴
4　才良吉田谷古墳群と枡川地区
5　才良山ノ谷28号墳と才良吉田谷遺跡
6　才良･沖地区東部丘陵の分布調査成果

挿　図　一　覧

第１図　工事計画路線と調査区の関係
第２図　才良吉田谷１～３号墳石室内埋土の取り上げ基準小地区
第３図　遺跡周辺地形図
第４図　才良吉田谷１～３号墳調査前測量図
第５図　才良吉田谷１～３号墳調査後平面図
第６図　才良吉田谷１号墳遺構平面図
第７図　才良吉田谷１号墳墳丘・掘形土層図
第８図　才良吉田谷１号墳石室実測図
第９図　才良吉田谷１号墳調査区南壁土層
第10図　才良吉田谷１号墳石室・基底石・掘形実測図
第11図　才良吉田谷１号墳石室構築の工程
第12図　才良吉田谷２・３号墳調査区北壁他墳丘土層
第13図　才良吉田谷２号墳石室実測図
第14図　才良吉田谷２号墳石室内遺物出土状況①
第15図　才良吉田谷２号墳石室内遺物出土状況②
第16図　才良吉田谷２号墳石室掘形および土層
第17図　才良吉田谷２号墳石室構築の工程
第18図　才良吉田谷３号墳石室構築の工程
第19図　才良吉田谷３号墳石室・掘形実測図
第20図　才良吉田谷３号墳石室内遺物出土状況
第21図　才良吉田谷１号墳出土遺物実測図(1)
第22図　才良吉田谷１号墳出土遺物実測図(2)
第23図　才良吉田谷２号墳出土遺物実測図(1)
第24図　才良吉田谷２号墳出土遺物実測図(2)
第25図　才良吉田谷３号墳出土遺物実測図
第26図　才良吉田谷１号墳の矢穴痕のある石材
第27図　山ノ谷調査区平面図
第28図　山ノ谷調査区土層断面図(1)
第29図　山ノ谷調査区土層断面図(2)
第30図　才良山ノ谷28号墳平面・土層断面図
第31図　才良山ノ谷28号墳周溝（ＳＤ４）遺物出土状況
第32図　才良山ノ谷28号墳他出土遺物実測図
第33図　吉田谷Ａ区平面図
第34図　吉田谷Ｂ・Ｃ区平面図
第35図　吉田谷Ａ～Ｃ区土層断面図
第36図　吉田谷Ｃ区石列実測図
第37図　古墳の築造地点変遷
第38図　才良吉田谷１号墳・枡川山神社古墳の位置
第39図　才良山ノ谷・吉田谷古墳群採集遺物実測図
第40図　才良・沖地区東部丘陵の古墳分布

写　真　一　覧

写真１　１号墳の外護列石状石材
写真２　１号墳石室基底石と掘形
写真３　１号墳左側壁基底石裏側の状況
写真４　１号墳玄門部分
写真５　１号墳の持ち送り技法
写真６　矢穴が見られる石材
写真７　２号墳石室掘形の状況
写真８　２号墳奥壁と右側壁の組合せ
写真９　２号墳石室の仕切石列
写真10　３号墳の石材
写真11　３号墳の須恵器他出土状況
写真12　１号墳出土金環(1)の詳細
写真13　釘の頭部
写真14　２号墳出土須恵器(94)
写真15　３号墳出土須恵器平瓶(110)
写真16　１号墳石材の矢穴

表　一　覧

第１表　才良吉田谷古墳群・才良山ノ谷古墳群出土遺物(土器)観察表(1)
第２表　才良吉田谷古墳群・才良山ノ谷古墳群出土遺物(土器)観察表(2)
第３表　才良吉田谷古墳群出土金属製品観察表
第４表　才良吉田谷古墳群・才良山ノ谷古墳群出土石製品観察表
第５表　才良・沖地区東部丘陵の遺跡分布(1)
第６表　才良・沖地区東部丘陵の遺跡分布(2)

写　真　図　版　一　覧

巻頭図版１　才良吉田谷２・３号墳遺物出土状況
巻頭図版２　才良吉田谷古墳群出土遺物
写真図版表紙　才良吉田谷１号墳石室
写真図版１　遺構　才良吉田谷古墳群　１号墳
写真図版２　遺構　才良吉田谷古墳群　全景
写真図版３　遺構　才良吉田谷古墳群　１号墳
写真図版４　遺構　才良吉田谷古墳群　１号墳
写真図版５　遺構　才良吉田谷古墳群　１号墳
写真図版６　遺構　才良吉田谷古墳群　１号墳
写真図版７　遺構　才良吉田谷古墳群　１号墳
写真図版８　遺構　才良吉田谷古墳群　２号墳
写真図版９　遺構　才良吉田谷古墳群　２号墳
写真図版10　遺構　才良吉田谷古墳群　２号墳
写真図版11　遺構　才良吉田谷古墳群　２号墳
写真図版12　遺構　才良吉田谷古墳群　２号墳
写真図版13　遺構　才良吉田谷古墳群　３号墳
写真図版14　遺構　才良吉田谷古墳群　３号墳
写真図版15　遺構　才良吉田谷古墳群　３号墳
写真図版16　遺構　才良吉田谷古墳群　３号墳
写真図版17　遺構　才良山ノ谷古墳群　全景
写真図版18　遺構　才良山ノ谷古墳群　山ノ谷調査区
写真図版19　遺構　才良山ノ谷古墳群　28号墳
写真図版20　遺構　才良山ノ谷古墳群　28号墳
写真図版21　遺構　才良吉田谷遺跡　全景
写真図版22　遺構　才良吉田谷遺跡　全景
写真図版23　遺物　才良吉田谷古墳群　１号墳
写真図版24　遺物　才良吉田谷古墳群　１号墳
写真図版25　遺物　才良吉田谷古墳群　１号墳・２号墳
写真図版26　遺物　才良吉田谷古墳群　２号墳
写真図版27　遺物　才良吉田谷古墳群　２号墳
写真図版28　遺物　才良吉田谷古墳群　２号墳・３号墳、才良山ノ谷古墳群　28号墳

Ⅰ　調査の契機・経過と行政的諸手続

１　調査の契機と協議経過

ａ　総説

ここで報告する才良吉田谷古墳群（１～３号墳）・才良山ノ谷28号墳・才良吉田谷遺跡は、農免農道事業（上野依那古２期地区）に伴い、平成21年度から23年度にかけて発掘調査（記録保存）を実施したものである。一連の事業として、沖打越１号墳・沖打越中世墓の発掘調査があり、この成果は既に報告書を刊行している。

ｂ　事前協議の経過

才良吉田谷古墳群・才良山ノ谷古墳群の所在する才良地区西部丘陵は、昭和52年度に刊行された上野市編『上野市南部都市開発区域埋蔵文化財第一次調査報告』（1978年、以下「上野1978報告」）で、多数の遺跡・古墳等の存在する地域とされていた。上野1978報告は、平成４年３月に刊行された上野市教育委員会編『三重県上野市遺跡地図』（1992年、以下「上野1992報告」）では、遺跡番号こそ付与されないていないものの、全体を埋蔵文化財包蔵地と同等の扱いとしている。

当該丘陵部を通過する農免農道に関しては、上記上野1978報告の状況を踏まえつつ、路線内の分布調査を平成17年度に実施した。その結果、上野1978報告で認識されていた古墳（横穴式石室墳）などを改めて確認することとなった。

三重県埋蔵文化財センター（以下、「当センター」）と事業部局である県農水商工部農山漁村室（当時）と事業実施機関の伊賀農林商工環境事務所（以下、「伊賀農林」）は、この成果をもとに協議を重ね、古墳と考えられる地点を極力事業地内から除外し、路線変更を重ねる中で遺跡の現状保存に努めた。しかし、それでもいくつかの遺跡・古墳については記録保存とせざるを得ない状況にあった。そのひとつが吉田谷１号墳であった。

以下では、平成21年度に実施した才良吉田谷１号墳の本調査から平成23年度調査までの経緯を述べる。

ｃ　平成21年度調査

前記協議を経て、当センターでは平成21年度に才良吉田谷１号墳の調査を実施した。その結果、１号墳の調査エリア内で、２・３号墳の存在を新たに確認した。また、同時に実施していた沖打越中世墓の下部からも、新たに沖打越１号墳の存在が明らかとなった。

これらの状況から、工事エリア内に現況では目視不可能な古墳や遺跡がある可能性が浮上した。そこで、当センターと伊賀農林との間で再度協議を行い、「上野1992報告」で明示されている範囲の中にあたる工事エリアを「才良吉田谷遺跡」として認識し、改めて範囲確認調査を実施することとなった。

ｄ　平成22年度調査

平成22年度は、沖打越１号墳・沖打越中世墓の発掘調査とともに、才良吉田谷遺跡の範囲確認調査を併行して実施した。範囲確認調査は、山ノ谷地区で５ヶ所、吉田谷地区で９ヶ所の調査坑を設定して行った。その結果、山ノ谷Ｃ地点で古墳の周溝と考えられる遺構（才良山ノ谷28号墳）を確認し、山ノ谷Ｄ・Ｅ地点でも遺構・遺物が見られた。また、吉田谷地区ではＣ・Ｈ・Ｊ地点で遺構・遺物を確認した。この結果をもとに、平成23年度に最後の本調査を実施した。

ｅ　平成23年度調査

平成23年度は、前年度の範囲確認調査を受けて実施した。山ノ谷Ｃ地点は古墳（才良山ノ谷28号墳）の周溝部分を確認した。吉田谷地区では、近世かと考えられる石組み遺構を確認した。

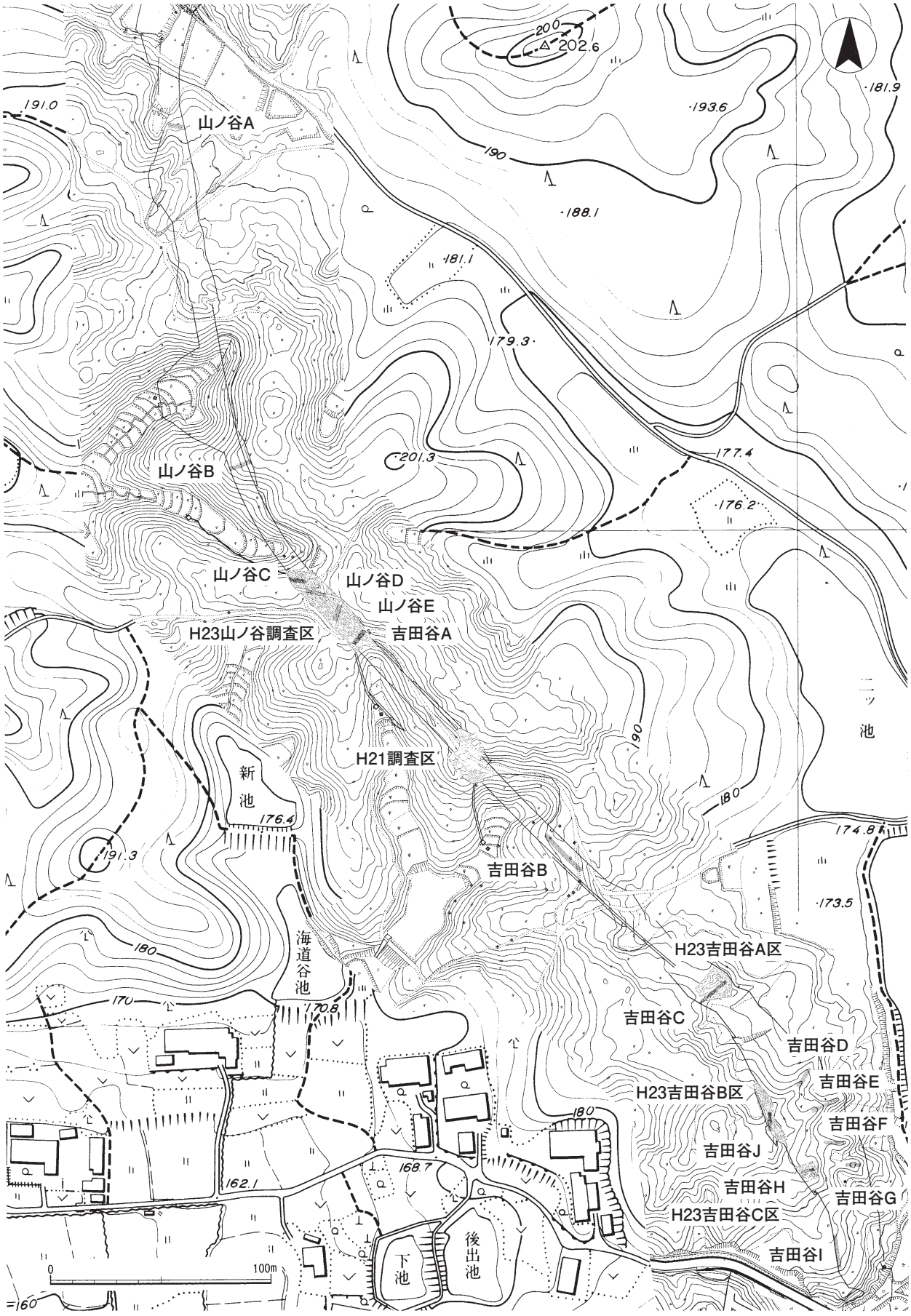
以上の経緯により、当該工事エリアの埋蔵文化財調査は終結した。

２　各年度の調査状況と法的措置

ａ　調査の状況

各年度のおおまかな流れは前項で触れたので、ここでは各年度の状況を具体的に記しておく。

・平成21年度（第１次調査）



第１図　　工事計画路線と調査区の関係（１：2,500）

この年度の調査は、同一事業地内にある沖打越中世墓と併行して実施した。業務は、「沖打越中世墓・吉田谷１号墳埋蔵文化財発掘調査業務」として、土工部門の委託（調査補助委託）を行った。平成21年10月16日に一般競争入札を実施し、㈱島田組が落札した。契約期間は同年10月19日から翌22年２月26日（契約変更により延長後）である。

才良吉田谷古墳群にかかる当年度の経過は以下の通りである。最終調査面積は330㎡である。

【平成21年度調査経過】

10月16日　発掘調査業務委託業務を㈱島田組が落札。
10月20日　現地確認（伊賀農林・㈱島田組・当センター）。調査地内の伐採や作業工程について協議。
11月６日　発掘調査用具の資材搬入。
11月９日　調査前測量。
11月16日　調査前の段階確認。
11月18日　発掘調査開始。１号墳石室内崩落土から須恵器・瓦器片出土。
11月19日　北側斜面部の清掃時に、溝状の遺構を確認（後に２・３号墳と判明）。
11月24日　１号墳石室内に大石を確認。
11月25日　１号墳左側壁の基底石を確認。やや胴張りか？床面の敷石は無いもよう。
11月26日　１号墳床面崩落土内から金銅製品出土。
11月27日　１号墳奥壁の実測開始。
12月１日　２号墳検出開始。
12月２日　３号墳石室を確認。１号墳奥壁の実測。
12月４日　３号墳石室の西部で２号墳石室を確認。
12月７日　３号墳石室内から須恵器・土師器・鉄刀を確認。写真撮影。
12月８日　３号墳遺物出土状況実測。２号墳石室輪郭が判明。１号墳の転落石撤去完了。
12月９日　１号墳床面精査開始。２号墳羨道部から須恵器平瓶の完形品出土。
12月10日　１号墳床面撹乱土内から金環出土。床面は凹凸多い。２号墳羨道付近から平根式の鉄鏃出土。
12月14日　１号墳床面精査続行。撹乱土内から金銅製品出土。２号墳石室内床面精査。
12月15日　１号墳周溝の調査。須恵器片多い。２号墳床面精査続行。
12月16日　１号墳床面で金環出土。原位置を保っている可能性あり。１～３号墳の全体写真を撮影。
12月17日　１・２号墳床面精査続行。２号墳石室内に須恵器・土師器多い。３号墳石室実測。
12月18日　１号墳石室実測。２号墳床面精査続行。釘類多い。調査区全体の調査後地形測量。
12月21日　２号墳石室内羨道寄りに石列を確認。
12月24日　人力掘削後の段階確認。
12月28日　２号墳石室実測。
１月４日　１・２号墳石室実測。
１月７日　１号墳墳丘の断ち割り。
１月13日　２号墳床面精査の続行。
１月14日　２号墳遺物出土状況実測。釘の位置で棺の状態復元できそう。
１月22日　１号墳石室掘形の掘削。
１月26日　現地説明会の資料提供（伊賀市政記者会）。新聞各社、発掘調査へ来訪。
１月29日　現地説明会準備。
１月30日　現地説明会を開催。沖打越中世墓とあわせ、157名の参加があった。
２月１日　１号墳墳丘土層図の作成。
２月３日　１号墳奥壁石材の断面図作成。２・３号墳の床面整地土除去。20～25㎝ある。
２月４日　１号墳平面図、２号墳掘形掘削と実測。
２月５日　１号墳石室掘形掘削、補足実測。
２月８日　１～３号墳の補足実測（～10日）。
２月19日　発掘調査現場の引き渡し（伊賀農林へ）。
３月８日　業務完成検査（㈱島田組、於；三重県埋蔵文化財センター）

・平成22年度（範囲確認調査）

平成22年度は、才良吉田谷遺跡の範囲確認を中心に実施した。また、前記のように、この年度の調査は沖打越１号墳・沖打越中世墓の調査と併行して実施した。

当該年度の発掘調査は、「沖打越中世墓・才良吉田谷古墳群ほか埋蔵文化財発掘調査業務」として、発掘調査業務の委託（調査補助委託）を行った。平成22年６月21日に一般競争入札を実施し、㈱アーキジオが落札した。契約期間は同年６月22日から同年10月29日（契約変更による延長後）である。

当該年度の経過は以下の通りである。最終調査面積は、山ノ谷地区で約54㎡、吉田谷地区で117㎡の、合

計171㎡である。
【平成22年度調査経過】
６月21日　発掘調査業務委託業務を㈱アーキジオが落札。
７月２日　現地確認（伊賀農林・㈱アーキジオ・当センター）
７月20日　発掘調査用具の資材搬入。
８月18日　山ノ谷・吉田谷地区の伐採ほぼ終了。
８月19日　調査区設定。
８月24日　掘削前の段階確認。
９月１日　山ノ谷Ａ区の掘削開始。遺構・遺物なし。
９月２日　山ノ谷Ｂ区開始。
９月６日　山ノ谷Ｂ区続行。山ノ谷Ｃ・Ｄ区開始。
９月７日　山ノ谷Ｃ・Ｄ区で溝状遺構を確認。吉田谷Ａ区開始、遺構・遺物なし。
９月８日　山ノ谷Ｂ区終了、遺構・遺物なし。山ノ谷Ｅ区開始。
９月10日　吉田谷Ｂ区開始、浅い。
９月13日　吉田谷Ｂ区から近世の陶磁器片。
９月14日　吉田谷Ｃ区開始。
９月15日　吉田谷Ｂ・Ｃ区続行。
９月21日　吉田谷Ｃ区で溝状遺構と土師器片。吉田谷Ｄ区開始。
９月22日　吉田谷Ｅ・Ｆ区開始。Ｅ区はほぼ終了。
９月24日　吉田谷Ｇ・Ｈ区開始。Ｈ区に石を確認。
９月27日　山ノ谷Ｅ区から土師器片少量。
９月29日　吉田谷Ｈ区に遺構を確認。Ｉ区掘削開始。
10月１日　吉田谷Ｉ区終了。Ｊ区開始。
10月５日　吉田谷Ｊ区終了、遺構・遺物なし。
10月６日　山ノ谷・吉田谷地区の埋め戻しを開始。
10月19日　発掘調査現場の引き渡し（伊賀農林へ）。
11月９日　業務完成検査（㈱アーキジオ、於；三重県埋蔵文化財センター）

・平成23年度（第２次調査）

平成23年度は、前年度の範囲確認調査結果に基づき、遺構・遺物の確認された地点（山ノ谷Ｃ・Ｄ・Ｅ区、吉田谷Ａ・Ｃ・Ｈ・Ｊ区）について、第２次の発掘調査を実施した。
当該年度の発掘調査は、「才良吉田谷・山ノ谷古墳群第２次埋蔵文化財発掘調査業務」として、発掘調査業務の委託（調査補助委託）を行った。平成23年９月13日に一般競争入札を実施し、㈱アーキジオが落札した。契約期間は同年９月14日から同年12月26日（契約変更による延長後）である。

当該年度の経過は以下の通りである。最終調査面積は、山ノ谷地区で約513㎡、吉田谷地区で352㎡の、合計865㎡である。
【平成23年度調査経過】
９月26日　現地協議
９月26日～ 10月７日　調査前地形の測量（山ノ谷地区、吉田谷Ａ～Ｃ地区）
≪山ノ谷地区≫
10月７日　掘削前の段階確認。
10月11日　表土掘削開始。
10月18日　掘削後の段階確認。
10月20日　包含層掘削を開始。
11月１日　ＳＤ４において須恵器出土。
11月４日　調査区を拡張。
11月８日～９日　写真撮影（全景）。
11月10日～ 12日　土層図・調査後地形測量図作成。
11月15日　段階確認、調査終了。
≪吉田谷Ａ～Ｃ地区≫
11月１日　掘削前の段階確認。
11月14日　表土掘削開始。
11月18日　吉田谷Ｃ地区において石列検出。
11月28日　掘削後の段階確認。
11月28日～ 30日　全景写真の撮影。
11月30日～ 12月１日　土層図・調査後地形測量図作成。
12月２日　現地調査終了
１月６日　業務完成検査（㈱アーキジオ、於；三重県埋蔵文化財センター）

ｂ　発掘調査の普及・公開

平成21年度の調査では、才良吉田谷１～３号墳の現地説明会を開催した。参加者は157名であった。平成22年度には、第29回三重県埋蔵文化財展「みぃ～つけた！三重の遺跡新出土品」（平成22年12月11日～平成23年１月16日）で出土遺物の展示をし、報告会で調査成果の紹介をした。

平成23年度調査については、調査成果報告会として平成24年３月24日に開催した「おもろいもん出ま

したんやわ@三重2011」で、才良山ノ谷28号墳の出土遺物展示を行った。

他には、三重県埋蔵文化財センターＨＰで発掘調査情報を提供した。

ｃ　文化財保護法等にかかる諸通知

発掘調査にかかる文化財保護法(以下、「法」)の諸通知は、以下により行われている。

・法に基づく三重県文化財保護条例第48条第１項(県教育長あて県知事通知)

平成21年10月９日付、賀農環第734号

・法第99条第１項(県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告)

平成21年11月２日付、教埋第295号

平成22年７月14日付、教埋第93号

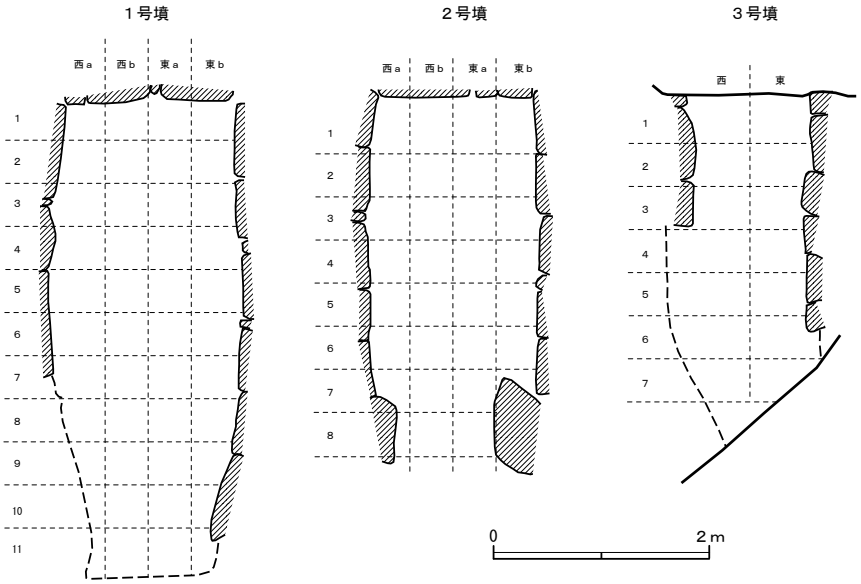
平成23年９月20日付、教埋第168号

・遺失物法にかかる文化財の発見・認定通知(伊賀警察署長あて県教育長通知)

平成22年３月15日付、教委第12-4428号

平成23年２月22日付、教委第12-4407号

平成23年12月27日付、教委第12-4409号



第２図　才良吉田谷１～３号墳石室内埋土の取り上げ基準小地区

３　発掘調査と記録の方法

ａ　掘削の方法

平成21年度　才良吉田谷１号墳は、立木伐採・除去後に、基本的に全体を人力で掘削したが、石室内の転落石は重機等を用いて引き上げた。２・３号墳の地点は、当初古墳があると想定していなかったため、最初にバックホーで表土約10cmを除去したが、古墳を確認した後は人力で掘削を行った。

なお、石室内床面直上の埋土は、それぞれの主軸を任意で求め、約40cm四方の小地区を設定して土を取り上げ、全て篩掛けをした(第２図)。

平成22年度　この年度の調査は、範囲確認にあたる。該当箇所を全て人力掘削した。

平成23年度　山ノ谷調査区についてはバックホーで表土を除去した後に人力で検出・遺構掘削を行った。吉田谷地区の３ヶ所は、全て人力掘削とした。

ｂ　地区設定

平成21年度(第１次調査)　国土座標軸を基準に、４ｍグリッドを設定して実施した。ただし、遺構としては石室と周溝の一部(１号墳)であったため、あまりグリッド設定は活かされなかった。

平成22年度(範囲確認)　範囲確認調査であったため、各調査坑単位での調査を実施し、とくにグリッドは設定しなかった。

平成23年度(第２次調査)　山ノ谷調査区および吉田谷Ａ～Ｃ区では、国土座標を基準としたグリッドを設定して調査を進めた。

ｃ　遺構番号

平成21年度調査では、調査前から認識されていた吉田谷１号墳と、新たに発見された２基の古墳を続け、吉田谷２号墳・３号墳とした。平成22年度調査では、新たな遺構番号付与は無かった。平成23年度調査では、才良山ノ谷古墳群27基に続く古墳として、才良山ノ谷28号墳の名称を与えた。

ｄ　出土遺物の回収

出土遺物は、出土年月日と層位・遺構の区別を行い、小地区単位で取り上げている。それぞれの遺物には専用のラベルを現地で付与したうえで、洗浄などの作業を行う当センターへ搬送した。

e　遺構図面

遺構検出段階で、1/40の略測図(遺構カード)を作成している。遺構カードはグリッド単位で作成し、遺構・出土遺物・埋土の状況等を適宜記録した。

遺構カードをもとに、調査区全体の遺構配置を見るための遺構配置図(1/100)を作成した。

発掘調査終了後に、正確な実測図作成を作成した。調査区の平面図は、主要遺構部分を1/10で手書き実測した。調査区の土層図は1/20で作成した。

f　遺構写真

遺構関連の写真は、調査区全景写真や重要な遺構については、４×５版および６×７版(ブローニ)撮影し、調査の進捗状況などを中心とした細かな記録には35㎜版を撮影した。それぞれのフィルムは、白黒とスライドを同時に作成している。また、デジタル画像と動画も適宜撮影した。

４　整理作業とその方法

a　遺物類の整理

発掘調査現地から当センターへ出土遺物を搬送した後に、洗浄・注記・接合作業を実施した。

出土遺物は、発掘調査担当者が報告書掲載用遺物と未掲載遺物に区分した。報告書掲載遺物については、実測図を作成した。未掲載遺物は袋詰めにし、整理箱に収納した後に、専用収蔵庫へと搬入した。報告書掲載遺物については、それぞれ１枚づつラベルを付加し、収蔵後の混乱を避けている。

出土遺物は、整理の結果をもとに、報告書掲載分および参考資料としての保管分(Ａ遺物)と、報告書未掲載分(Ｂ遺物)とに区別して保管している。

b　図版作成と遺物写真撮影

実測図等が完成した遺物類は、報告書作成のための観察や図版作成を行った。これらの遺物類は、報告書掲載順に収蔵し、報告書完成後の利活用に備えた。また、実測図そのものも、記録保存の一環として保存している。

報告書用に作成した版下類やトレース図類については、報告書完成後に廃棄した。

報告書掲載遺物は、報告書用の写真を６×９版(ブローニー)で撮影した。遺物写真の撮影は、報告書掲載資料全てではなく、掲載資料のうちの主立ったものとした。

c　記録類

発掘調査にかかる記録類には、調査関連図面(平面図・土層断面図など)、遺構カード(1/40縮尺)、調査日誌、写真類がある。これらは、所定の番号を与え、当センター専用収蔵スペースで保管している。

５　出土遺物の保存処理

b　保存処理

出土した鉄製品類に関しては、常態での保存が困難なため、保存処理を実施した。内訳は、才良吉田谷古墳群１～３号墳出土の金属製品48点(接合・同一個体の判断前)である。

保存処理の方法は、Ｘ線撮影やクリーニングなどの基礎作業の後、アクリル樹脂20％ナフサ溶液を含浸させる方法とした。

保存処理は平成22年度の委託業務として実施し、一般競争入札の結果、(財)元興寺文化財研究所が受託した。　(伊藤)

Ⅱ　遺跡と周辺の諸環境

1　位置と地形

才良吉田谷古墳群・才良山ノ谷古墳群は、三重県伊賀市才良字吉田谷・山ノ谷に所在する。当地は三重県伊賀地域とされる地である。伊賀地域の中心河川は木津川で、当地を概ね西流して淀川と合流し、大阪湾へと注ぐ。伊賀地域は三重県内で唯一の淀川水系である。都道府県の地域割りとしては東海地方に含められる三重県だが、伊賀地域に関しては近畿地方に含めるべき地理的・歴史的特徴を有している。

才良地区は木津川本流域沿いで、現伊賀市（旧上野市）市街地の南方にあたる。在所の南東部から比自岐川が合流しているが、平地は決して広くない。才良吉田谷・山ノ谷古墳群は、この両河川に挟まれた丘陵にあたる。最高所の標高195m前後、平地部との比高差は30 ～ 40mの低丘陵である。

2　歴史的環境

才良地内の古墳群を見る上で必要となる、古墳時代から奈良時代に関する状況を特記する(1)。

a　古墳時代

比自岐川流域には、古墳時代前期に伊賀の中心的存在となる古墳が造営される。全長約120mの前方後円墳、石山古墳である。４世紀後葉頃と考えられるこの古墳は、石製腕飾類・鉄製武器武具・木製盾・埴輪といった多種多量の副葬品で知られ、当地のみならず、広く伊賀盆地南部の王墓と考えられている。

才良東部丘陵には、石山古墳直後と考えられる古墳がいくつかある。木津川を見下ろす位置に築かれた沖打越１号墳は、全長約24mの造出付円墳ないしは前方後円墳で、４世紀末頃の築造と考えられる。才良山１号墳も全長約25mほどの造出付円墳と考えられ、埴輪の出土が知られている。これ以外にも才良東部丘陵内には数基の造出付円墳があり（第Ⅷ章参照）、５世紀代の状況を示している。

６世紀前半になると、比自岐川流域の低地部に前方後円墳である王塚古墳（全長約48m）が築造される。また、５世紀後半から７世紀代には、才良東部丘陵内に多くの古墳群（群集墳）が築造されている（第Ⅷ章）。才良吉田谷古墳群・才良山ノ谷古墳群もこれを構成する一部である。

古墳時代後期の古墳として注目なのは枡川山神社古墳で、山梔玉が出土している(2)。山梔玉は一般の古墳から出土する代物ではなく、当地の古墳群が持つ優秀さ・重要性を示している。

また才良地区に近接して、首長居館と水源地祭祀施設が融合した城之越遺跡がある。才良東部丘陵の古墳群とも密接に関係する遺跡と見られる。

b　古代（奈良・平安時代）

古代律令期の才良地区は、『和名類聚抄』(3)記載郷では伊賀国伊賀郡神戸郷にあたると見られる。この時期の才良地区には財良寺跡（才良廃寺）があった。財良寺跡では７世紀後葉から中世に至る瓦類が出土している。伊賀盆地南部ではいち早く古代寺院の建立された地である。

また、才良の北部にあたる市部地区には森脇遺跡がある。この遺跡は７世紀から10世紀に及ぶ大規模集落で、奈良時代頃には規格的な建物配が見られるため、郡衙相当の官衙か、あるいは有力豪族の屋敷地と見られる。才良地区付近は、古墳時代以降古代でも重要地だったのである。

c　古墳時代から古代の才良地区

石山古墳を嚆矢に財良寺跡へと至る当地の動向は、これまでの見解では断続的なパーツの集合として見られていた。しかし、才良東部丘陵の古墳をここに位置づけることで、両者の継続的な一面を見ることができる。当報告は、そのための素材を提供するものとなろう。（伊藤）

〔註〕

（1）以下、遺跡を中心とした記述に関しては、伊賀市編『上野市史』考古編（2005年）を参照した。

（2）小林行雄編『世界考古学大系３日本Ⅲ古墳時代』（平凡社、1959年）

（3）京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成倭名類聚抄』（1968年、臨川書店）

第３図　　遺跡周辺地形図（国土地理院1/50,000「上野」「名張」より）

Ⅲ　才良吉田谷古墳群の遺構

１　調査区の地形と基本層位

ａ　調査区周辺の地形環境

才良吉田谷古墳群は、才良地区東部に広がる低丘陵中にあり、約25基で構成される。今回調査した１～３号墳は古墳群の中央部付近にある。南に派生する小尾根上に展開している。

なお、当古墳群が形成されている尾根をそのまま南へ下っていくと、枡川集落へと至る。つまり、当地は才良地区に含まれてはいるものの、石室は才良集落側ではなく、枡川集落に向いているといえる。

ｂ　地質の状況と基本層位

当地は花崗岩およびその媒乱土によって構成されている。表土直下にはこの岩盤（といっても非常に脆い）がすぐに現れる地点と、上部に褐色系粘質土が堆積している地点とがある。前者は尾根稜線上、後者は尾根稜線からやや下った地点で確認される傾向が見られた。

なお、当地の地山は花崗岩で構成されているものの、岩石としての硬度は無く、ほとんど砂に近い。したがって、後述の古墳石材は、当地で採集したものというよりも、近隣から持ち込まれたものと考えるのが妥当と思われる。

２　才良吉田谷１号墳

【才良吉田谷１号墳概要】
・直径約12mの円墳
・中央に横穴式石室１基
・出土遺物が示す時期は６世紀末

ａ　調査前概況

１号墳は、発掘調査以前から古墳と確認されていたものである。調査前には、中央に大きく盗掘坑が開き、石材が散乱していたため、一見して横穴式石室を埋葬施設とした古墳であると判断できた。

古墳の背後には林道（市道）が通っており、周溝に相当する部分は大きく破壊されていると予想された。また、横穴式石室の石材が散乱している状況から、石室の遺存はあまり期待できないと思われた。

墳丘の北側、全体の約半分ほどが事業地内で調査対象。南部（羨道付近）は事業地外であった。

ｂ　墳丘と周溝

【状況】　南に派生する小規模な尾根上の、標高約190ｍの位置にあたる。後述の才良吉田谷２・３号墳よりも約４ｍほど下になる。

調査前の測量では、直径約16mの円墳と考えられた。調査の結果、周溝の一部が遺存していることを確認した。その周溝の内側を測り、直径約12mの円墳と判断した。

なお、調査区外にあたる墳丘南部の羨道付近には、墳丘盛土内に入っていると見られる石材が数個確認

写真１　１号墳の外護列石状石材

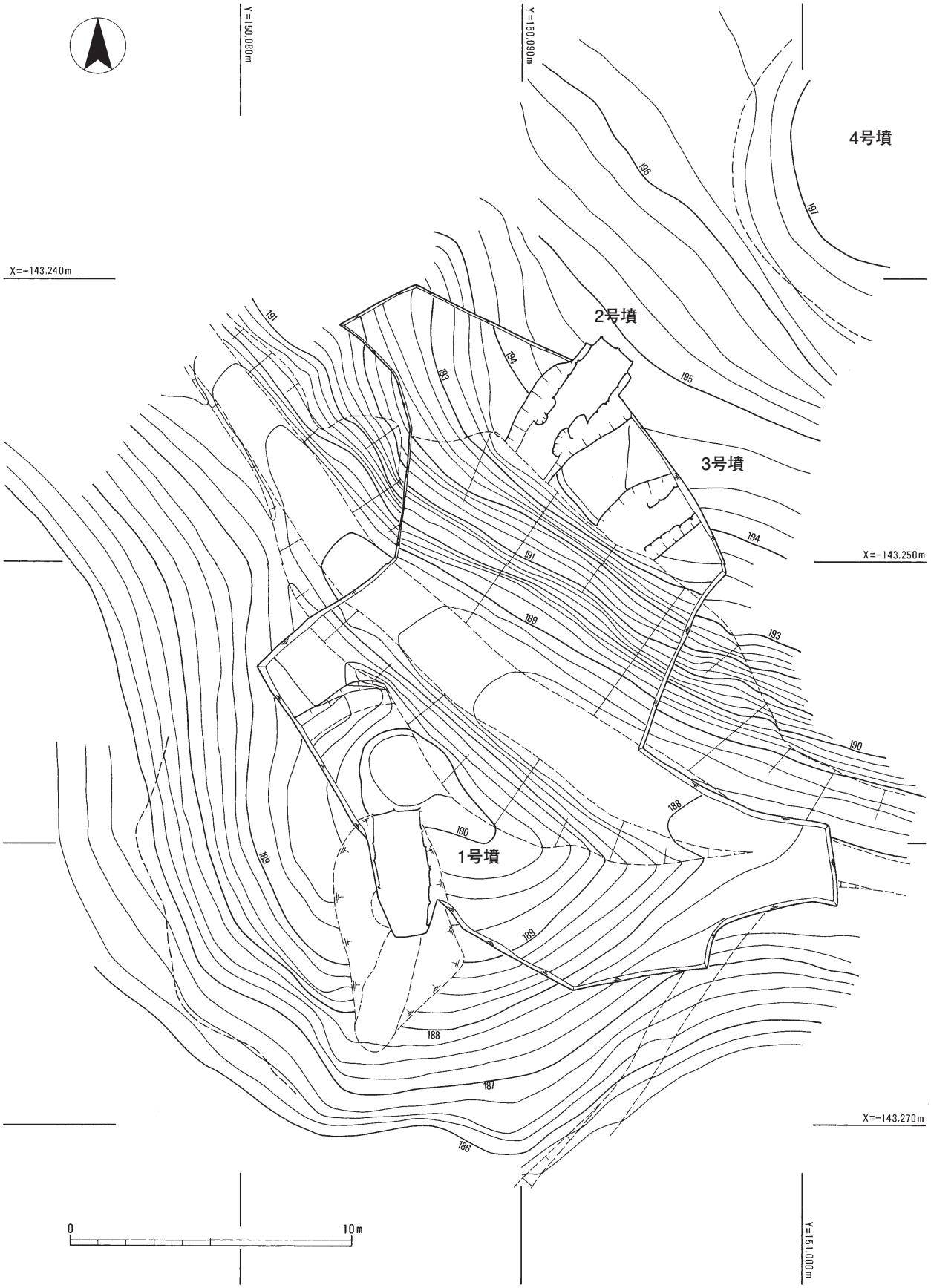
できる。これらは、羨道から伸びる外護列石である可能性が考えられる（写真１）。

【墳丘盛土】　盛土に相当するものは、墳丘の盛土と石室を覆う埋土（掘形埋土）の２種類がある。両者は区別しにくい箇所もあるが、ここでは墳丘盛土についてのみ触れる。

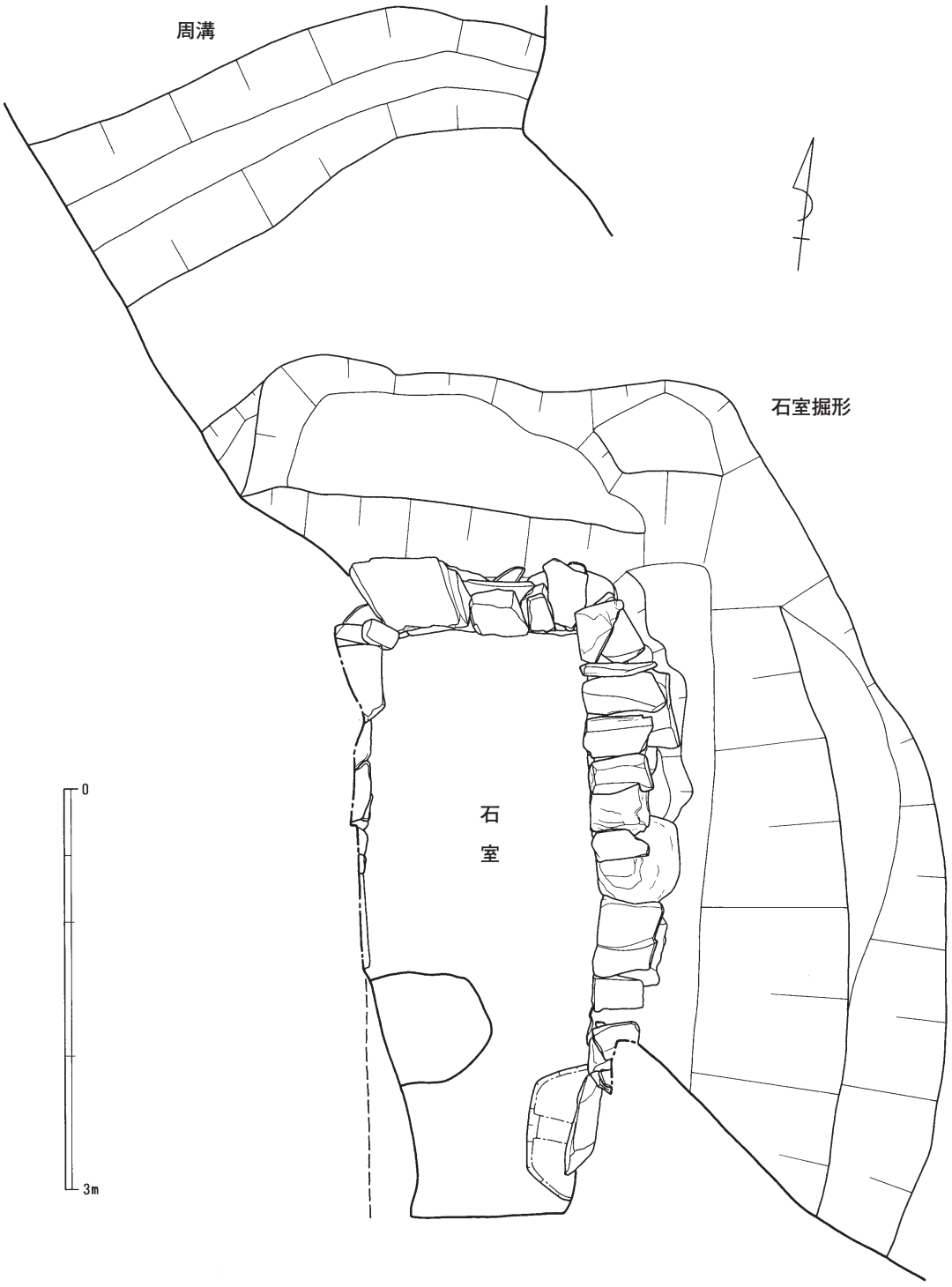
土層断面で確認したところ、純粋に盛土といえるのは約60㎝ほどである。掘形埋土とはやや異なり、黄褐色・褐色系の土である。墳丘東西土層では、旧表土と考えられる暗褐色系土が見られ、その上に30㎝ほどの盛土が見られる。

掘形基底面から墳頂までの高さは約330㎝、調査区

第４図　才良吉田谷１～３号墳調査前測量図（１：600）



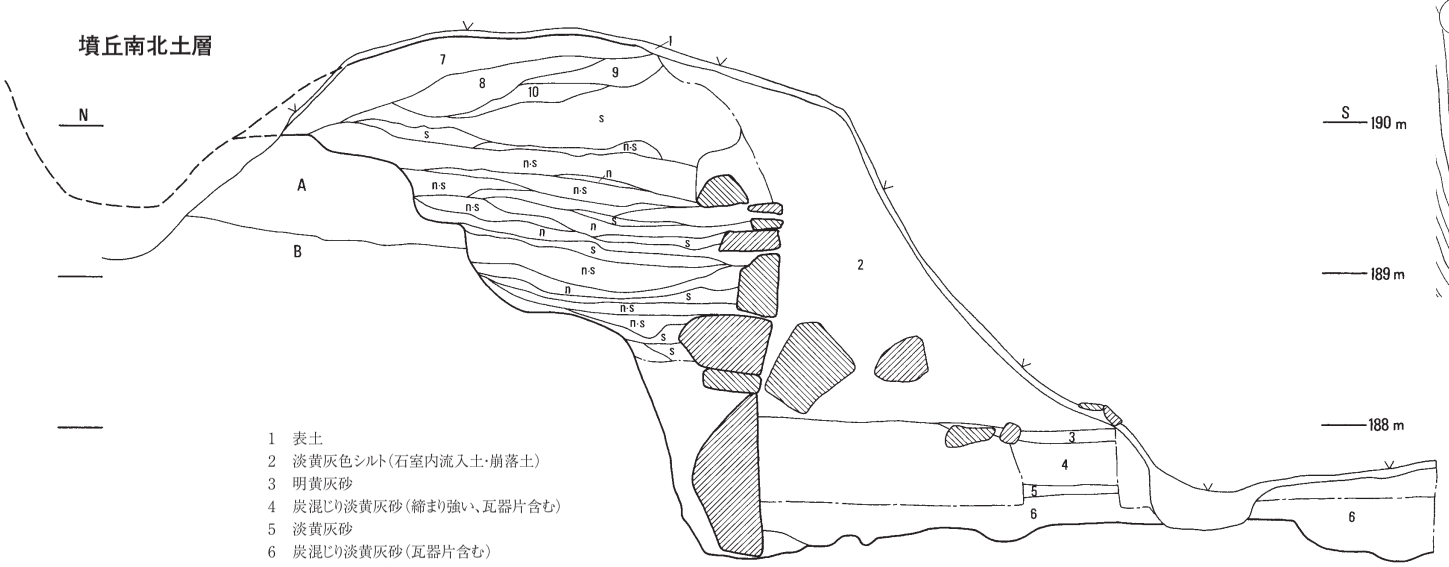
第５図　才良吉田谷１～３号墳調査後平面図（１：200）

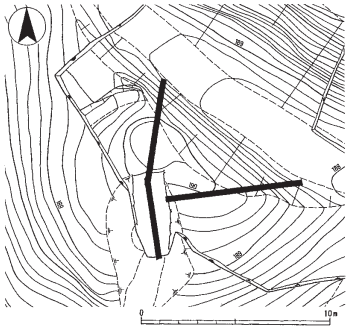


第６図　才良吉田谷１号墳　遺構平面図（１：50）

第７図　才良吉田谷１号墳　墳丘・掘形土層図（１：50）

墳丘南北土層





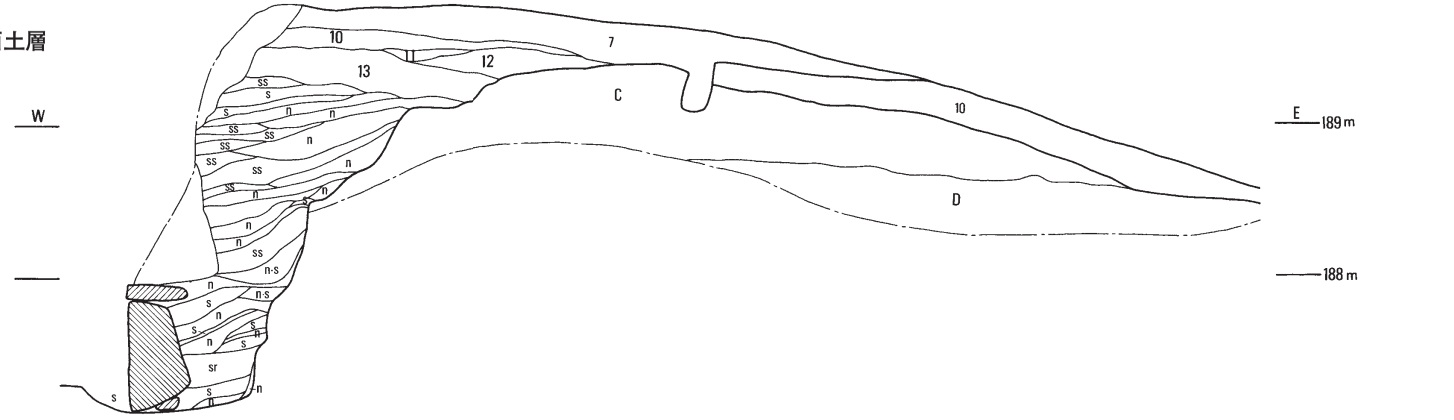
土層図の作成位置図

1　表土
2　淡黄灰色シルト（石室内流入土・崩落土）
3　明黄灰砂
4　炭混じり淡黄灰砂（締まり強い、瓦器片含む）
5　淡黄灰砂
6　炭混じり淡黄灰砂（瓦器片含む）
7　黄褐色土、砂質　10YR5/8
8　黄褐色土　10YR5/8
9　明褐色土　10YR6/6
10　褐色土　10YR4/6
11　黄褐色土　10YR5/8
12　明褐色土　10YR6/6
13　淡褐色土　7.5YR5/4

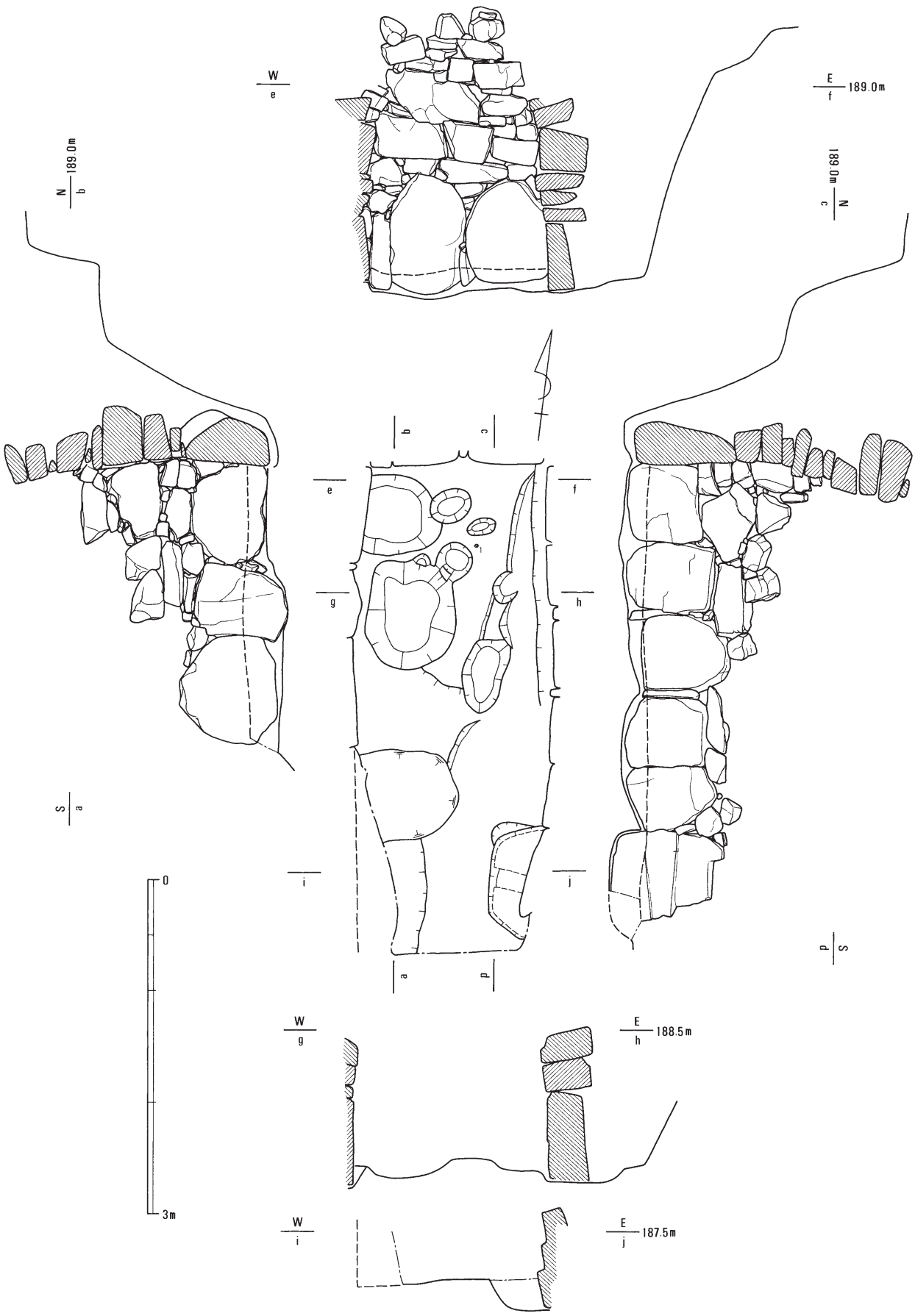
堀形埋土
s；砂　ss；シルト質砂　sr；混礫砂　n；粘質土　n·s；砂混じりシルト

A～D:花崗岩岩盤（媒乱で脆弱）
A　目地粗い、明黄褐　10YR7/6
B　目地細かい、緑灰　10GY6/1
C　黄褐、10YR5/6
D　灰オリーブ～灰白　7.5Y6/2～7/1

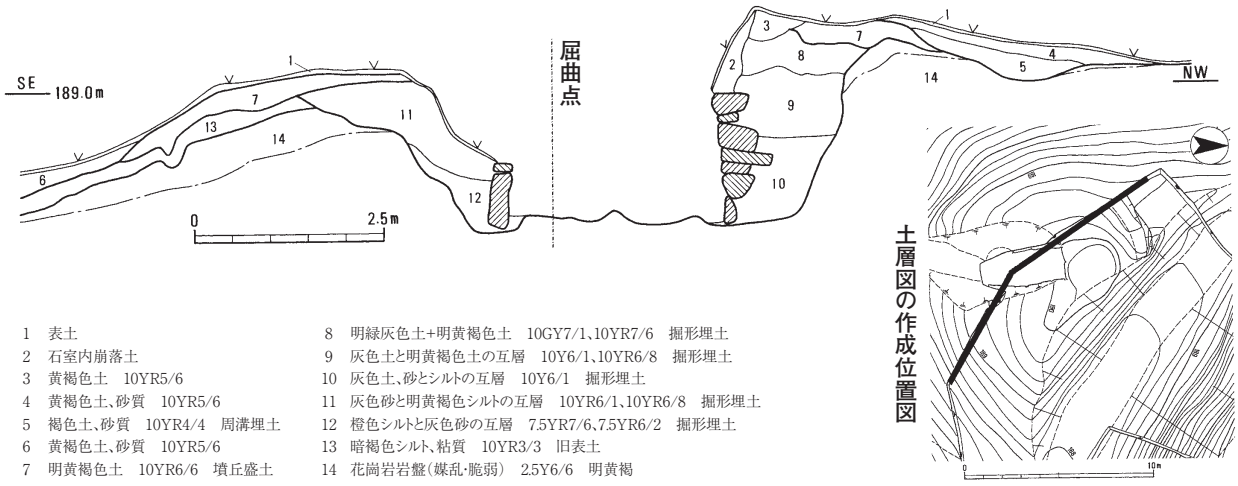
墳丘東西土層



0　2.5m



第８図　才良吉田谷１号墳　石室実測図（１：50）



第９図　才良吉田谷１号墳　調査区南壁土層（１：100）

内の周溝底から墳頂までの高さは約160㎝である。

【周溝】　西側に周溝の一部を確認した。弧状を呈している。南は調査区外にも伸びているが、北部は林道で破壊されている。墳丘の東側では周溝が確認できなかったため、周溝は墳丘を全周せず、北側の高い部分にのみ馬蹄形にめぐるものと想定される。

周溝は、地山面からの深さで約25㎝、掘削幅は約0.7ｍで、断面形は緩やかなＵ字状である。埋土は黄褐色系土の単一層で、墳丘からの流入土が中心と考えられる。

周溝埋土からは、須恵器甕片および土師器長頸壺・壺の破片がまとまって出土した。土器の出土は埋土の中程が多く、周溝底面に接地するような破片は見られなかった。須恵器甕片は小さめの破片が多い。また、墳丘斜面部からも多く出土し、それらの多くは接合して一個体分の甕となった（第22図47）。この状況から見て、須恵器甕は元々墳丘上に置かれいたものと考えられる。また、破片の細かさから見て、転落による自然の破損ではなく、人為的に破壊されたと考えられる。おそらく、周溝が埋没する過程で意図的に破砕され、その破片が周溝内に投棄されたと考えられる。

ｃ　石室

【形状と寸法】　１号墳の埋葬施設は横穴式石室である。墳丘の中央に１基確認した。左片袖式である。石室は大きく破壊されていたが、奥壁部分はほぼ完全な状態であると考えられる。また、石室内には側壁の転落石が多く見られたが、天井石に相当するような大形石材は見られなかった。

写真２　１号墳　石室基底石と掘形

積み上げられた石材から見た石室寸法は、奥壁高2.45ｍ、幅約1.60ｍ、玄室の奥行き約3.25ｍ、玄室最大幅約1.80ｍである（いずれも掘形底面からの寸法）。玄門は、右袖部が調査区外にあたるため不明だが、左片袖式と考えられる（袖の解釈については後述）。

奥壁と玄室最大幅に約20㎝の差があり、石室全体として「胴張り」の形態を呈する。天井の全体および右側壁の大部分は崩壊しているが、奥壁はほぼ遺存していると考えられるため、奥壁高245㎝は実数に近いと考えられる。また、右玄門の状況は、調査区外にあたるため不明。石室の主軸はＮ７°６′Ｗである。

羨道部は調査区外。攪乱坑（盗掘坑）の方向は石室の主軸とは異なり、おおよそＮ15°　Ｅ方向で、その差

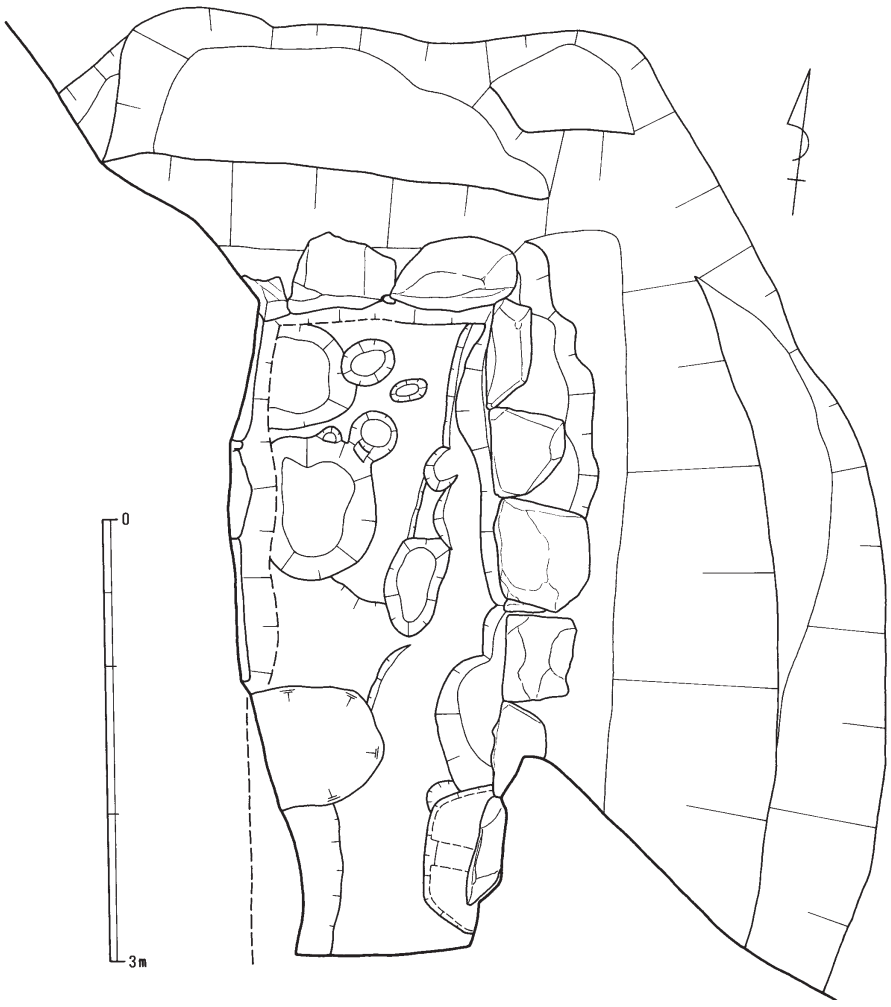
20° 以上である。ただし、これが羨道の方向かどうかは不明である。

【石材】 石材は全て花崗岩。多少の摩滅(ローリング)を受けたものも見られるが少なく、多くは比較的平滑な破断面を持ったものである。基本的に河原石ではなく、山石と考えられる。

石材そのものに人工的な加工の痕跡は見られないが、石材として利用するにあたって、人為的に面を作り出している可能性は高いと思われる。

【石室掘形】 石室掘形は非常に深い。1号墳最大の特徴といってもよい。

最も高い奥壁北側の掘形上端部から基底面までの深さは約2.6mで、地山面が下降する左側壁南部でも2.2mある。調査区内で確認している地山面の高さと奥壁最高所の高さはほぼ同じであることから、掘形内に石室全体がほぼ収まるほどの深さで、天井石のみ掘形よりも出ていたと考えられる。墳丘盛土の一部はこの土を使っていると考えられる。



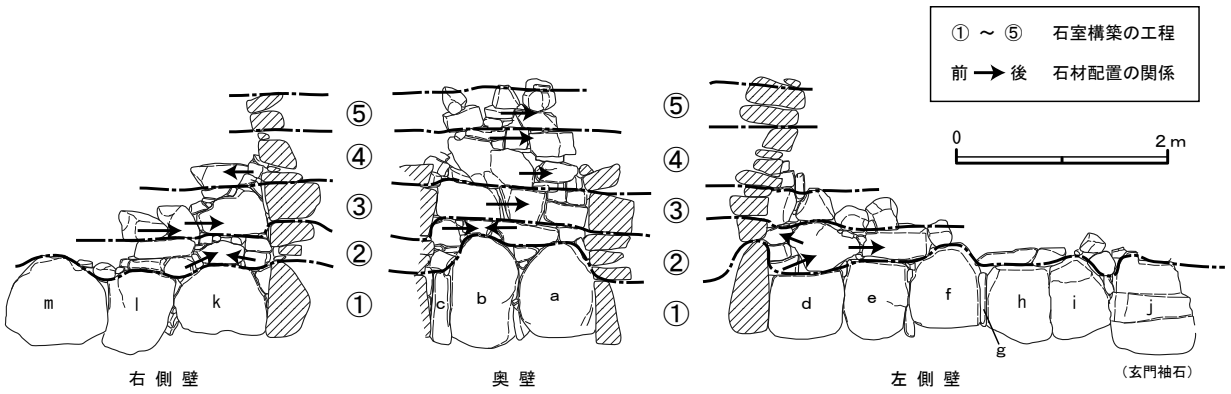
第10図　才良吉田谷1号墳石室・基底石・掘形実測図(1：50)

なお、この地の地山は花崗岩であるが、全体に風化が激しく、極めて脆弱である。とくに標高約189m付近(掘形壁面で確認したレベル)では細砂層状態を示している。このため、古墳築造に伴う掘形の掘削は比較的楽だったのではないかと考えられる。

奥壁側の石室堀形には段の造作が見られる(第7図土層参照)。平面で見ると、奥壁後方側には3段、奥壁と左側壁とのコーナー部分には段は見られず、右側壁外側には3段の造作となっている。これは、堀形埋土と石材との関係から、石材の積み上げに関係するものと考えられる。つまり、基底石を配置する際には最も内側の堀形ラインで充分であったが、基底石よりも上に石材を積み上げる際には、作業スペースがその外側に必要となる。2段目よりも高い段については、この作業スペースにあたるものであろう。したがって、この段を埋める土層は、ひとつの作業工程が収束したことを示すものとして捉えることができる。

石室掘形下端と基底石との関係にも興味深い状況が観察できる。奥壁基底石は、堀形下端にかなり接近した位置に据えられている。つまり、奥壁基底石は石室堀形の掘削幅に合わせているといえる。それに対し、左側壁では基底石と堀方下端との間に70cmもの余裕がある。これが玄門付近では狭くなり、基底石と掘形下端との差は40cm。大形石材を動かすための可動範囲を確保するためか、あるいは当初設計よりも小振りの石室としたためであろうか。

【掘形埋土】 堀形埋土は厚さ5～10cm程度の薄い層が重なる状態を示している。石材構築に伴って各



第11図　才良吉田谷１号墳石室構築の工程

層単位に順次埋められていたと考えられる。埋土は粘質シルト系の土と砂系の土とが交互に積み重なる状況を示している。これは、土の締まり具合を考慮した一種の版築技法と考えることができる。

【床面整形】　石室の構築が終了した後、床面には整地がなされている。整地土は地山掘削土を用いたもので、最大で約10cmほどの厚みがある。礫や平石などは用いられていなかった。

ｄ　石室とその構築方法

【概要】　石室の構築は、基底石（腰石）を最下段とし、その上に積み上げる方法となっている。基底石は石材を縦位に用いるのに対し、その後は石材を横位に用いて構成している。調査範囲からは、基底石を含めて大きく５工程で構築されていると考えられる（第11図）。

【基底石】　奥壁基底石はａ～ｃの３石。立石状に立てられたａ・ｂ２枚が中心となる。石材ｃは目地詰め状の扁平な石材だが、明らかに奥壁基底部を構成しているため、基底石として扱う。この薄さであるため、元々設計された寸法に合わせるため（あるいは、作事中に発生した寸法狂いを修正するため）に用いられたと考えられる。

左側壁基底石はｄ～ｊの７石、右側壁基底石はｋ～ｍの３石をそれぞれ確認した。石材ｊと石材ｍよりも南側は、事業地外となるため未確認である。石材ｇは先述の石材ｃと同様に薄く、寸法合わせの石と見られる。また、石材ｊは玄室玄門の袖石に相当する。

石材の据形面には、基底石に合わせた凹凸が確認できる。これは、基底石の大きさに応じて調整したためと考えられる。なお、基底石はこの凹凸にすっぽり収まっているわけではなく、一度掘った穴に少し土を戻し、その上に据えている状況が観察できた。これは、基底石の上端を揃えるための工夫と考えられる。

写真３　１号墳左側壁基底石裏側の状況

据形は、玄門袖石の石材ｊでは掘形基底面から35cmと深いが、他は20cm程度。石材ｊのみ深くしっかり据えているといえる。

基底石の石材は、大小様々な石であることが裏面の状況から観察できる。とくに石材ｄはかなり扁平である（写真３）。また、石材ａ・ｂ・ｆの縦断面は、上を頂点とする三角形状を呈している。石材に見られるこれらの特徴は、上部にそのまま石材を積み上げることが困難（ないしは不可能）であることを示している。したがって、基底石の背後にあたる掘形内の土を一定程度突き固め、その後に上部工程へ進行させることを前提としていると見なされる。

【玄門】　玄門は石材ｊを袖石として構成されていた

写真４　１号墳玄門部分

と考えられる。石材ｊの据形は他の基底石よりも深く、幅も広い。したがって、石材ｊは当初袖石として配置されたことはまず間違いない。ただし、特殊ともいえる特徴を持っている（写真４）。

まず、石材ｊ据形の内側にはかなりの余裕がある。石材ｊ以外の基底石に見られる据形と比べ、この空間はあまりにも異質である。つぎに、室側の面が３段ほどの段を有していることである。他の基底石が比較的平滑な面を室側に揃えているのと比べても、この状態は少し異様である。さらに、石材ｊと左側壁の面とはほぼ揃っている。このため、一見無袖のようにも見える。

これらのことから、石材ｊは当初設計で左袖石として配置されたが、その後に石材を割り、左袖を除去する形態に変更したのではないかと考えられる。

このため、１号墳石室を無袖式と見ることもできるが、石材ｊを玄門石とする意識は残ったと考えられるため、右片袖式（あるいは左側壁の状況によっては両袖式）としておく。

【石室の構築工程】　基底石が石材を縦位に用いる方法なのに対し、基底石上に積まれる石材は基本的に横位に積まれている。さらに、これらの横積み石材は、狭い方の面を内側にして積み上げられている。これは、堀形石室内からの観察のみではよく分からなかったが、堀形を掘削して確認した結果判明したことである。石材は丸みを帯びたものは少なく、平滑な破断面を持った略方形の石材が中心である。

基底石の配置を第１工程として石材の積み上げを目地で確認すると、奥壁で５工程、右側壁で４工程、左側壁で４工程が確認できる（第11図）。遺存部分での判断では、奥壁の頂部はほぼ天井石直下と考えられるため、奥壁側の工程は概ね５工程と見てよいだろう。

【奥壁・側壁】　側壁は②工程あたりで内傾し、天井へと至る。傾斜角は、右側壁で15°、左側壁で10°である。奥壁は、基底石がやや外開きになっており、やはり第２工程から約15°で内傾し天井に至る。

②工程以降に用いられる石材は、60 ～ 70㎝幅の中形のものと、30 ～ 50㎝幅の小形のものとが見られる。部分的に交互に使っているところが見られる。それぞれの工程では、中形の石材を中心としつつも、各所に小形石材を用いている状況が確認できる。

目地の通りを側壁と奥壁とで比較すると、基底石配置の段階から、奥壁の方が常にやや高い状態を保ちながら積み上げられている。そして、側壁基底石は、奥壁基底石の頂部よりもやや下がりつつ、その上端部を揃えようという意識も見られる。これは、左側壁基底石ｂが他の基底石よりも据形深度の深いことからも推察できる。

第11図では、石材の積み上げ関係を→で示した。→の向く方が後で積まれたものである。全体に各壁面ともに左→右へと積まれる傾向にあるといえるが稀に右→左の場合も見られる。これは、用材のバランスが主な理由かと考えられる。

④工程の右側壁と奥壁との境目（基底石下面から約1.5mほど）では、持送り技法が見られる（写真５）。天井石の大きさがそれほど大きくないための工夫と考えられる。遺存が部分的であるため、全体的な状

写真５　１号墳の持ち送り技法

況までは確認できない。

e　石室床面と施設

【概況】　石室は、鎌倉時代頃には開口していたようで、この時期の攪乱土坑が複数見られた。そのため、原位置を保った遺物は、金環１点のみであった。

【床面の施設・遺物】　床面は、石室整形時の整地土層のみが確認でき、敷石や列石などの施設は確認されなかった。

床面上で原位置を保っていたと考えられる遺物には、金環１点がある。この遺物は、奥壁から約75㎝、左側壁から約62㎝離れた地点である（第８図）。埋葬者の頭部の位置を示す可能性が考えられる。

これ以外の出土遺物は、いずれも床面埋土内からの出土であり、後世の撹乱を受けたと考えられるものである。床面の土は、40㎝グリッドを設定（第２図）のうえ、全て持ち帰り、篩いがけ・洗浄をした。遺物には、もう１点の金環のほか、馬具・鉄刀・刀子・鉄鏃・須恵器（高坏・坏）などがある。また、２つの金環は形状が異なることから、２対分（合計４個）はあったと考えられる。篩いがけした埋土内からは、少量の玉類と鉄製品・土器の残片が出土した。

f　その他

調査区外にある羨道部分には石室構築材と考えられる石が散乱している。そのうちのいくつかには矢穴（楔穴）が確認できた（写真６）。矢穴は幅４㎝・深さ5.5㎝の小形のものであり、江戸時代後期以降の特徴と考えられる。

これらのことから、１号墳の石室材は江戸時代後期頃に石材採取のため抜き取られ、古墳上で破砕されたうえで一部持ち去られたと考えられる。天井石に相当する石材が見られなかったのも、後世にその石材が再利用されたためではないかと考えられる。

写真６　矢穴が見られる石材（接合したもの）

３　才良吉田谷２号墳

【才良吉田谷２号墳概要】
・直径約10ｍの円墳
・中央に横穴式石室１基
・出土遺物が示す時期は７世紀中葉

a　調査前概況

２号墳のある地点は、尾根上の標高約194ｍの位置である。１号墳よりも４ｍほど高い。調査前には若干の平坦地として認識できたものの、古墳が存在していると明確に認識することはできなかった。調査の結果、東側には３号墳が隣接していることが判明している。

石室奥壁部分が最北部で、それ以南が事業地内。墳丘北部は事業地外。南端は山道（市道）で削平されている。

b　墳丘と周溝

【墳丘】　周溝に相当する遺構が無いため、明確な墳丘裾を提示できない。調査区外の北側には、馬蹄形に巡る周溝がある可能性はある。墳丘形態は明確に指摘できないが、とりあえず円墳と考えておく。

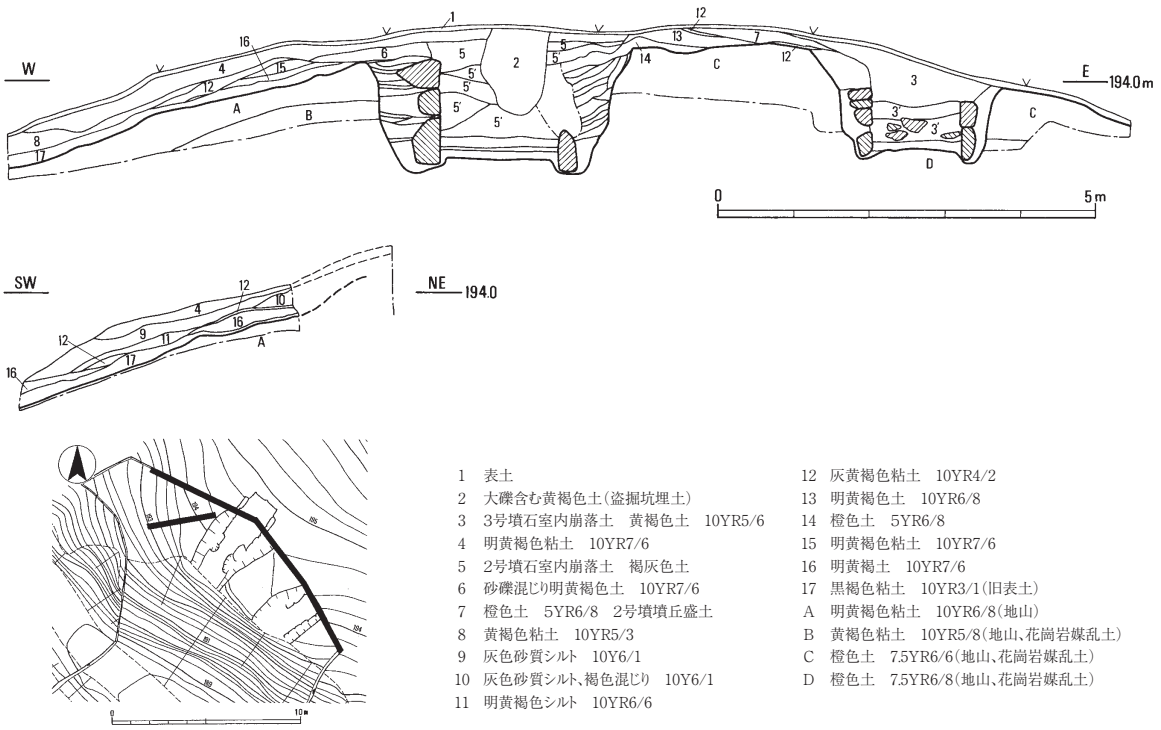
石室の東側には若干の盛土が確認できる（第12図）ので、その端部を墳丘裾と認識しておく。２号墳の東には、接するように３号墳があるので、東側の墳丘裾は明確に指摘できない。

石室の中心から上記の盛土西端までは約4.6ｍである。ここから、調査区内の墳丘東西幅を9.2ｍと見ておく。墳丘規模は、調査区外でやや広がることが予想できる。以上のことから、２号墳は直径10ｍ程度の円墳と考えておく。

【墳丘盛土】

墳丘下面には旧表土層が確認でき、その上には最大40㎝厚の堆積土がある（第12図層４～16）これが２号

墳の盛土に相当すると考えられる。盛土に、とくに目立った構築方法は見られない。おそらく、旧表土上に後述の石室掘方埋土をそのまま置いている状況



1　表土
2　大礫含む黄褐色土(盗掘坑埋土)
3　3号墳石室内崩落土　黄褐色土　10YR5/6
4　明黄褐色粘土　10YR7/6
5　2号墳石室内崩落土　褐灰色土
6　砂礫混じり明黄褐色土　10YR7/6
7　橙色土　5YR6/8　2号墳墳丘盛土
8　黄褐色粘土　10YR5/3
9　灰色砂質シルト　10Y6/1
10　灰色砂質シルト､褐色混じり　10Y6/1
11　明黄褐色シルト　10YR6/6
12　灰黄褐色粘土　10YR4/2
13　明黄褐色土　10YR6/8
14　橙色土　5YR6/8
15　明黄褐色粘土　10YR7/6
16　明黄褐土　10YR7/6
17　黒褐色粘土　10YR3/1(旧表土)
A　明黄褐色粘土　10YR6/8(地山)
B　黄褐色粘土　10YR5/8(地山､花崗岩媒乱土)
C　橙色土　7.5YR6/6(地山､花崗岩媒乱土)
D　橙色土　7.5YR6/8(地山､花崗岩媒乱土)

第12図　才良吉田谷２・３号墳調査区北壁他墳丘土層(１：100)

と見られる。

ｃ　石室

【形状と寸法】　２号墳の埋葬施設は横穴式石室で、墳丘の中央に１基確認した。石室の形態は両袖式である。

積み上げられた石材から見た石室寸法は、奥壁残存高1.50m、幅約1.50m、玄室の奥行き約2.75m、玄室最大幅約1.60m、玄門幅0.93m、羨道長はおよそ1.45mである。石室全体の長さは、羨道先端の石材が不明ながら､おおよそ4.20mと考えられる。天井の全体および左側壁の大部分は崩壊している。

石室の主軸は､N38° 20′ 16″ Eである。

【石材】　石材は全て花崗岩。ローリングを受けた石材は１号墳よりもさらに少ない。多くが平滑な破断面を持った｢山石｣である。石材そのものに加工の痕跡は見られない。

【石室掘形】　奥壁側は調査区外のため、側壁の状況を記述する。掘形横幅は250㎝で、石室基底石の規模とほぼ同じ。基底石が設置される位置には据方が掘り込まれる。玄室部の据方は堀方床面から約20㎝と浅いが、玄門(袖石)の石材据形は､右袖は30㎝､左袖は側壁と同様約20㎝である。この差は、使用石材の大きさ(とくに高さ)に関係していると考えられる。

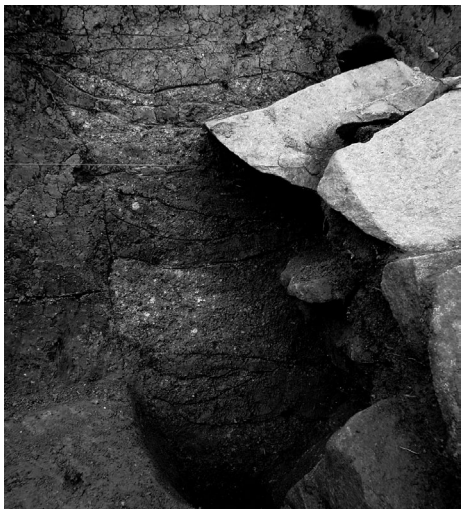


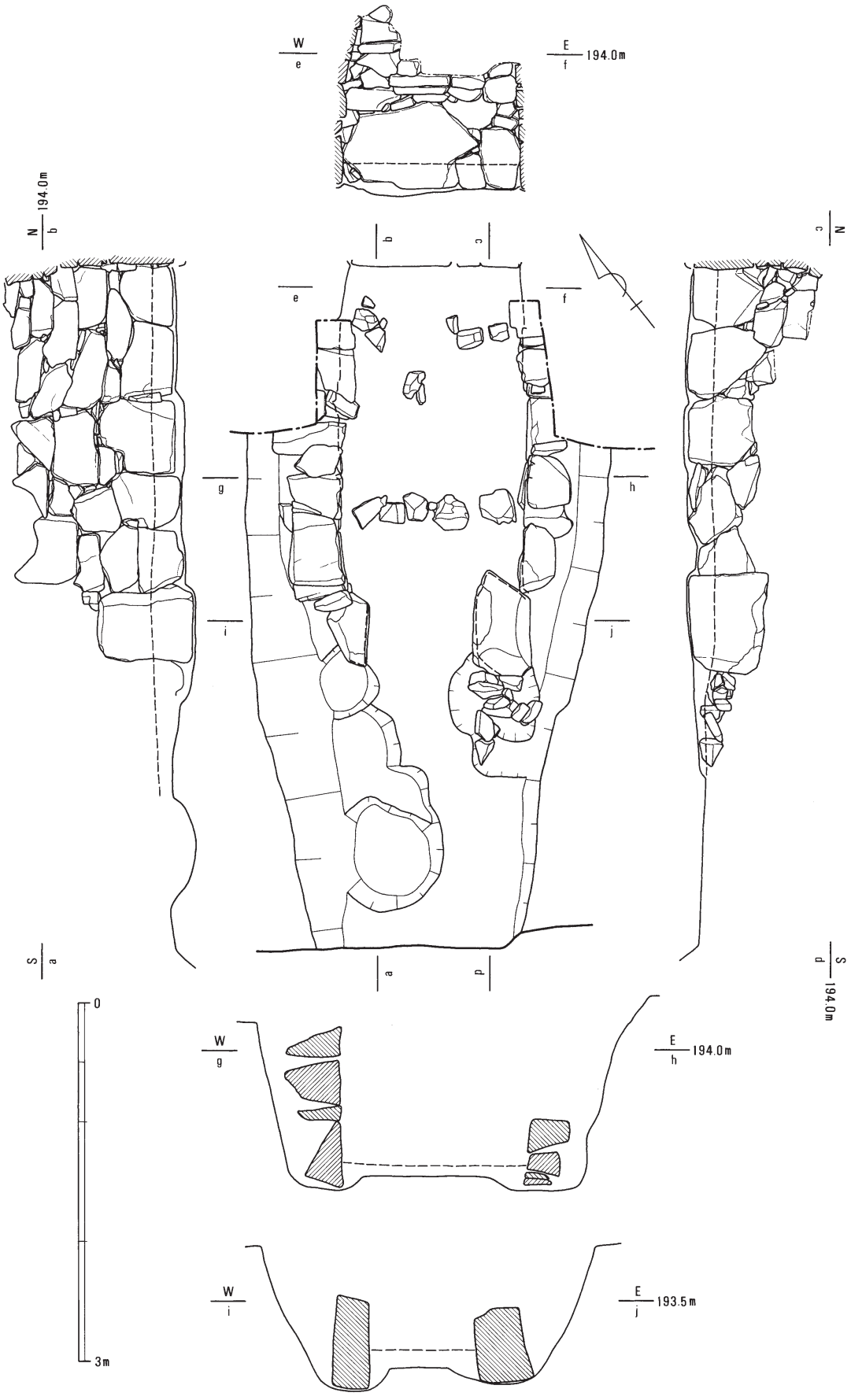
写真７　２号墳石室掘形の状況

袖石の前面より前には、石材据形の掘り込みは見られない。

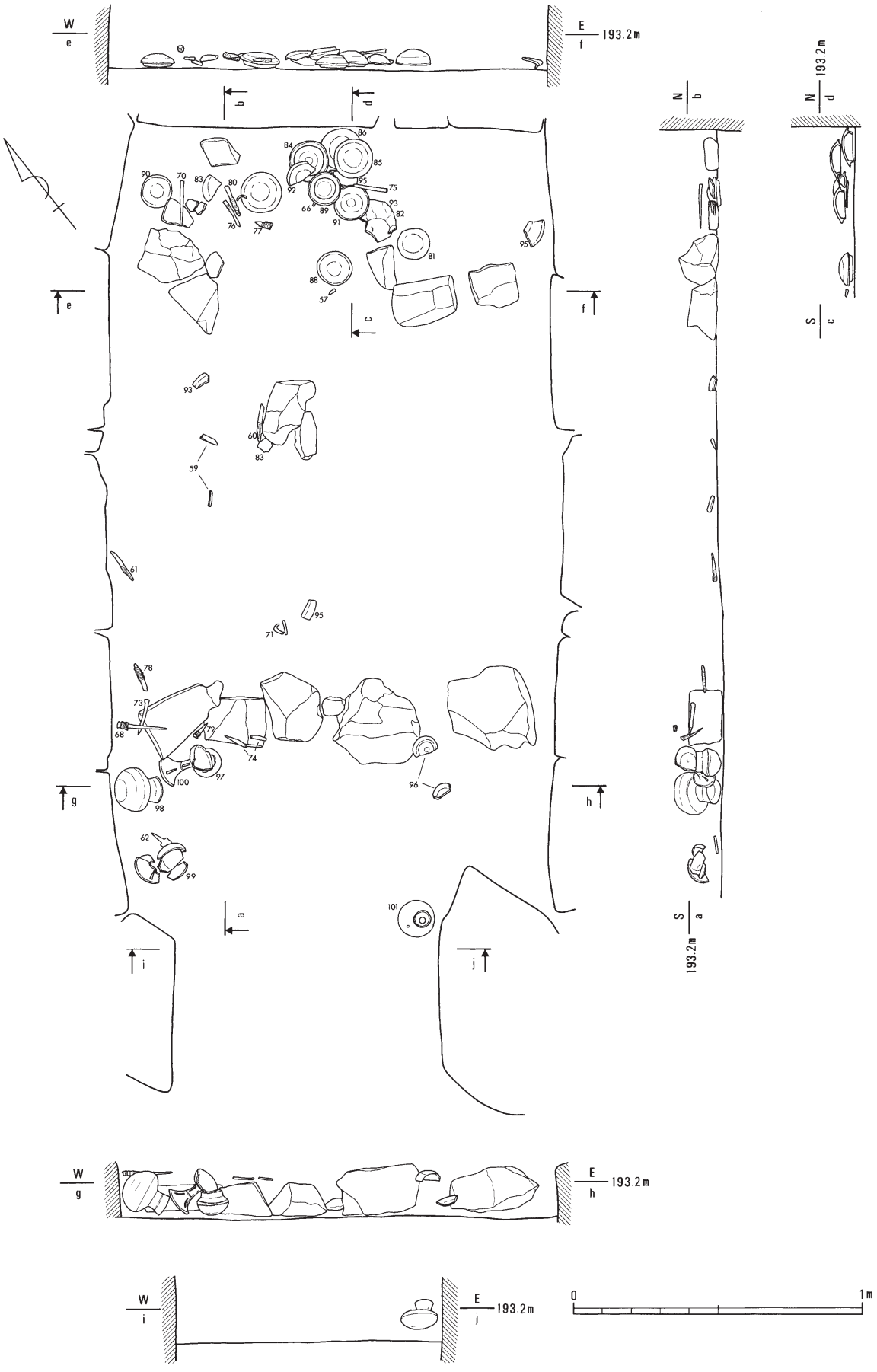
羨道部の前面にはやや乱れた面となっているが、排水溝には相当しないと考えられる。

【掘形埋土】　掘形は、石室の構築と連動しながら埋め戻されている。掘形埋土は粘質土と砂質土とが互層となっており、版築技法に近いものと考えられる(写真７・第12・16図)。

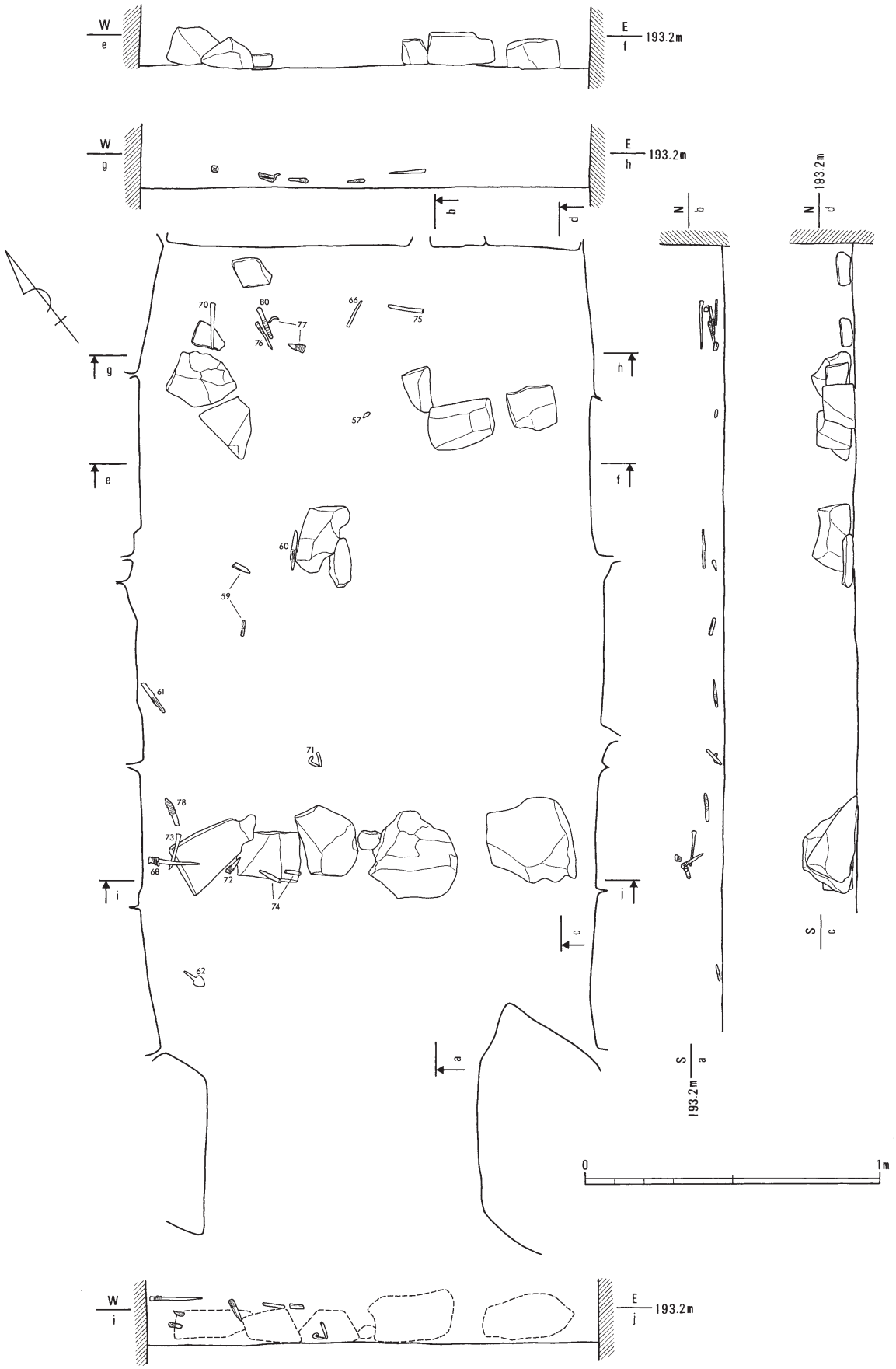
【床面整形】　石室の構築後、床面には整地がなされている。整地は地山掘削土を用いており、厚いとこ



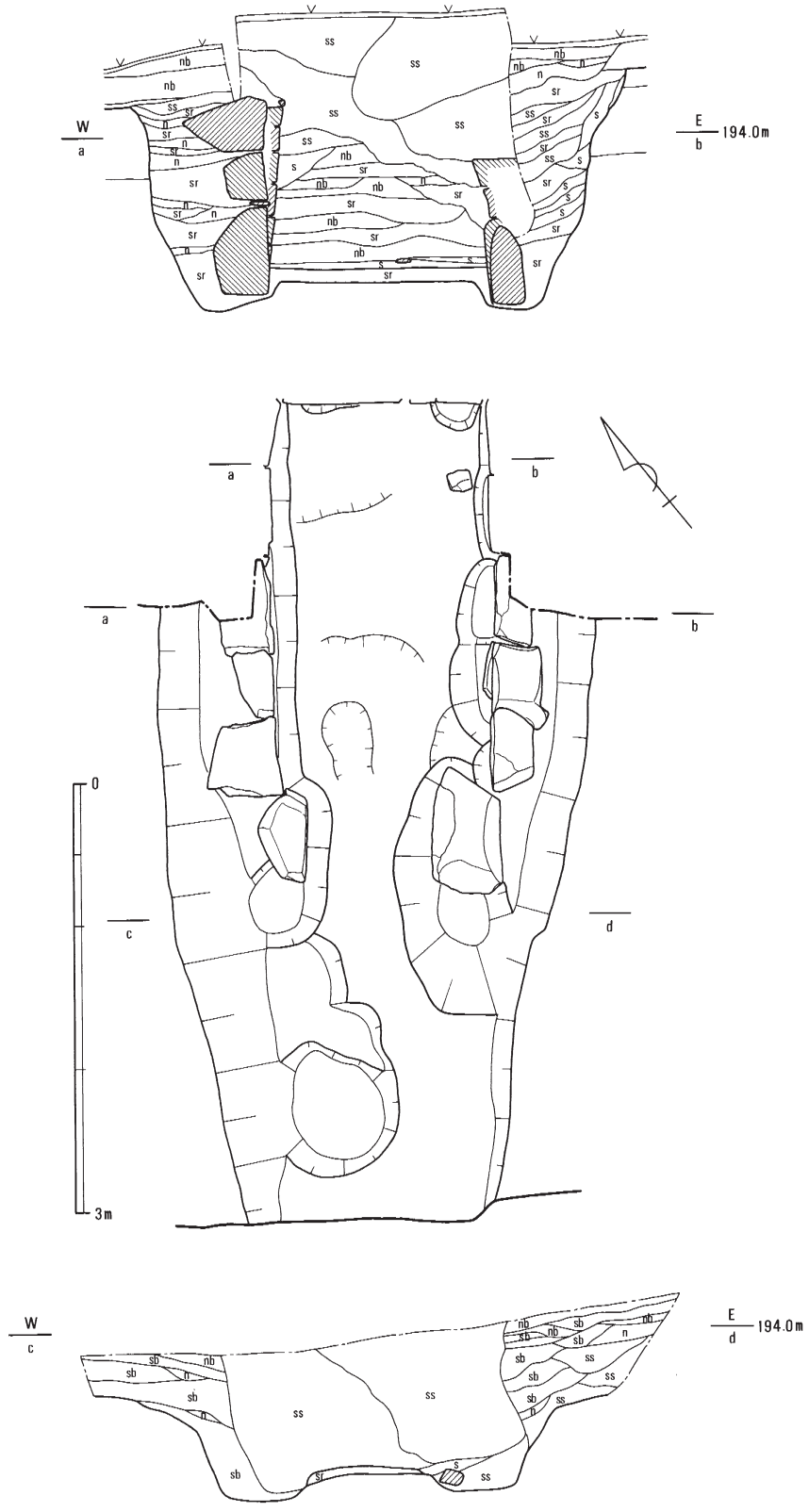
第13図　才良吉田谷２号墳石室実測図（１：50）



第14図　才良吉田谷２号墳石室内遺物出土状況①(全点　１：20)



第15図　才良吉田谷２号墳石室内遺物出土状況②(鉄製品、石のみ　１：20)



掘形他埋土
s：砂　ss：シルト質砂　sr：混礫砂　n：粘質土　nb：小ブロック混じり砂

第16図　才良吉田谷２号墳石室掘形および土層（１：50）

ろでは約15cmほどとなっている。この結果、石室の基底石は20～25cmほど埋まった状態となっている（第16図）。

d　石室とその構築方法

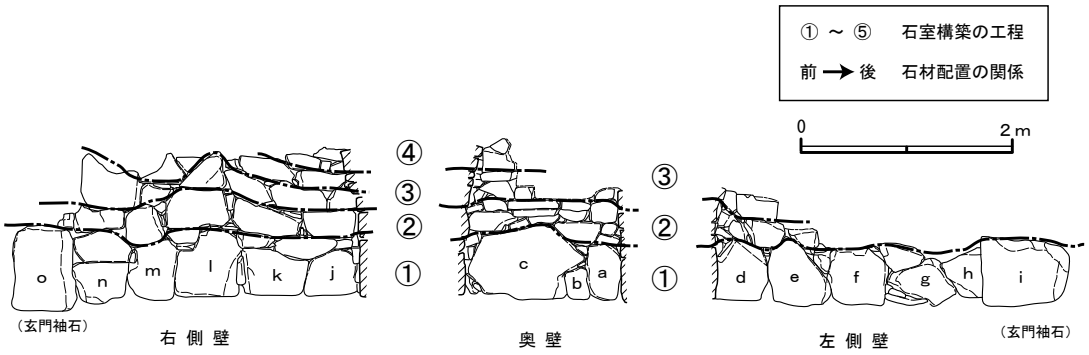
【概要】　石室の構築は、基本的には大きめの基底石を最下段に、その上にはやや小振りな石材を積み上がる方法であるが、利用する石材には１号墳ほどの明確な差異が見いだせない。残存する石材からは、基底石を含めて大きく４工程で構築されていると考えられる（第17図）。

【基底石】　基底石は、石材を横位に用いるものと縦位に用いるものとが混在している。

奥壁基底石はａ～ｃの３石。石材ｃは２号墳石室のなかで最も大きい石材である。石材ｃの隅目地を埋めるかのように、石材ａ・ｂが配されている。

側壁の基底石は、左右それぞれ５石で構成される。いずれも、奥壁寄りの３石は比較的大きいのに対し、玄門に近い２石は小振りである。とくに、左側壁の石材ｇと右側壁の石材ｎは基底石そのものを２石で構成しているかのような状況を呈する。石材が不足していたか、あるいはこの位置で寸法合わせを行ったと考えられる。

【玄門】　玄門は、左右ともに１石のみで構成されるという特徴がある。また、それぞれの大きさがかなり異なる。左袖石を構成する石材ｉは横位に用いられており、玄室側に角が突出している。右袖石を構成する石材ｏは縦位に用いられ、玄室側は鈍



第17図　才良吉田谷２号墳石室構築の工程

角となっている。つまり、左右の袖部内側は、袖石の形によって石室側の空間形態が異なっている。

【羨道】　袖石を構成する石材ｉと石材ｏは、そのまま羨道の一部を構成する。石材ｉの南側には小形の石材が集積しており、石材ｏの前面は土坑状を呈する。これらは、盗掘（ないしは後世の改変）により、石材が抜き取られた痕跡と考えられる。この部分よりも前には石材の据形は見られない。したがって、この部分が石室（羨道）の端部と考えられる。

羨道部の長さは、上記石材の状況から玄門位置が明確にしずらいが、おおよそ1.45mと考えられる。なお、羨道部の前面には、閉塞石に相当するものは認められなかった。

【石室の構築工程】　先述のように、基底石は石材を横位に用いるものと縦位に用いるものとが混在している。基底石の配置を第１工程として石材の積み上げを目地で確認すると、奥壁と右側壁で４工程、左側壁で３工程が確認できる（第17図）。

観察しやすい右側壁で見ると、①工程の段階ですでに上端部が揃わないが、小形石材を補充することで何とか横目地を確保しようとする工夫が伺える。しかし、石材ｌが相対的に大きいにもかかわらず、工程②でその上に置かれた石材がやはり大きかったため、石材ｌを中心に裾広がりの目地が通ってしまっている。この状況は続く③工程でも解消されず、やはり石材ｌを中心とした裾広がりの目地となっている。

また、右側壁の中央部、石材ｋ・ｌ間には左斜め上方に走る目地ラインが見られる。このラインを境に、石積みのズレが生じ、石室が崩れていると考えられる。石室の積み方として、あまり精巧とはいえない事例である。

写真８　２号墳奥壁と右側壁の組合せ

なお、奥壁と右側壁との間には、石材を交互に組み合わせている状況が確認できる（写真８）。これは、強度を増すための工夫かと考えられる。なお、この工法は、奥壁と左側壁との関係では見られなかった。

【奥壁と側壁】　奥壁は、②工程あたりまではほぼ垂直に積み上げるが、③工程あたりでやや内傾する。基底石に２号墳最大の石材ｃを用いながらも、②工程以後はかなり小形の石材しか用いていない。

側壁も、②工程まではほぼ垂直で、③工程から内傾する。内傾角度は右側壁で約５°である。

ｅ　石室床面と施設

【概況】　石室の崩壊が比較的早い時期だったよう

で、石室床面からは副葬品等が良好な状態で出土した。多くが原位置を保った状態と考えられる。また、床面には仕切りを意識した石列も見られた。

【仕切石列】　床面の玄門寄りには幅20 ～ 30㎝大の石が５個並べられている。これは、石室を区切る石と見ることもできるが、後述の木棺釘がこの上に見られることから、棺台の役割も果たしていたと考えられる。ただし、棺台とすれば北側に対応する石が見あたらない。したがって、南側のみ棺台として利用されたと考えておくべきだろう。以下、「仕切石列」とする。

【木棺】　床面から釘が出土している。１基分の木棺を構成していた釘と考えられる。その位置から木棺規模の復元が可能である。幅約0.90m、長さ約1.95mで、右側壁寄りに納められていたと考えられる。

奥壁に近い位置では、坏身の下から釘が出土。このことから、坏類の一部は棺の上に置かれていたか、あるいは棺内に納められていたと考えられる。釘に囲まれた範囲に刀子が３個体あり、棺内に納められた副葬品と考えられる。なお、棺内の副葬品としてはこの刀子のみである。

【副葬品類の状況】　原位置を保っていると考えられる副葬品等が確認できた。副葬品類は右側壁寄りに多く、左側壁寄りには少ない。ちなみに、これは３号墳とも共通する要素である。なお、床面は40㎝四方のグリッド設定を行い（第２図）、全ての土を持ち帰って篩がけ・洗浄を実施した。その結果、玉類については、１点の小玉と琥珀玉片のみであった。

仕切石列を境に、副葬品の性質が異なっている。手前には須恵器高坏・壺・短頸壺など。高坏は、玄門寄りに１台を正立させ（これは転落石で破壊されている）、もう１台は正立させた短頸壺に重ねて横置きされている。その横には、口縁部を下にして右側壁に立てかけられた須恵器壺がある。短頸壺に重ねられた高坏の脚部片が、左側壁の奥壁寄りのところから出土。破砕した後に、意図的に破片を移動させていると考えられる。

仕切石列の左側壁寄りからは、須恵器坏Ｇが割れた状態で出土。坏Ｇは仕切石列上に置かれていた可能性大きい。また、玄門の左側壁に寄り添うかたちで須恵器平瓶が正立して置かれていた。

写真９　２号墳石室の仕切石列

奥壁寄りには須恵器・土師器の坏類がまとまっている。須恵器坏は身がほとんどで、蓋は１個体のみであった。土器の出土状況は、口縁部を下にしたものや上にしたものなど様々である。坏類は、在地産のもののほか、猿投産（猿投系）のものを含んでいる。

鉄鏃は羨道に１点、玄門に１点が確認された。玄門の１点は正立した高坏の横にあった。羨道のものは掘削中に出土したため出土状況は不明である。

【意図的に破砕された須恵器】　意図的に破砕された須恵器坏蓋２点、坏身２点がある。石室床面に散乱していた。接合しても完全なかたちにならないものばかりであるため、当時の手法（作法）として、破片の一部のみを石室内に入れたものと考えられる。完形で残る坏は身ばかり（８点）であるのに対し、破砕されたのは蓋坏２セット（ただし、組み合わせはあわない）であり、何らかの関係が考えられる。

【その他】

表土から石室埋土内にかけて盗掘坑がある。しかし、石材が早くに崩壊していたためか、床面に達する前に諦めている（第12図土層２）。羨道部の石材は、この段階で一部抜き取られた可能性が考えられる。

また、石室埋土（崩落土）内から須恵器甕片が出土している。１号墳と同様、墳丘上に須恵器甕を置いていた可能性がある。

４　才良吉田谷３号墳

【才良吉田谷３号墳概要】
・墳形・墳丘規模ともに不明
・横穴式石室１基
・出土遺物が示す時期は６世紀後葉

a　調査前概況

尾根上の標高約194mの位置にある。１号墳よりも４mほど高い。西側には２号墳が隣接する。調査前の測量では若干の平坦地が見られた程度の場所で、古墳が存在することは想定していなかった。

b　墳丘と周溝

墳丘や周溝は確認できなかった。また、明確な盛土も認識できなかった。これらは、後出の２号墳によって破壊されたとも考えられるが、その痕跡も見られなかった。

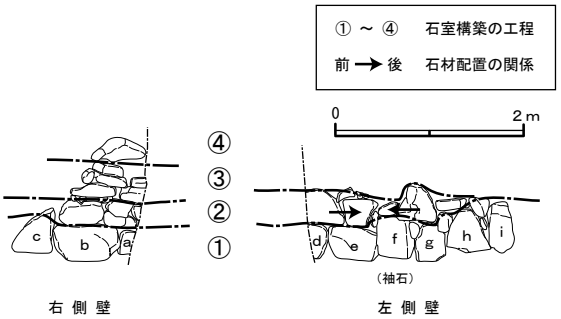
羨道の先端は、調査段階の崖面に達していた。このため、林道の開削によって石室の先端部分は破壊されていると考えられる。

c　石室

【形状と寸法】　３号墳の埋葬施設は横穴式石室である。石室の形態は左片袖式である。奥壁を含む玄室の北半部は調査区外である。

掘形基底面からの石室寸法は、玄室の奥行き0.8m以上、玄室最大幅約1.10m、玄門幅約1.00m、羨道長約1.50mで、石室全長は2.2m以上である。石室の高さは、最もよく残っているところで1.3mほど。床面の整地土上からは1.1mほどなので、かなり低い。全体に崩壊が激しいが、右側壁の一部はよく残っている。

石室の主軸は、N55° 30′ Eである。



第18図　才良吉田谷３号墳石室構築の工程

写真10　３号墳の石材

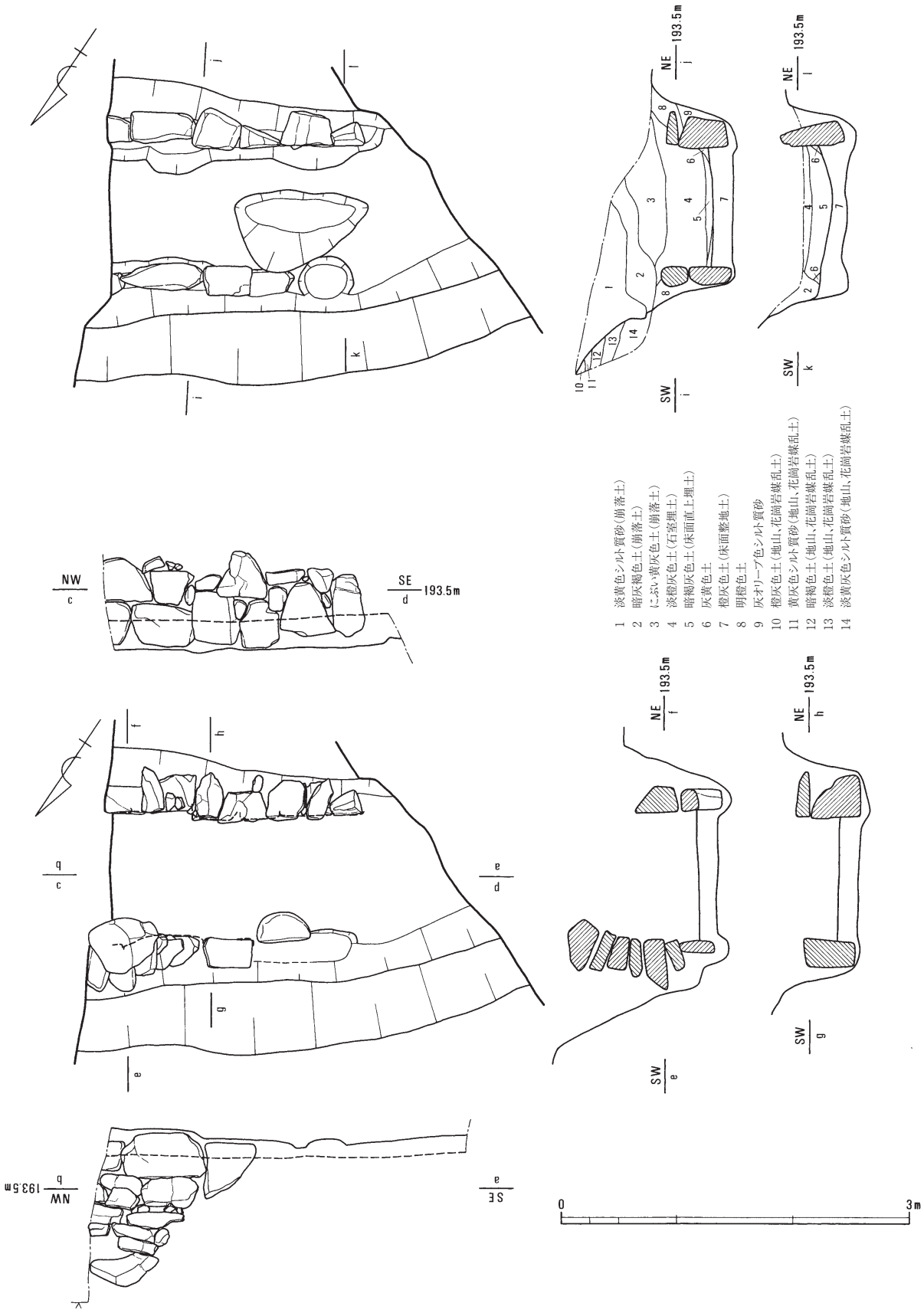
【石材】　石材は全て花崗岩。ローリングを受けた石材は比較的多い。平滑な破断面を持った「山石」も見られる。石材そのものに加工の痕跡は見られないが、自然面の残存状況から判断して、意図的に割ったと考えられる石材もある。

【石室掘形】　玄室の奥壁寄りは調査区外。石室掘形の横幅は、調査区内の玄室最奥部で2.60m、基底面幅は1.70m。基底石の規模とほぼ同じだが、右側壁では腰石上に積み上げる石材の幅が広かったために意図的に拡げている箇所も見られる。掘形底面は、羨道部分が皿状にくぼみ、羨道端部と玄室部分はやや高くなっている。

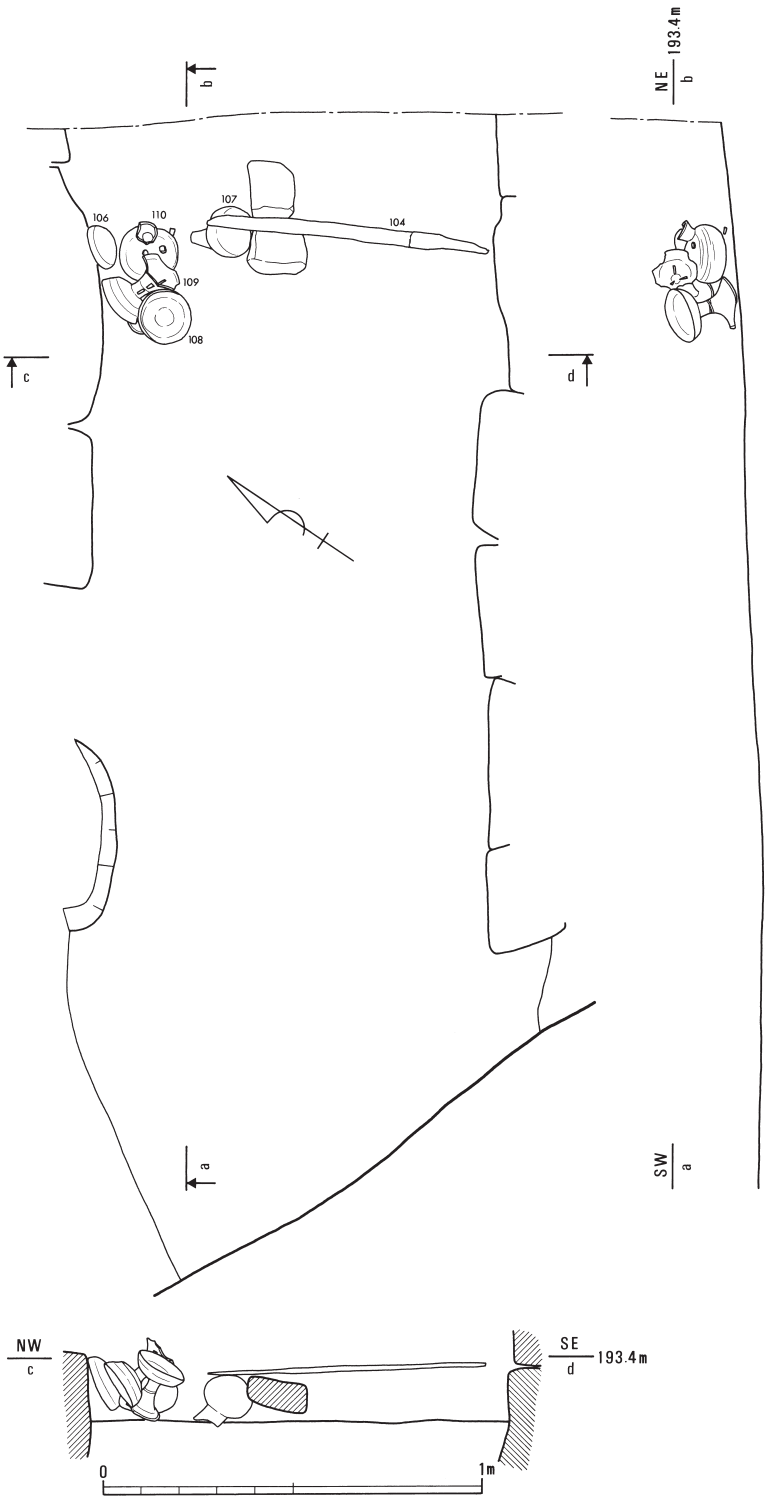
基底石が設置される位置には石材据形が掘り込まれる。石材据形は掘形床面から約10cmで、石材に応じた窪みを伴っていない。とくに羨道左側壁部は据方の底から10cm以上浮いた状態で石材が見られる。状況から見て、一端一律に据方を設定したようである。玄門（袖石）の石材据形もあまり変わらない。

【掘形埋土】石室の構築に伴い、掘形が埋め戻されている。掘形は、先述のように石材の大きさによって一部拡張されている。小規模な石室であるためか、１・２号墳で見られたような版築状の互層は観察できなかった。

【床面整形】　石室の構築後、床面には整地がなされている。整地は地山掘削土で、厚いところでは15cmを超える整地土が見られる。このため、基底石は20



第19図　才良吉田谷３号墳石室・堀形実測図（１：50）



第20図　才良吉田谷３号墳石室内遺物出土状況（１：20）

～ 25cmほど埋まった状態となっている

羨道側の床面では、整地土層上に暗褐色系粘質土層の堆積が見られた。

ｄ　石室とその構築方法

【概要】　石室は、右側壁は奥壁寄りは遺存状態が良いものの、羨道側は大きく遺失している。対する左側壁は、基底石の遺存は良いものの、それよりも上部は１工程分が遺存するに止まる。石室内の副葬品が良好なことを勘案すれば、この石室の遺存状況は、後出の２号墳構築にあたって破壊された可能性を示唆する。

遺存した範囲で見ると、基底石を含めて４工程ほどで構築されていると考えられる（第18図）。

【基底石】　基底石は、石材を横位に用いるものと縦位に用いるものとが混在しているが、概ね縦位に用いる方法である。遺存した範囲で見ると、やや大きめの石材を基底石とし、その上にはやや小振りな石材を積み上がる方法であり、この点では先述の１・２号墳と大きな差異は無い。しかし、基底石の据わりが悪く、左側壁の羨道側では据形に土を補充している状況すら確認できる。

【玄門】　平面・立面の状況を総合すると、左側壁の石材ｆが玄門にあたると考えられる。玄門幅は約1.0mで、玄室幅が約1.10mであるため、ほとんど「袖」とは言えないような状態である。

【羨道】　幅30 ～ 40cmほどの小形の石材が多い。残存状況によるのであろうか、あまり明確な目地を見いだすことはできない。左側壁で見た羨道長は、約1.6mである。

羨道部の先端には、閉塞石に相当するものは認められなかった。

【石室の構築工程】　右側壁では横石積みの状況が確認できるが、確認できた幅はあまりにも狭い。推測に近いが、４工程ほどで積み上げられていると考えられる（第18図）。

【側壁】　側壁の基底石は薄手の石材で、右側壁では幅30cmにも満たない石材も見られる。底面が平坦になることを優先したためか、頂部に三角形の頂点が

写真11　３号墳の須恵器他出土状況

来るような石材も多い。これらの隙間には、細かな石材を目地詰めして補強している。袖石に相当する石材ｆも、あまり大きなものではない。

右側壁では、②工程まではほぼ垂直に積まれ、その後の工程では内傾させている。内傾角度は約10°である。

ｅ　石室床面と施設

【概況】　２号墳と同様、石室の崩壊は比較的早い時期だったと考えられる。そのため、石室床面からは副葬品等が良好な状態で出土した。これらは、後世の撹乱等は及んでいないと考えられる。

【副葬品の状況】　玄門部分の右側壁寄りに須恵器高坏２、平瓶１、土師器坏１、壺１がある。高坏１台と平瓶を正立で並べ、その間にもう１台の高坏を横倒しにして挟み込むような状態で置く（写真11）。土師器坏は右側壁に口縁部側を向けて立てかけている。土師器壺は口縁部を下にして倒れているが、口縁部の大部分は埋納以前に割られているようで、周辺には見あたらない。土師器壺の口縁部片の一部が平瓶のすぐ脇にあり、鉄刀がその上にある。この状況から、壺は元々左の石の上にあり、左から倒れてきた鉄刀に押されて転倒し、口縁部片の一部が平瓶側に飛んだものと推測できる。

鉄刀は、切先を西（右側壁側）に、刃を奥壁側に向けた状態で出土。床面よりも15cmほど浮いた状態である。刀が石室主軸に直行する方向で出土することはあまりない。先に見た土師器壺と鉄刀出土レベルの状況から考えて、元々は左側壁に切先を上に向けた状態で立てかけられていたと考えられる。

これ以外では、羨道部分左側壁寄りから刀子が１点出土している。　（伊藤）

Ⅳ　才良吉田谷古墳群の出土遺物

吉田谷古墳群から出土した遺物には、古墳に伴う遺物として金属製品類(馬具、装身具、武器・工具、釘ほか)、玉類、土器類(土師器・須恵器)、などがある。これらは概ね６世紀後葉から７世紀中葉の時期のものである。この他に、古墳の時期以後に用いられた中世前期の土器類もある。

以下、個々の遺物を見ていく。出土地点や属性の詳細は、後掲の出土遺物一覧表(第１～４表)を参照されたい。

１　１号墳出土遺物

１号墳は、石室が崩落していたこと、埋土内から鎌倉時代の遺物が出土していることなどから、かなり早い段階で開口していたと考えられる。そのため、副葬品はその多くが盗掘等によって持ち去れていると考えられ、出土したのは本来あったもののうちのごく一部と考えられる。

出土遺物(第21・22図)は、石室内からのものと、墳丘・周溝からのものとに区分できる。墳丘・周溝内からは須恵器・土師器のみで、その他のものは全て石室内から出土した。

a　装身具類

耳環

１・２は耳環。１は１号墳石室内出土遺物のうち、唯一原位置を保って出土したものである。

写真12　１号墳出土金環(1)の詳細

金環　１は金環。金銅装。横幅3.4cm・縦幅3.2cm、重さ約34ｇで、手に持つとずっしりと重い。管芯断面はほぼ正円形で、直径は８㎜である。表装の金泊は残存が良く、鮮やかな光沢を放つ。管芯接面には金泊の折りたたみ時の皺が明瞭に残る(写真12)。接面の隙間はほとんど無く、この個体のみで耳環として用いられていたというよりも、これに他部材を組み合わせて用いる装身具の一部と見る方が適切かと考えられる。

銀環　２は１よりも小形の耳環。腐朽が進行している。銅芯で表面には銀装が確認できる。ただし、本来はさらに金箔(メッキ？)を施していた可能性もある。横幅2.5cm、縦幅2.3cmで、管芯は最大幅６㎜の断面楕円形である。

玉類

３～17は玉類。いずれも石室内埋土の篩掛けによって出土した。なお、図示した以外にも、粟玉の残片５片のほか、琥珀玉の残片２片がある(巻頭図版２)。

丸玉　１は瑪瑙製で鮮やかなオレンジ色を呈する。直径9.20～9.64㎜、高さ7.50㎜。基本的には丸玉だが、側面形は五角形。研磨は小口部に強く側面は弱い。穿孔は底部から漏斗状の強い抉りが入るように行い、直径0.18㎜ほどの孔を貫通させている。

小玉　４～12は小玉。いずれもガラス製。４は黄色を呈するやや珍しいもの。その他は青～紺色を発色する。５の底面は粗い割れ面調整を施す。

粟玉　13～17は粟玉。いずれもガラス製。発色は青ないしはコバルトブルーである。

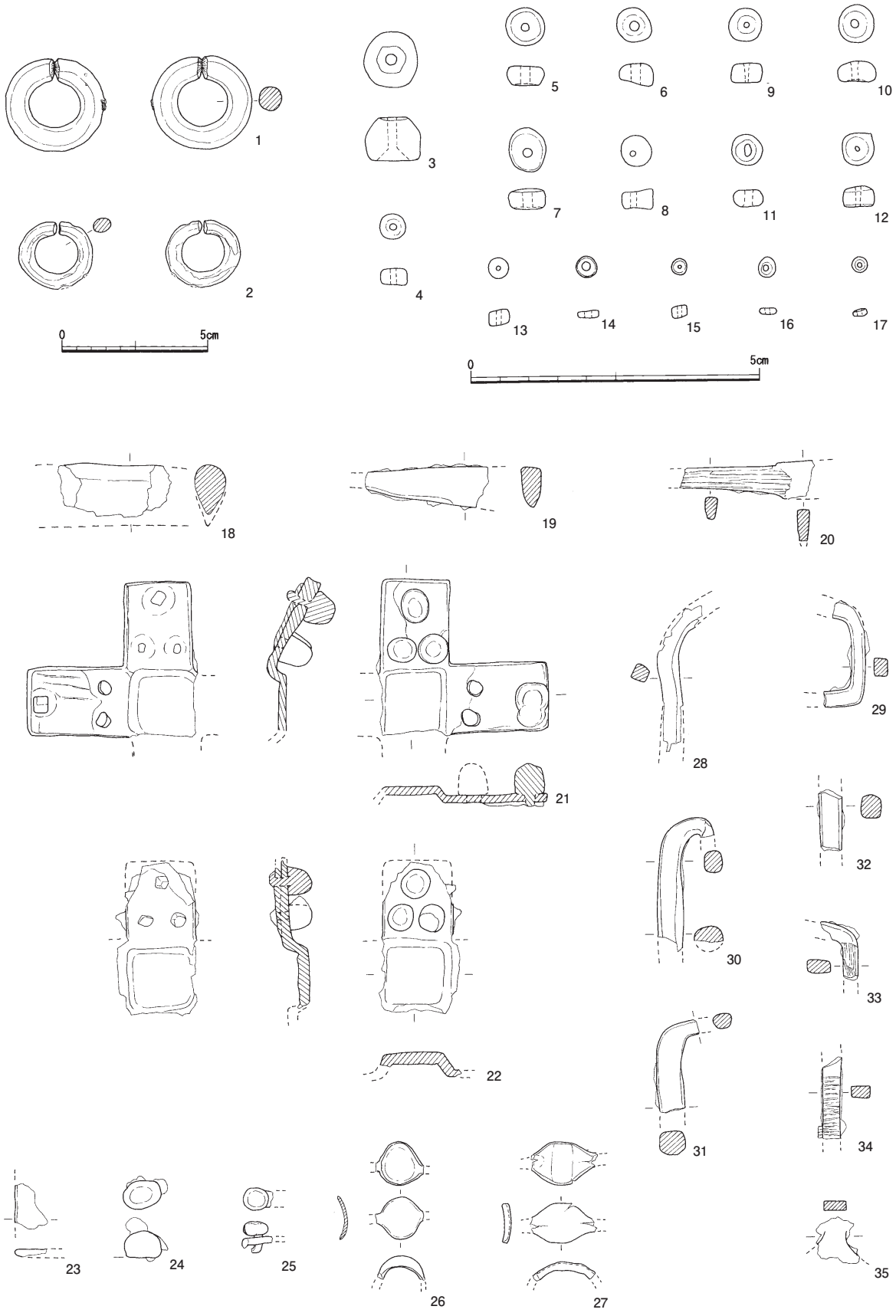
b　武器・工具類

残片で確認されたものばかりである。18は鉄刀の一部。峯側の厚さは1.2cmほどあり、かなり厚手の太刀と考えられる。19・20は刀子で、いずれも茎部。19は背関がはっきりしない。20は柄の木質痕が残る。

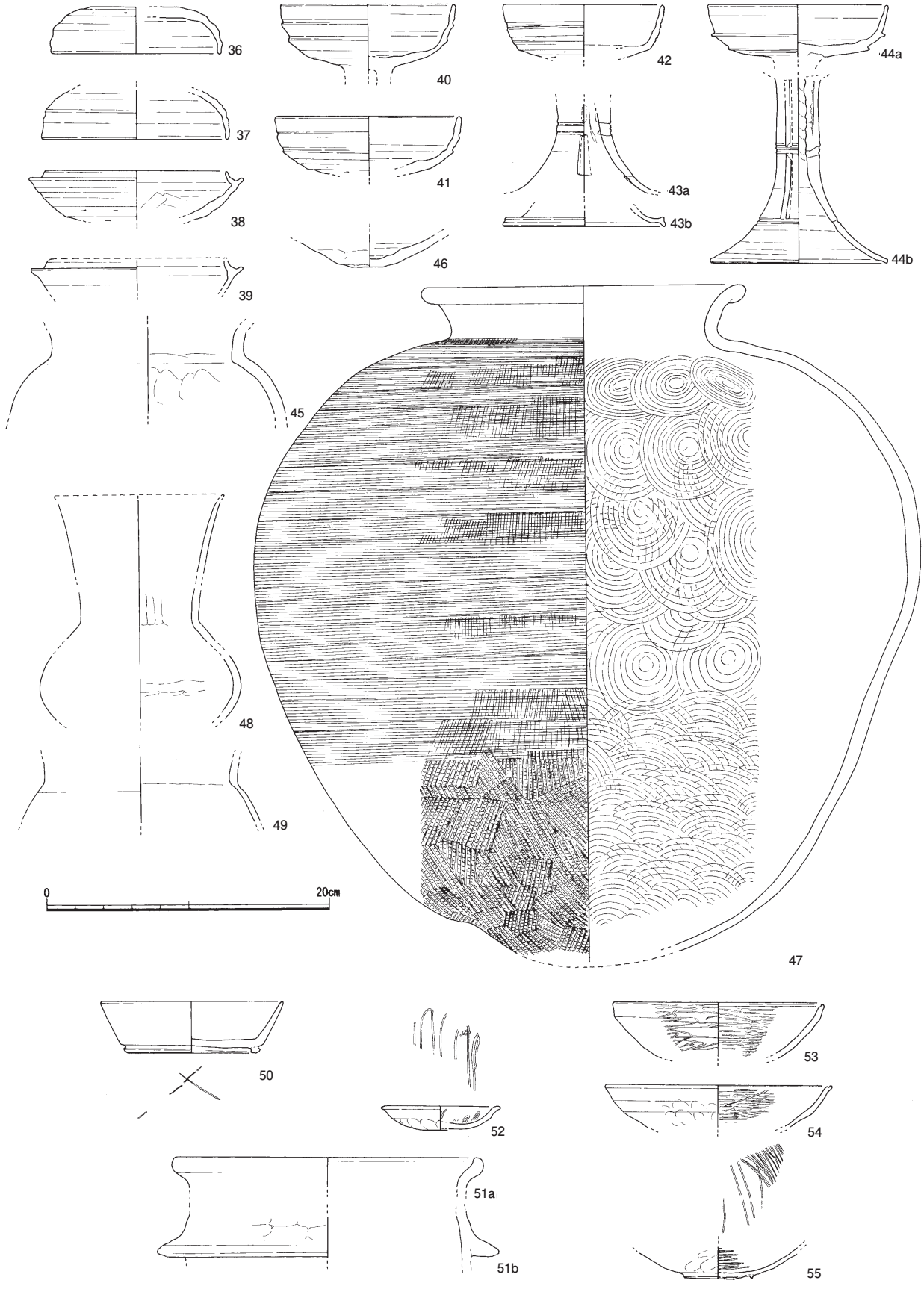
c　馬具類

馬具および馬具の一部と考えられるものがある。

十字形辻金具　金銅装の部材が、破片を含めて４点



第21図　才良吉田谷１号墳出土遺物実測図（１）（３～17は１：１、他は１：２）



第22図　才良吉田谷１号墳出土遺物実測図（２）（１：４）

ある。

21は十字形をなす辻金具と考えられる。表面は金銅装で、裾部裏面に一部折り返す(巻き込む)ように調整されている。本体に金銅装を施した後、別に金銅装を施した鋲が打ち込まれている。残存部から推察すると、完全形であれば長さ約９cmほどのものと考えられる。

本体の中央は一辺約2.5cmの正方形となり、脚よりも５㎜ほど高くなっている。脚は４方向に伸びると見られ、２本残存する。脚は長さ約3.5cm、幅2.3 ～ 2.4cmで、先端は方形となる。

脚にはそれぞれ３個の鋲が付くが、１本の脚は３個の鋲のうち１個しか残っていない。鋲頭部は幅８～９㎜、高さ約９㎜で、上面から見ると楕円形状を呈している。

裏面には鋲の脚部があり、それを中心に周りが窪んでいる。このことから、裏面は鉄分が沈着して遺存した皮革の痕跡で、皮革と金具本体とが鋲で固定されていたと考えられる。皮革痕跡と考えられる部分の窪みの状況から、突出した釘の先端をカシメて固定したと考えられる。鋲脚部は断面方形で、幅は３㎜前後と考えられる。

22も同じ辻金具と考えられる。中央部と脚部が１本遺存する。全体に錆化が著しいが、脚部の鋲は３本とも残る。錆下には金箔が残っている。

23は金銅装部材の破片。側縁部で直線的であることから、十字形辻金具の脚部縁と考えられる。

24・25は鋲の頭部。24は金銅装である。上記十字形辻金具に伴う部品と考えられる。25は頭部が潰れた状態の鋲で、金銅装かどうかは不明。

金銅製双脚飾鋲　26･27は湾曲する木の葉形の部品。26は長さ1.6cm、幅1.5cm。27は長さ2.2cm、幅1.5cm。いずれも凸面が金銅装である。端部は欠損の状態を示す。双脚飾鋲とされるもの(1)に類似する。

鉸具　28・29は、鉸具(バックル)の破片と考えられるものである。30･31も同種のものであろうか。29は２箇所で屈曲するが、それぞれの角度は異なる。28・29の断面は方形だが、30・31は円形ないしは楕円形である。

d　その他の金属製品

細片のため、形態と用途を峻別できなかった一群をまとめておく。なお、図示した以外にも細片が20片ほどある。

32は断面方形の棒状鉄製品。鏃であろうか。33はＬ字形に屈曲する棒状製品。断面は長方形で、一部に木質痕があるため釘の可能性がある。34は断面長方形の棒状で、やはり鏃か。35は脚状に開く板状のもの。

e　土器類

土器類には、古墳の埋葬に伴って石室内に入れられたもの(36 ～ 44)、墳丘上に置かれたもの(45 ～ 49)のほか、追葬ないしは古墳被葬者の関連人物が後に入れたもの(50)、古墳が利用されなくなった以後に入れられたもの(51 ～ 55)がある。

石室内出土土器(古墳に伴う)　36 ～ 39は須恵器蓋坏。36･37は坏蓋で、いずれも外面の段(稜線)は弱い。38・39は坏身で、38の内面にはランダムなナデが見られる。

40 ～ 44は須恵器無蓋高坏。坏部からは４個体が確認できる。いずれも外面に２つの強い稜を持つ。43・44ｂは脚部。長脚二段透かしで、43は二方向、44は三方向の透かしとなる。42と43ａ・ｂ、44ａと44ｂはそれぞれ同一個体と考えられる。44ｂの外面には、焼成時に別個体の高坏脚裾部が釉着している。

45は土師器壺。口縁端部を欠損するが、丸く収める個体と考えられる。

１号墳出土の須恵器は、田辺昭三氏による陶邑編年のＭＴ85型式からＴＫ209型式(2)に相当し、６世紀末から７世紀初頭頃のものと考えられる。

墳丘上出土土器(古墳に伴う)　46は須恵器坏身。底部のみであるため、坏蓋の可能性もある。外面に回転ヘラケズリは見られず、底部はヘラ起こしのままである。石室内出土遺物とほぼ同じの、陶邑編年ＴＫ209型式に併行すると考えられる。

45は須恵器甕。口縁部は外反し、口縁端部は玉縁状となる。体部内面は同心円当て具痕、外面は格子目状叩きの後に上半部にカキメが施されている。

内面の当て具痕を見ると、体部中程から口縁部にかけては下→上／左→右の順に施されるが、下半部は上→下／右→左と逆転する。おそらく底部を丸底とするため、上半部の整形後に改めて叩きを施しているものと考えられる。調整時の土器の動きとして

は、上半部は口縁部を上に向けて行い、下半部の成形時には上下を逆にしているものと考えられる。

45はバラバラの状態で出土したが、ほとんど余る破片が無い状態で接合できた。おそらく、完形の状態で墳丘上に置かれたものが意図的に割られて埋没したと考えられる。

48・49は土師器壺。48は長頸壺で、細片となって出土したが、１個体分の破片がある。素地はきめ細かく、精製である。丸底で、全体形は後出の107のようなものと考えられる。49は頸部の広いもの。

石室内出土土器（古墳直後）　50は須恵器坏身。高台を伴う。底部外面には「×」字状のヘラ記号が焼成前に記されている。この須恵器は７世紀後半から８世紀初頭頃のもので、古墳の追葬段階かあるいはそれに類した行為に伴う遺物と考えられる。

石室内出土土器（中世）　51は土師器羽釜。「く」の字形を呈する口縁部で、口縁端部は丸みを持ち外側に弱い面をなす。

52は瓦器小皿、53 ～ 55は瓦器椀。48の内面には鋸歯状暗文が見られる。53は内外面にヘラミガキが、54は内面にのみヘラミガキが見られる。55は底部で、低く粗雑な高台を伴う。

これらの遺物は12世紀末から13世紀初頭頃に相当する(3)。古墳が開口し、その時期に別目的で使用された際に用いられた遺物と考えられる。

２　２号墳出土遺物

２号墳の石室は早くに崩落していたと考えられるが、それが幸いして遺物の残存状況は良好であった。出土状況を見る限り、石室崩落の影響はあったであろうが、盗掘等による人為的な攪乱は受けておらず、ほぼ原位置を保っていると考えられる。

出土遺物は、石室内からのものが大半で、一部には石室埋土内出土のものがある。後者は元々墳丘上に置かれており、石室の崩落に伴って混入の状態になったと考えられる。

ａ　装身具類

玉類　56は小玉でガラス製。青色を発色する。下面は弱い研磨が施される。

２号墳から出土した玉類で図示可能なのはこの１点のみである。図示した以外では、琥珀玉の残片１片と、玉ではないが水晶の破片が１片ある。

ｂ　武器・工具類

２号墳からは、武器類では鉄鏃が、工具類では刀子が出土している。刀剣類の出土はない。

茎尻　57は刀剣類の茎尻と考えられる。大きさから見て、やや大きめの刀子か刀の一部かと考えられる。幅約2.1cm、残存長約2.4cm。部品小口はやや丸みを帯びる。中空の状態となっており、茎尻金具のようにも見える。小口先端から４㎜の位置に目釘穴が見られる。

刀子　４本ある。58は刃部と茎部の２片に分かれる。刃部と茎部はほぼ一直線上となる。刃部の復元長は約7.0cmである。関部は両関で、幅が狭いために判然としないが、いずれも角関と考えられる。茎尻は欠損する。茎部には木質痕が残る。

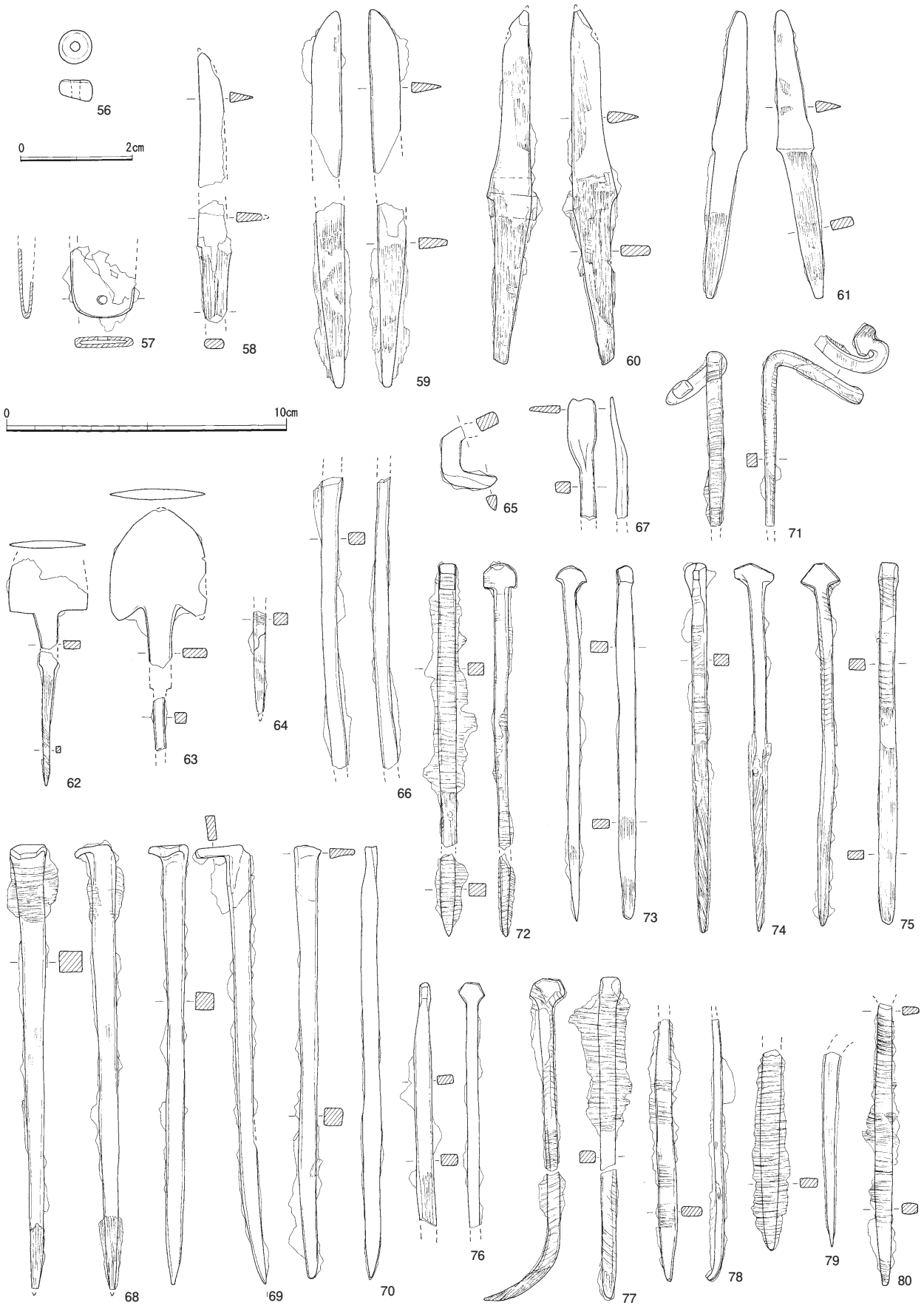
59は関部分を欠損し２片に分かれるが、同一個体と考えられる。残存長は、刃部6.0cm・茎部6.6cmで、推定される全長は約13.5cm。刃部はあまり研ぎ減りは見られない。木質は、刃部には少なく、茎部には厚く残る。

60は刃部にやや角度を持った茎部が付く。全長12.6cm。刃部6.8cm、茎部5.8cm、関部幅約1.2cmで、刃厚0.5cmである。関部は、背部・刃部ともに斜関状だが、刃部はやや丸みが強い。刃部は使用による研ぎ減りが見られる。

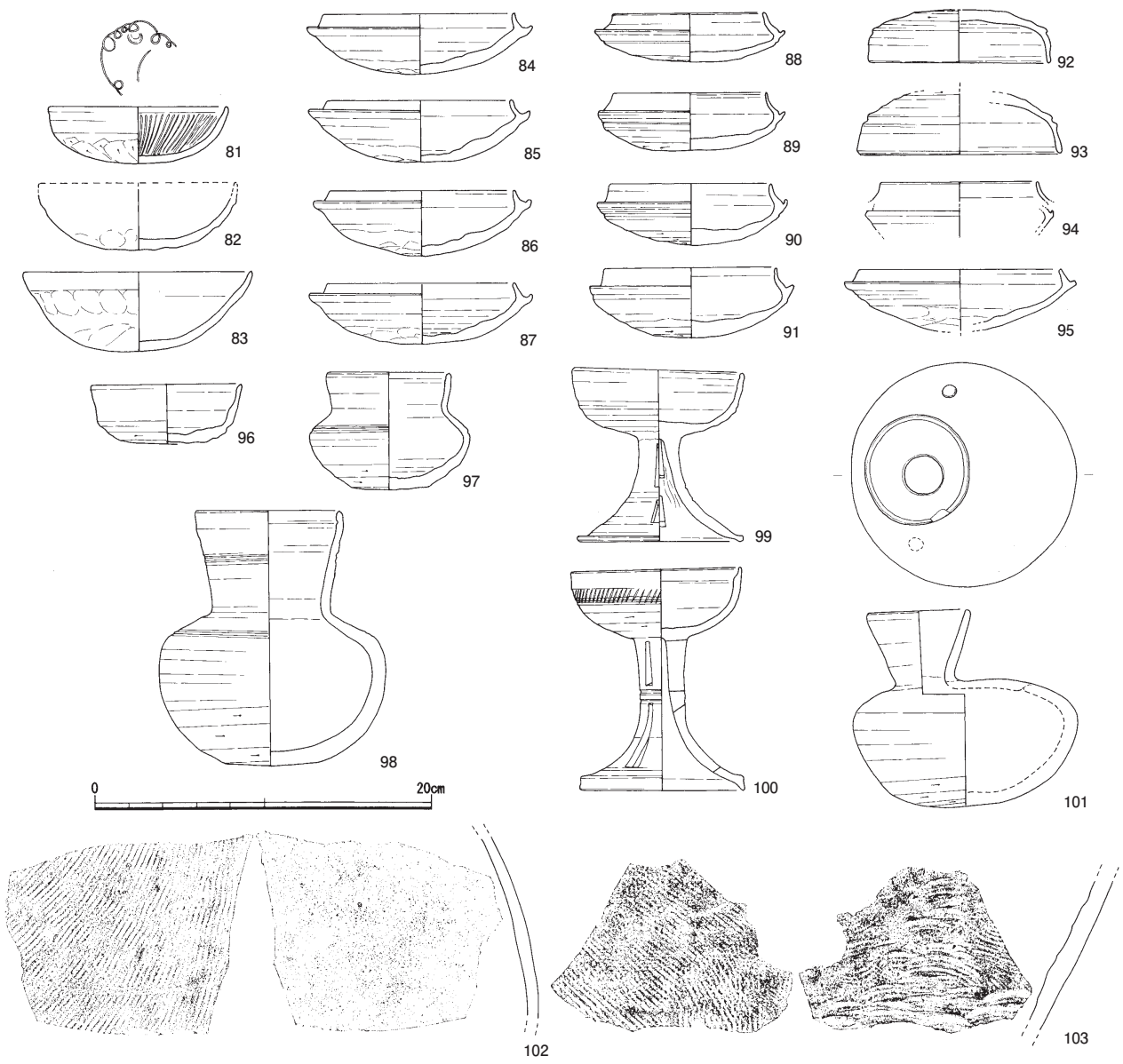
全体に木質の遺存が見られるので、柄を付けて鞘に入れた状態で副葬されたと考えられる。木質は茎部の方がよく残っている。関近くには、柄表面の一部が遺存している。

61は刃部にやや角度を持った茎部が付くもの。全長10.5cm、刃部5.0cm、茎部5.5cm。関部幅約1.4cm、刃厚0.4cm。関は、背部は斜関で、刃部は角関か。刃部は激しく研ぎ減りしている。茎部には木質痕が良好に残る。刃部にも薄く木質痕が見える。関部付近に、柄頭の痕跡と考えられる木質痕が身に直行して遺存する。

鉄鏃　刃部が２本、茎部が１本ある。62は平根式の短頸鏃で、須恵器壺(98)の下から出土した。刃部先端を欠損するが、須恵器壺と土圧のため粉砕されたもので、本来は完形品と考えられる。刃部は三角形状で、逆刺は平たい。63も平根式の短頸鏃で、羨道部



第23図　才良吉田谷２号墳出土遺物実測図（１）（56は１：１、他は１：２）



第24図　才良吉田谷２号墳出土遺物実測図（２）（１：４）

分から出土した。関部を欠損する。逆刺を伴う三角形鏃である。64は鏃の茎部と考えられ、外面に木質痕が残る。

ｃ　釘・金属製部材類

釘および部材と考えられるものである。

部材　65は「コ」の字形に屈曲するもので、先端は断面三角形状を呈する。釘の一種か、あるいは鎹状に使われたものであろうか。

釘　釘は木棺の組み立ての際に用いられたと考えられる。形態は田中彩太氏による分類（Ａ～Ｄ）[(4)]を、付着した木質痕については金田善敬氏による分類（ａ～ｄ）[(5)]を基に見ていく。

66は頭部と先端を欠損するが、形態はＡ類にあたると考えられる。断面は長方形。木質痕はａ類。67は匙状を呈する頭部だが、Ａ類の釘で、頭部が打たれていない状態ではないかと考えられる。

68～70はＡ類。66は頭部を敲打して薄くしており、この後に折り返す予定であったと考えられる。68･69の全長はぞれぞれ16.0cm･15.9cmと揃っている。68・70は同一の棺を構成すると考えられる出土状況を示している。69は掘削中に取り上げてしまい、出土状況は不明だが、やはり68・70と一連で同一の棺

写真13　釘の頭部

写真14　２号墳出土須恵器(94)

を構成していた釘と考えられる。

71も釘だが、複雑に屈曲している。形態はＢ１類で、断面は正方形に近い長方形。木質痕はｂ類。

72 ～ 77はいずれもＢ１類だが、頭部形態は五角形状(72)、扇形(73)、三角形状(74・75)、台形状(76・77)と様々である。本体の断面は長方形で、頭部は断面の短辺部を敲打することで作り出される。全長は12.5 ～ 13㎝のものである。木質はａ類(74・75・77)、ｂ類(72)が見られる。77は途中で屈曲するが、全体に木質痕は残っている。

78 ～ 80は頭部を欠損する釘だが、形態はＢ１類に当たるのではないかと考えられる。木質痕はいずれもｂ類にあたると考えられる。

ｄ　土器類

土器類には須恵器・土師器がある。石室内で用いられたものと、墳丘上で用いられたものの２つに区分できる。

石室内の土器類

土師器　坏類がある。81は精製のもので、都城分類の飛鳥Ⅱ(6)にあたる時期の坏Ｃである。内面には螺旋状暗文と放射状暗文が施される。82・83は、古墳時代後期からの伝統を受け継ぐ坏(小形鉢)である。

須恵器　素地粘土と手法により、84 ～ 87・95 ～ 97・100・101の一群と、88 ～ 94・98・99の一群の、大きく２群に分かれる。前者は伊賀地域産のもの、後者は尾張猿投窯系のものと考えられる。

84 ～ 87・95は坏身で、外面に回転ヘラケズリが見られないもの。伊賀地域産の特徴と考えられる。なお、伊賀地域産の坏には同種の蓋が伴っていないという特徴がある。

88 ～ 94は蓋坏で、外面には丁寧な回転ヘラケズリがあり、口縁部はやや長いもの。伊賀地域産のものよりも全体的に丁寧なつくりである。

84 ～ 91の坏類とは異なり、92 ～ 95は石室内から破片となって出土したものである。とくに94は細片となっており、石室内に散乱していた。

96は坏身で、都城分類の坏Ｇに相当する。外面には回転ヘラ切りが見られる。他の土器とは異なり、床面からやや浮いた状態で出土した。

97は小形壺、98は長頸壺である。いずれも底部には回転ヘラケズリが見られる。98は尾張猿投窯系のものである。

99・100は高坏。長脚二段で、99は二方向、100は三方向透かし。いずれも坏部は椀形を呈する。100の坏部外面にはヘラ状工具による刻目文が施されている。97 ～ 100は、玄室玄門部寄りからまとまって出土したが、100の脚裾片１片のみ玄室の奥壁付近から出土した。意図的に破損させ、その破片を別の場所に置いた(投げた)と考えられる。

101は平瓶。口頸部寄りの体部には２つのボタン状浮文がある。羨道部から出土した。

２号墳の須恵器は、陶邑編年ではＴＫ217型式に、猿投窯ではⅢ新(Ｈ27) ～Ⅳ古(Ｉ101)の段階(7)に相当し、７世紀中葉頃のものと考えられる。

墳丘上の土器類

102・103は須恵器甕の体部片。102は外面に平行叩き目痕、内面に無文の当て具痕がある。102と103は同一個体の可能性がある。

これらの須恵器は、いずれも石室内に流れ込んだ崩落土内から出土した。そのため、本来は墳丘上に置かれていたと考えられる。

３　３号墳出土遺物

３号墳の石室は、２号墳造営に伴って上部が早くに滅失し、早い時期に石室内が埋没したと思われる。そのため、遺物の残存状況は良好であった。

事業地の関係から、石室内全体を調査したわけはではないが、盗掘等による人為的な攪乱は受けておらず、ほぼ原位置を保っていると考えられる。

３号墳に伴う周溝や墳丘は確認されていないため、出土遺物は石室内からのもののみである。

ａ　武器・工具類

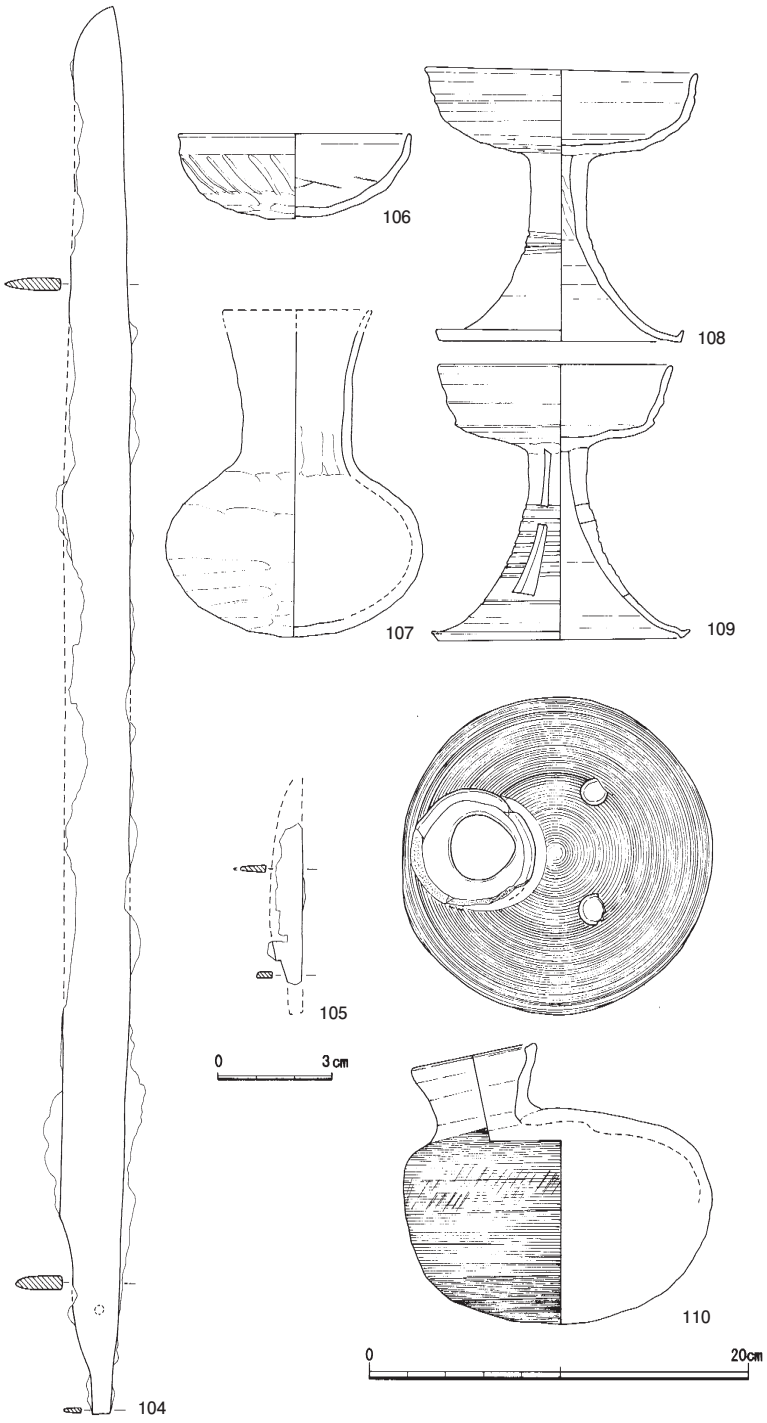
３号墳からは、武器類では鉄刀１振、工具類では刀子１本が出土している。

鉄刀　104は鉄刀。全長74.5cmで刃部長64.1cm、茎部長10.3cm。刃部は斜関で、背関は見られない。目釘孔が１ヶ所確認できる。茎部は二弧の曲線を描く。全体に錆が顕著で、とくに茎部や関形態に本来の形態を止めていない可能性が高い。

刀子　105は小形の刀子。残存長4.3cm。錆化が進み、刃部先端と茎尻は錆化で欠落する。刃部の関は角関と考えられる。

ｄ　土器類

土器類には須恵器・土師器がある。いずれも石室内で用いられたものである。



第25図　才良吉田谷３号墳出土遺物実測図（105は１：２、他は１：４）

土師器　椀（坏）と長頸壺がある。106は椀で、古墳時代中期以来の伝統的な形態。外面は指ナデによって放射状のくぼみが見られる。107は長頸壺。口縁部は一部しか無いため、意図的に打ち欠いていると考えられる。

須恵器　高坏と平瓶がある。108・109は高坏。長脚二段で、108は透かし無し、109は三方向透かしである。坏部は明確に屈曲して開く。２個体ともに据えられたような出土状況を示しているにもかかわらず、脚裾は細かく破損している。これは、意図的に打ち欠かれたものと考えられる。

110は平瓶。体部外面には回転施文によるカキメ

が見られる。口縁部は端上部に面を持ち、内側にやや肥厚する。体上部にはボタン状浮文が２ヶ所見られる。口縁部は不自然に欠けており、意図的なものと考えられる(写真15)。

３号墳の須恵器は一括でまとまっている。陶邑編年のＭＴ85型式に併行し、６世紀後葉頃のものと考えられる。

４　その他

出土遺物とは性格が異なるが、１号墳の石材に見られた矢穴について触れておく。

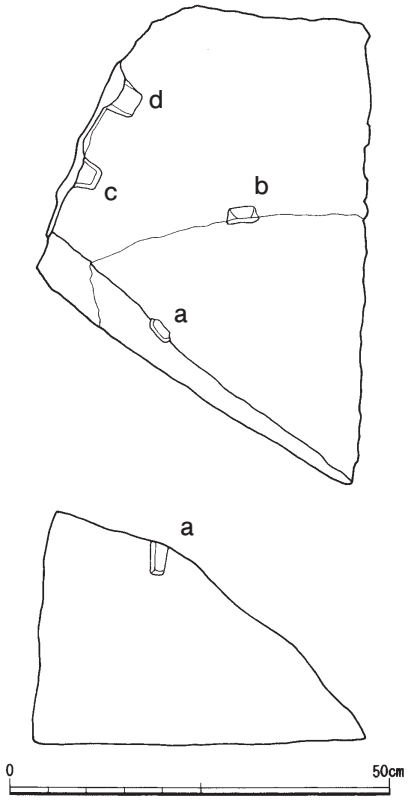
１号墳の羨道付近には石室構築材と考えられる石材が散乱している。その一部には、石材を割り出すための矢穴が認められた。矢穴を用いて割り出したにもかかわらず、搬出されないまま放置されたものもある(写真16、第26図)。

第26図から、残存の良い矢穴ｂで見ると、矢穴口長辺6.1cm、矢穴口短辺3.9cmで、深さは4.2 ～ 5.1cmである。矢穴間隔は約８cmである。

これらの矢穴は、当然ながら古墳時代の石室構築に伴うものではなく、後世に古墳石材を再利用しようとした際に穿たれたものである。矢穴の大きさと間隔から、江戸時代中後期以降のものと考えられる(8)。　(伊藤)

写真15　３号墳出土須恵器平瓶(110)

写真16　１号墳石材の矢穴



第26図　才良吉田谷１号墳の矢穴痕のある石材

＜註・文献＞

(1) 国立歴史民俗博物館編『千葉県成東町駄ノ塚古墳発掘調査報告』(国立歴史民俗博物館研究報告第65集、1996年)
(2) 田辺昭三『須恵器大成』(角川書店、1980年)。
(3) 福田典明「伊賀地域における瓦器に関する覚書」(『中近世土器の基礎研究』10、2006年)
(4) 田中彩太「古墳時代木棺に用いられた緊結金具」(『考古学研究』25－２、1978年)。
(5) 金田善敬「古墳時代の鉄釘」(『考古資料大観』第７巻、2003年)
(6) 都城分類は、古代の土器研究会編『古代の土器Ⅰ　都城の土器集成』(1992年) を参照した。
(7) 東海土器研究会編『須恵器生産の出現から消滅』(2000年)。
(8) 森岡秀人・藤川祐作「矢穴の型式学」(『古代学研究』180、2008年)。

Ⅴ　才良山ノ谷古墳群ほかの調査

１　調査区の設定

平成22年度の範囲確認調査をふまえて、平成23年度の発掘調査では山ノ谷調査区、吉田谷Ａ～Ｃ区を設定した。本章では、このうち調査面積513㎡の山ノ谷調査区における成果をまとめている。この調査区には才良山ノ谷古墳群のほか、才良吉田谷古墳群と才良吉田谷遺跡が含まれるため、これらについてもふれておく。調査では、才良山ノ谷28号墳およびそれに伴う周溝ＳＤ４のほか、溝ＳＤ１～３を検出した（第27図）。遺物は古墳時代の須恵器・土師器、砥石の可能性をもつ石材、平安時代の黒色土器等が出土した（第32図）。

２　基本層位

ａ　断面ａ～ｆ

断面ａ～ｆ（第28・29図）では、表土（第１層）下に地滑り等による崩落土（第14層）、地山由来の風化土（第39層）、地山にあたる花崗岩（第50層）を基本とする。北側においては、現道の埋土（第３層）のほか、黄褐色極細粒砂の第29層、褐色シルトから極細粒砂の第31層が確認された。第31層が基盤に相当し、第29層はそれに準じた性格と考えられる。

南側では、現道の埋土及びそれ以後の堆積土（第４～９層）、基盤にあたる第30・32層、地山風化土の第40層、地山の第50層という層序である。

ｂ　断面ｇ－ｈ

表土（第１層）の下には、オリーブ褐色からにぶい黄色を呈する第13・14層が堆積していた。両層は地滑り等による崩落土と考えられる。

この下には第33～35層が確認できる。これらの層は褐色系の色調を帯び、極細粒砂を主体とする。このうち第33層上端が基盤に該当する。

その下層には花崗岩の風化土層である第43～45層が確認され、これらの下でようやく地山の花崗岩（第50層）にたどりついた。

ｃ　断面ｉ－ｊ

断面ｉ－ｊは断面ｇ－ｈと同様の層序を基本とする。すなわち表土（第１層）の下には、地滑り等によって崩落・堆積した土層（第14層）、花崗岩由来の風化土（第47・48層）、地山にあたる花崗岩（第50層）という基本層序である。撹乱・遺構に伴う土層として、現道の埋土（第12層）、ＳＤ１に伴う埋土（第24層）、ＳＤ４に関連する埋土（第25・26層）がある。

ｄ　才良山ノ谷28号墳

今回の調査で新たに検出した古墳である。この古墳については、断面ｉ～ｎおよび断面ｑ～ｔ（第29～31図）で土層図を作成した。

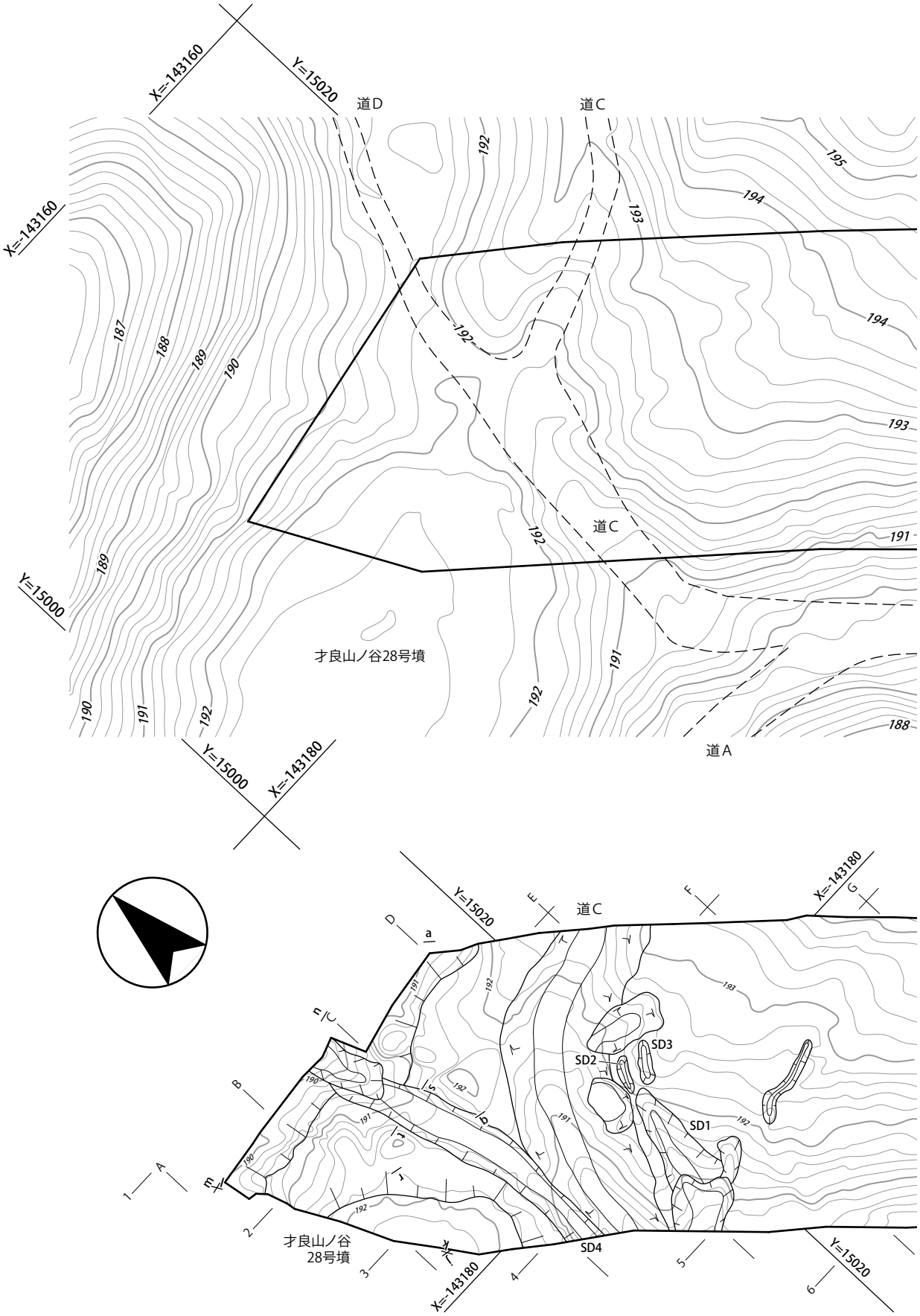
墳頂付近では、表土直下で地山（第50層）を検出した。墳裾付近においては、表土下にオリーブ褐色の細粒砂から中粒砂で構成される第15層をとらえた。この層は、地滑り等による崩落土あるいは昭和30年代の砂防事業に伴う削平で生じた土層の可能性がある。その下層で暗褐色を呈する第20層をとらえた。色調から旧表土の可能性があり、この点をふまえれば第15層は比較的新しい時期の土層と言えよう。

第20層下では黄褐色極細粒砂から中粒砂で構成される第37層が検出された。断面ｇ－ｈの第33～35層と同様に、この層上面が基盤にあたる。これらの土層的な特徴から山ノ谷28号墳は第37層上面、墳裾付近では第38・50層上面を墳丘面としていたと考えられる。

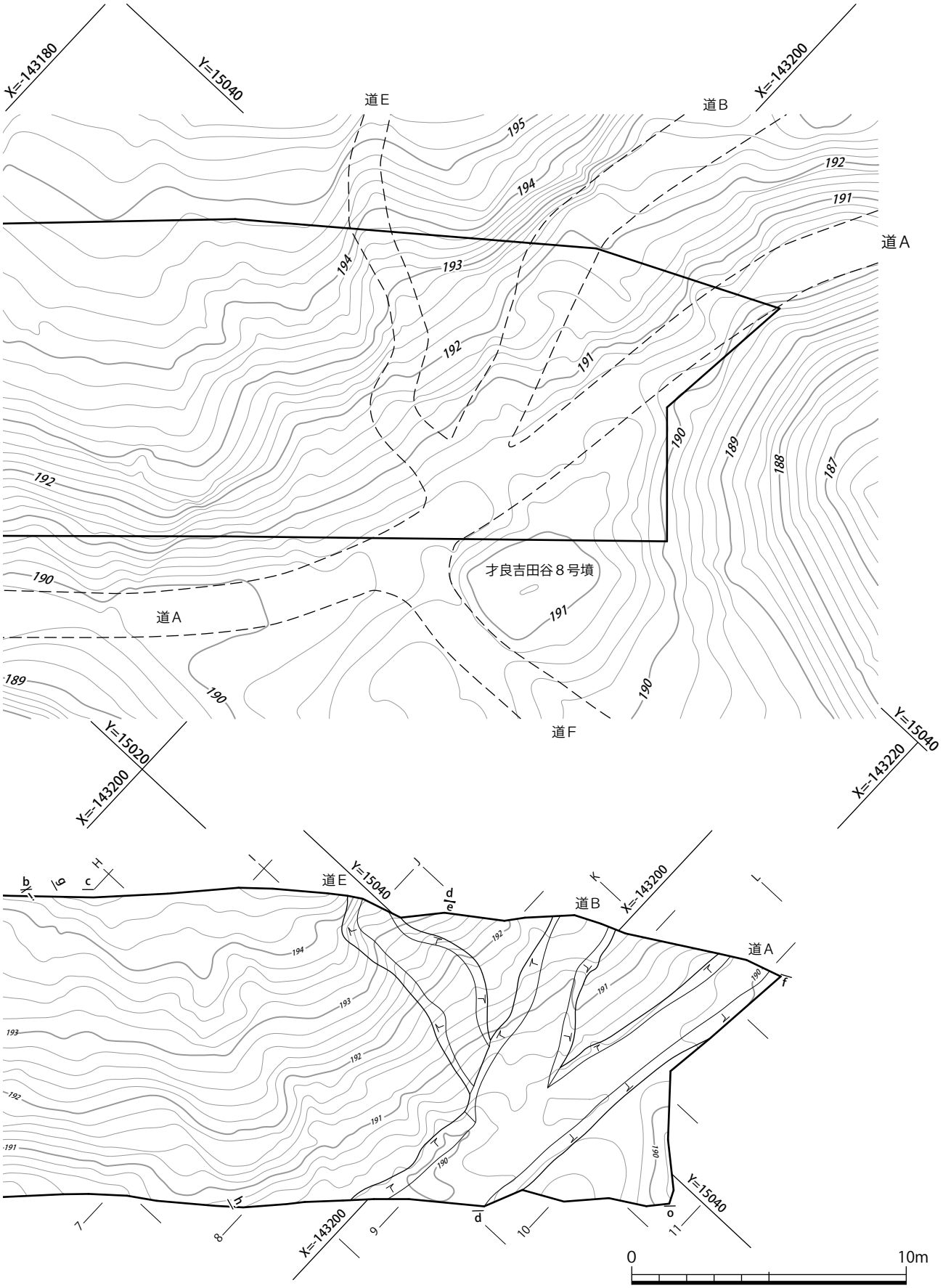
次にＳＤ４付近の堆積状況をまとめておこう。ＳＤ４は幅1.6ｍの溝で、溝底には滞水の痕跡は認められなかった。最下層にはにぶい黄色の細粒砂で構成される第53層が堆積しており、この層の上端で須恵器を検出した。したがって、第53層形成後に須恵器が周溝に転落したといえる。

ｅ　吉田谷８号墳付近

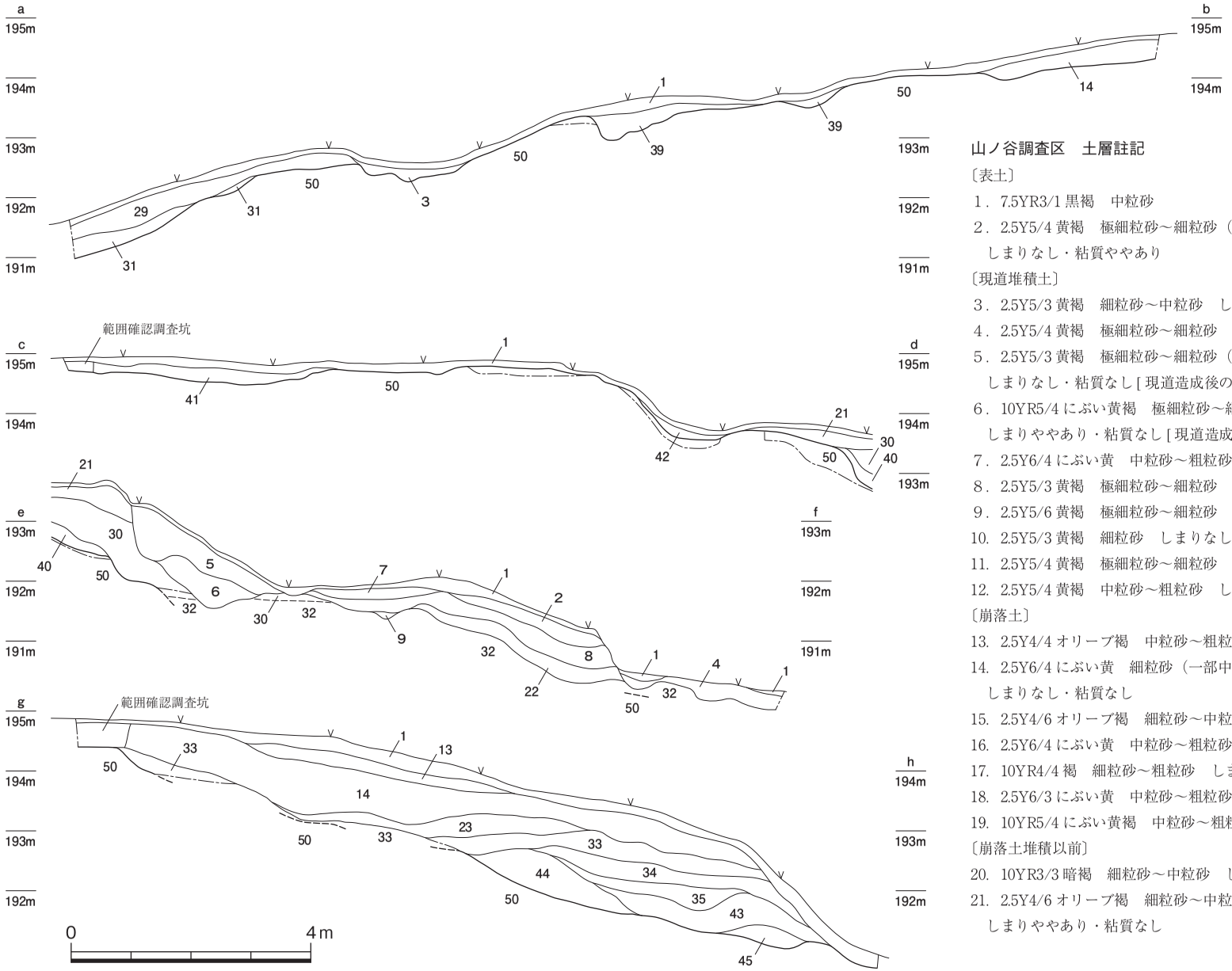
断面ｏ－ｐで土層図を作成した。表土の下には、現道とそれ以後の堆積土（第10・11層）、基盤にあたる第36層、地山の風化土（第46層）、地山の第50層という層序である。調査区において埋葬施設の手がかりは得られなかった。



第27図　山ノ谷調査区平面図（上：調査前、下：調査後）（1：200）


X=-143180
Y=15040
道E
道B
X=-143200
道A
才良吉田谷８号墳
道F
Y=15020
X=-143200
Y=15040
X=-143220
道E
道B
道A
X=-143200
Y=15040
X=-143200
Y=15040
0
10m

第28図　山ノ谷調査区土層断面図(1)（1：100）



山ノ谷調査区　土層註記

〔表土〕

1．7.5YR3/1 黒褐　中粒砂

2．2.5Y5/4 黄褐　極細粒砂～細粒砂（一部中粒砂）
しまりなし・粘質ややあり

〔現道堆積土〕

3．2.5Y5/3 黄褐　細粒砂～中粒砂　しまりなし・粘質なし

4．2.5Y5/4 黄褐　極細粒砂～細粒砂　しまりなし・粘質あり

5．2.5Y5/3 黄褐　極細粒砂～細粒砂（一部中粒砂）
しまりなし・粘質なし[現道造成後の崩落土]

6．10YR5/4 にぶい黄褐　極細粒砂～細粒砂（一部中粒砂）
しまりややあり・粘質なし[現道造成後の崩落土]

7．2.5Y6/4 にぶい黄　中粒砂～粗粒砂　しまりなし・粘質なし

8．2.5Y5/3 黄褐　極細粒砂～細粒砂　しまりなし・粘質なし

9．2.5Y5/6 黄褐　極細粒砂～細粒砂　しまりなし・粘質ややあり

10. 2.5Y5/3 黄褐　細粒砂　しまりなし・粘質なし

11. 2.5Y5/4 黄褐　極細粒砂～細粒砂　しまりなし・粘質あり

12. 2.5Y5/4 黄褐　中粒砂～粗粒砂　しまりなし・粘質なし

〔崩落土〕

13. 2.5Y4/4 オリーブ褐　中粒砂～粗粒砂　しまりなし・粘質なし

14. 2.5Y6/4 にぶい黄　細粒砂（一部中粒砂）
しまりなし・粘質なし

15. 2.5Y4/6 オリーブ褐　細粒砂～中粒砂　しまりなし・粘質なし

16. 2.5Y6/4 にぶい黄　中粒砂～粗粒砂　しまりなし・粘質なし

17. 10YR4/4 褐　細粒砂～粗粒砂　しまりなし・粘質なし

18. 2.5Y6/3 にぶい黄　中粒砂～粗粒砂　しまりなし・粘質なし

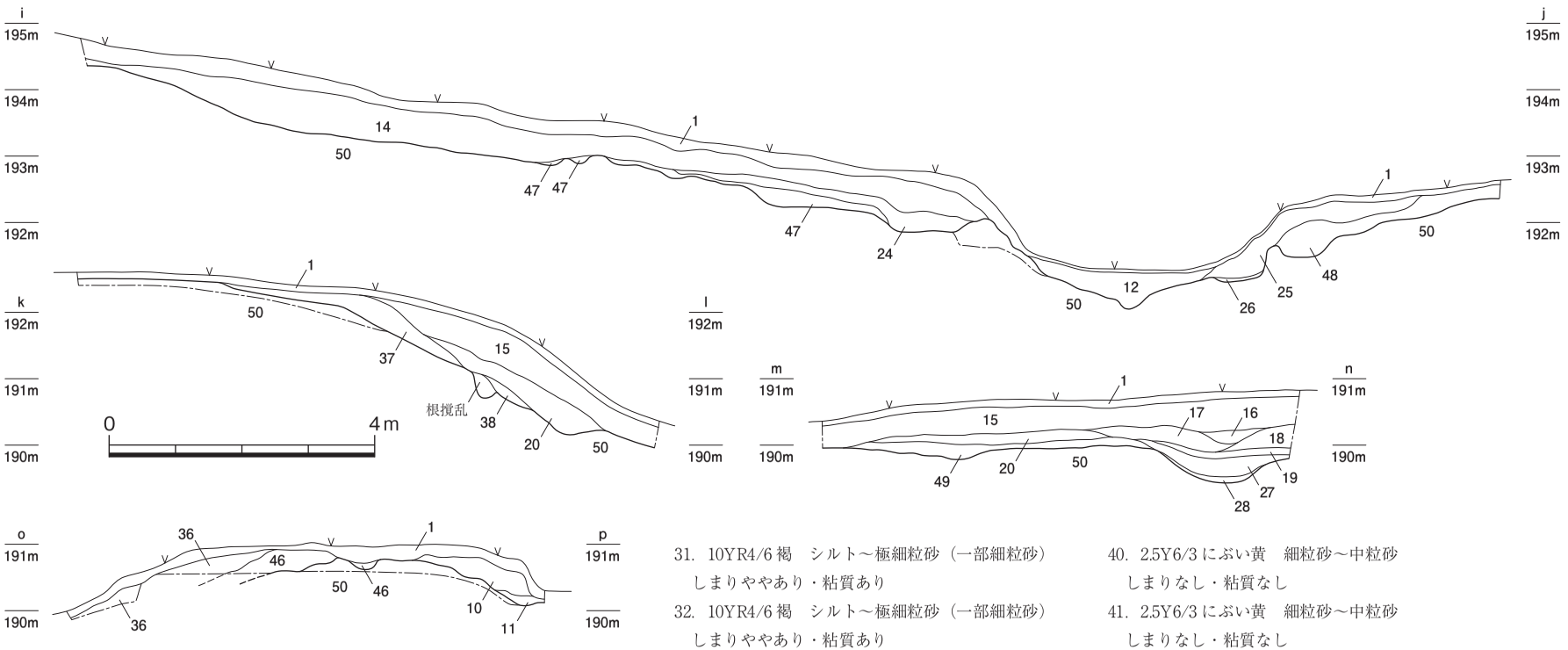
19. 10YR5/4 にぶい黄褐　中粒砂～粗粒砂　しまりなし・粘質なし

〔崩落土堆積以前〕

20. 10YR3/3 暗褐　細粒砂～中粒砂　しまりなし・粘質ややあり

21. 2.5Y4/6 オリーブ褐　細粒砂～中粒砂（一部粗粒砂）
しまりややあり・粘質なし

第29図　山ノ谷調査区土層断面図(2)（1：100）



22. 2.5Y5/6 黄褐　極細粒砂～細粒砂　しまりなし・粘質なし
23. 10YR6/6 明黄褐　極細粒砂～細粒砂　しまりなし・粘質ややあり

〔遺構等埋土〕

24. 2.5Y6/6 明黄褐　中粒砂　しまりなし・粘質なし [ＳＤ１他]
25. 2.5Y4/6 オリーブ褐　細粒砂　しまりなし・粘質なし　[ＳＤ４他]
26. 2.5Y5/4 黄褐　細粒砂～中粒砂　しまりなし・粘質なし　[ＳＤ４埋土]
27. 10YR4/6 褐　細粒砂　しまりなし・粘質なし
    [ＳＤ４から展開する自然流路埋土]
28. 2.5Y6/4 にぶい黄　細粒砂～中粒砂（一部粗粒砂）　しまりなし・粘質なし
    [ＳＤ４から展開する自然流路埋土]

〔基盤に準じる堆積層〕

29. 10YR5/6 黄褐　極細粒砂　しまりややあり・粘質ややあり

〔基盤に相当する堆積層〕

30. 10YR4/3 にぶい黄褐　極細粒砂～細粒砂（一部中粒砂）
    しまりあり・粘質ややあり
31. 10YR4/6 褐　シルト～極細粒砂（一部細粒砂）
    しまりややあり・粘質あり
32. 10YR4/6 褐　シルト～極細粒砂（一部細粒砂）
    しまりややあり・粘質あり
33. 10YR4/6 褐　シルト～極細粒砂　（一部細粒砂）
    しまりややあり・粘質あり
34. 10YR5/6 黄褐　極細粒砂
    しまりややあり・粘質ややあり
35. 10YR6/4 にぶい黄橙　極細粒砂～細粒砂
    しまりなし・粘質ややあり
36. 10YR4/6 褐　極細粒砂（一部細粒砂）
    しまりややあり・粘質あり
37. 10YR5/6 黄褐　極細粒砂～中粒砂
    しまりややあり・粘質ややあり
38. 10YR5/3 にぶい黄褐　細粒砂～中粒砂（一部
    粗粒砂）　しまりなし・粘質なし

〔地山の風化土〕

39. 2.5Y6/3 にぶい黄　細粒砂～中粒砂
    しまりなし・粘質なし
40. 2.5Y6/3 にぶい黄　細粒砂～中粒砂
    しまりなし・粘質なし
41. 2.5Y6/3 にぶい黄　細粒砂～中粒砂
    しまりなし・粘質なし
42. 2.5Y6/3 にぶい黄　細粒砂～中粒砂
    しまりなし・粘質なし
43. 2.5Y6/3 にぶい黄　細粒砂　しまりなし・粘質ややあり
44. 2.5Y6/4 にぶい黄　細粒砂　しまりなし・粘質なし
45. 2.5Y5/4 黄褐　細粒砂～中粒砂　しまりあり・粘質なし
46. 2.5Y6/3 にぶい黄　細粒砂～中粒砂
    しまりなし・粘質なし
47. 2.5Y6/3 にぶい黄　細粒砂～中粒砂
    しまりなし・粘質なし
48. 2.5Y6/3 にぶい黄　細粒砂～中粒砂
    しまりなし・粘質なし
49. 2.5Y6/3 にぶい黄　細粒砂～中粒砂
    しまりなし・粘質なし

〔地山〕

50. 2.5Y6/1 黄灰　細粒砂～粗粒砂 [花崗岩]

３　遺構

調査区における遺構を述べる前に、里道とそこから派生する山道についてまずまとめておこう。道Ａとしたものが里道にあたり、木津川沿いの国道422号線の整備以前は、頻繁に利用されていたという。この道Ａから派生する道Ｂ・Ｃについても道幅や整備状況から道Ａに準じるもので、ごく最近まで利用されていたといえる。なお、道Ｃ以南の工事エリアが才良吉田谷遺跡に該当する。道Ｄ～Ｆについては、道幅と傾斜から荷車等の通行は困難と思われ、山道というにふさわしい。道Ｅは道Ｆにつながるものと思われる。

これらの道を除けば、才良吉田谷８号墳・９号墳、才良山ノ谷28号墳及びＳＤ４、ＳＤ１～３が主な遺構といえる。以下ではこれらについて、個別に特徴をまとめてみよう。

ａ　才良吉田谷８号墳

調査区南西付近に登録されている古墳である。調査の結果、この古墳は道Ａの設置により北側、道Ｆにより西～南部分が削り込まれたため古墳状の高まりとなっていたことが明らかになった。今回の調査によって古墳である可能性は極めて低くなった。

ｂ　才良吉田谷９号墳

調査区外の東側に登録されている古墳である。調査区においてこの古墳に関わる遺構は検出できなかったが、グリッドＧ６・Ｈ６で須恵器及び土師器が出土した。これらの遺物は、調査区よりも高い位置にある才良吉田谷９号墳から流出してきたものと考えられる。なお、土師器が奈良・平安時代のものとすれば、古墳の上に経塚などが造られた可能性を考慮する必要があろう。

ｃ　ＳＤ１～３

調査グリッドＤ３・Ｄ４で検出した溝で、いずれも緩やかな円弧を描き、南側に向かって低くなる。これらの特徴からＳＤ１～３は一連の遺構としてとらえるのがふさわしい。ＳＤ１は長さ3.5m以上、最大幅２ｍで、北側で幅を減じる。南側は、雨水による自然崩落等で生じた流路・落込みへとつながる。ＳＤ１では出土遺物は確認できなかった。

ＳＤ２は長さ２ｍ、幅30cm、ＳＤ３は長さ２ｍ、幅40cmの大きさである。ＳＤ２において遺物は確認されなかったが、ＳＤ３から平安時代の黒色土器片が出土した。この土器は細片であることから、当地より高所にある経塚等の遺構から転落してきたものと想定できる。

なお、ＳＤ１～３の詳しい性格を知るための手がかりが限られており、これ以上の探求は困難といえる。

ｄ　才良山ノ谷28号墳

調査区北側で新たに検出した古墳である。一辺約14mの不定形な方墳と考えられる。才良山ノ谷28号墳では墳丘・周溝ＳＤ４・埋葬施設について個別に詳述しておこう。

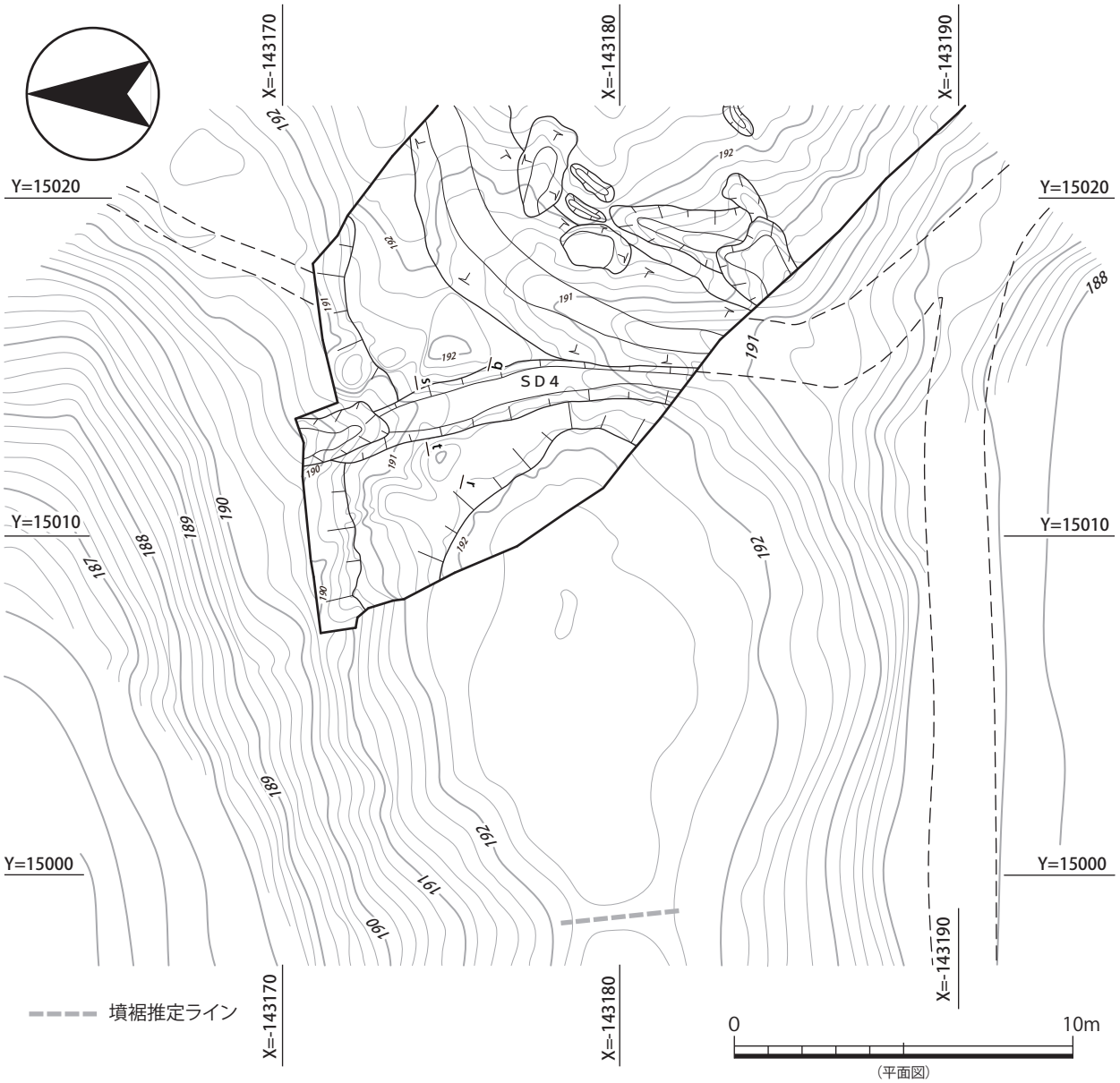
墳丘の東側については、周溝ＳＤ４によって墳裾が確定できる。北側については、標高190.2～190.6mにおいて傾斜変換が観察でき、これより低い部分は丘陵斜面と同角度の急傾斜となる。したがって、これより高い部分でとらえた緩斜面を墳丘ととらえることが許されよう。なお、墳丘断面図では、墳裾にあたる部分がわずかにくぼんでいるが、これは雨水等によるものと判断した。意図的に削り込んで墳裾を明確にしたものではないと評価しておく。

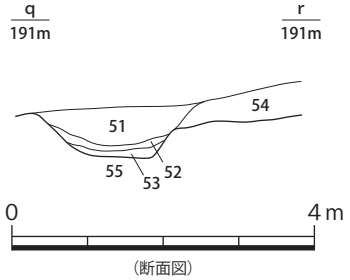
墳丘の西側については、丘陵尾根筋に対して直交方向に谷状の地形が認められる。これが西側墳裾を示していると考えられる。これを手がかりとすれば、山ノ谷28号墳は東西約14mとなる。墳丘南側は現道の造成によって墳裾付近が遺失している。この点は惜しまれるが、現状の地形から判断すれば、北側と同程度の標高に墳裾を想定できる。この場合、南北13～14m程度となろう。

周溝ＳＤ４が直線的な形状を示すことを勘案すれば、才良山ノ谷28号墳は一辺14mの不定形な方墳となろう。ただし、墳頂付近は等高線が円形に巡ることから、墳形の成形はあまく、円形とも方墳ともとらえ得るものだったと考えられる。

以上で墳形・規模が確定した。次に墳丘の成形についてまとめておこう。才良山ノ谷28号墳に関わる土層のうち、墳丘盛土と判断できる土層は確認できなかった。したがって、墳丘は地山の削出しを基本としていたと想定しておく。

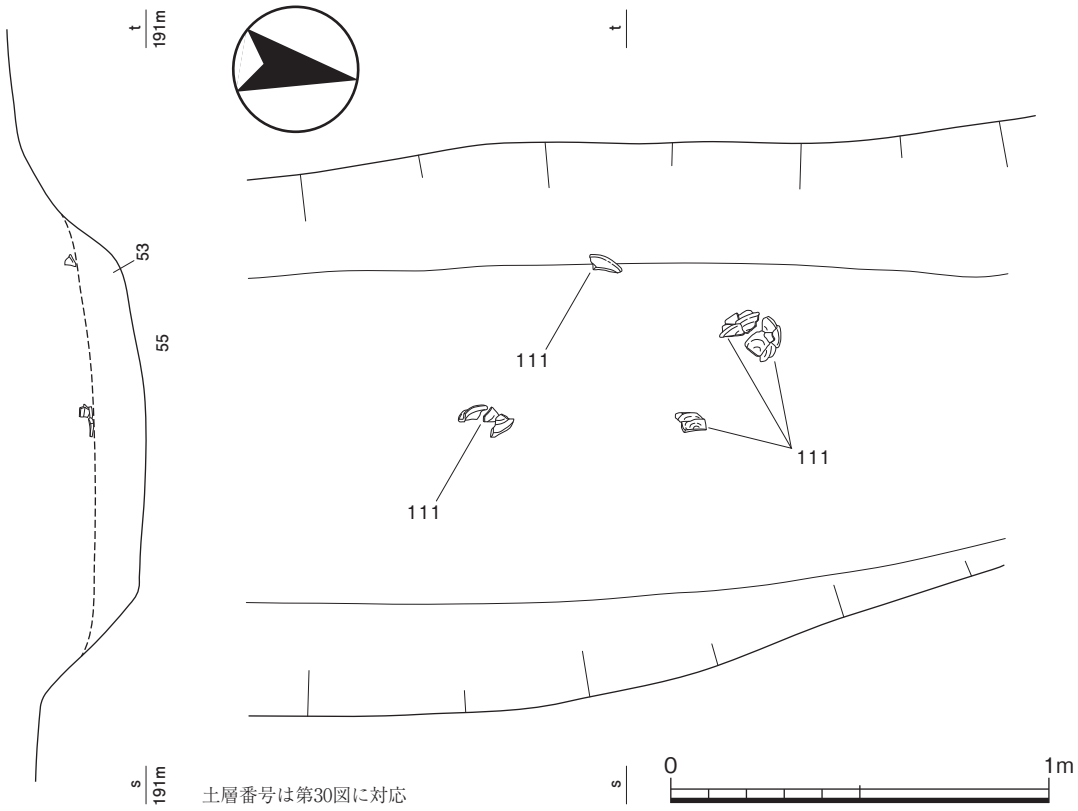
周溝ＳＤ４については、南北11m以上、幅1.6m、深





〔ＳＤ４埋土〕
51．2.5Y4/6 オリーブ褐　細粒砂　しまりなし・粘質なし
52．2.5YR5/4 黄褐　細粒砂～中粒砂　しまりなし・粘質なし
53．2.5Y6/4 にぶい黄　細粒砂　しまりなし・粘質なし
〔基盤の可能性をもつ堆積層〕
54．10YR4/4 褐　細粒砂～中粒砂　しまりなし・粘質ややあり
〔地山〕
55．2.5Y6/1 黄灰　細粒砂～粗粒砂 [花崗岩]

第30図　才良山ノ谷28号墳平面・土層断面図



第31図　才良山ノ谷28号墳周溝（ＳＤ４）遺物出土状況（１：20）

さ40cm以上の直線的な溝である。溝端は明確に区切られていなかったようで、自然流路へと転換する。溝底には滞水した痕跡がみられなかった。この溝からは、第53層上端において須恵器を検出した（第31図）。この須恵器は、接合の結果、完形に近い１点の坏身であることが判明した（第32図－111）。坏身が完形に近いこと、墳丘側にまとまって出土したことを勘案すれば、この出土状況は山ノ谷28号墳の墳丘からの転落等による結果と判断される。

埋葬施設に関しては、今回の調査範囲では手がかりを得られなかった。墳丘高や石材等が散乱していないことから、直葬系の埋葬施設と推察される。なお、昭和30年代の砂防事業で墳頂が大幅に削り込まれた可能性があり、この場合、埋葬施設は既に失われていることになろう。

４　遺物

ａ　概要

遺物量は整理箱にして１箱と少ない。才良山ノ谷28号墳から須恵器・土師器・砥石状の石材、ＳＤ３から黒色土器が出土した。この他、山ノ谷調査区Ｇ６・Ｈ６グリッドにおいて土師器が出土した。これらは小片で図化できないものが多く、時期決定にも制約を受ける。

ｂ　才良山ノ谷28号墳の遺物

才良山ノ谷28号墳では、ＳＤ４から須恵器の坏身１点と砥石状の石材１点の他、墳丘北斜面において土師器片が数点出土した。このうち図化できた須恵器と砥石状の石材について報告しておく。

坏身　111は口径12.6cm、最大径15.5cm、器高5.0cmである。立ち上がりは内傾し、端部はまるくおさめる。立ち上がりの内側には、端部よりわずかに下がったところに沈線を思わせる調整がめぐる。底部外面には回転ヘラケズリが施されている。底部内面には、回転ナデ・同心円文の当て具痕・一方向のナデが観察でき、この順に調整がなされたと考えられる。田辺昭三氏による須恵器編年に照らし合わせると(1)、111はTK10型式に相当する。

砥石状石材　114は砥石の可能性をもつ石材である。残存長12cm、残存幅6.7cm、残存厚1.9cmの石材である。図化した面は平滑で中央がわずかにくぼむ。平滑な面には長軸に沿って擦痕ととらえうるものがみ

られるが、石の片理方向と同じくするため、人為的な痕跡としての断定は控えておく。なお、114においてこの面を除けば平滑な面はみられない。

114は、泥質砂岩が弱い熱変成を受けて片岩化したものである。当地は花崗岩を地山としており、付近は花崗岩の上に堆積した古琵琶湖層群を地山とする。片岩はこの古琵琶湖層群に含まれていた可能性がある。

以上が才良山ノ谷28号墳に伴う出土品である。このうち、須恵器がTK10型式に相当する。これを手がかりとすれば、才良山ノ谷28号墳は古墳時代後期に築造されたと考えられる。

ｃ　山ノ谷調査区Ｇ６・Ｈ６グリッドの遺物

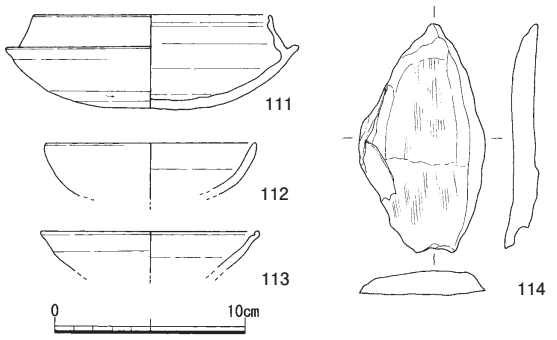
Ｇ６グリッドから土師器椀(112)が出土した。なお図化できなかったが、隣接するＨ６グリッド、および範囲確認調査において出土した土師器も112と同様と考えられる。

椀　112は復元口径11cm、残存高2.7cmで図化した。細片であり、器面の摩滅等によって所属時期の比定に困難が伴う。ただし、古墳時代の可能性も考慮する必要があろう。

ｄ　ＳＤ３の遺物

黒色土器　113はいわゆる黒色土器で内・外面ともに炭素を吸着させて黒化処理を施す。復元口径11.4cm、残存高２cmで図化したが、残存度の制約から、その法量・プロポーションに不安定な要素を抱える。口縁部は横ナデによってわずかに外反し、口縁内端に沈線を施すことで、段を有するように仕上げる。器面は摩滅が著しく、細部の調整について確認できなかった。

これまでの黒色土器の研究によると(2)、113は10世紀後半から11世紀のものと考えられる。出土品からＳＤ３より高い位置に平安時代の遺構が想定できる。



第32図　才良山ノ谷28号墳他出土遺物実測図（１：４）

＜註＞

（1）田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』（平安学園考古学クラブ、1966年）、同『須恵器大成』（角川書店、1981年）

（2）森隆「西日本の黒色土器生産（上）～（下）」（『考古学研究』37-2～4、1990・1991年）、同「黒色土器」（『概説中世の土器・陶磁器』真陽社、1995年）

Ⅵ　才良吉田谷遺跡の調査

1　調査区の設定

才良吉田谷遺跡では、平成22年度の範囲確認調査をふまえて168㎡の吉田谷Ａ区、123㎡の吉田谷Ｂ区、61㎡の吉田谷Ｃ区を設けた。以下においてもこの名称を用いて、調査区ごとに報告しておく（第33 ～ 36図）。

遺物量は整理箱にして１箱にも満たない。吉田谷Ａ区から土師器片、吉田谷Ｃ区から須恵器片が出土したほか、吉田谷Ｂ区において瓦質土器が表採された。これらはいずれも小片で図化には至らなかった。

2　吉田谷Ａ区

a　概要

平成22年度の範囲確認調査時に調査坑東端付近で土師器が出土した地点である。吉田谷Ａ区では土坑状の落ち込みを検出した。この落ち込みについては、付近の状況も勘案して近・現代に形成されたと判断した。

b　基本層位

調査区の西壁・北壁においてとらえた基本層序（断面ａ～ｄ）は、表土下に流出土の第３～４層、基盤の第５層、地山の第11層である。なお、山ノ谷調査区では花崗岩が地山だったが、吉田谷Ａ区では砂岩層の古琵琶湖層群[(1)]が地山となる。

調査区中央の土層については、範囲確認時の調査坑を延長して断割りを行った（断面ｅ－ｆ）。その結果、範囲確認調査時に出土した土器は、第２層から出土したことが判明した。その下層には第６～９層がみられ、その特徴から基盤に該当する。これらより下層において、ようやく地山の古琵琶湖層群（第11層）に到達した。なお、土層中央の落ち込みは近・現代における土取り等による撹乱である。

c　遺構

落ち込み　調査区やや東寄りの地点で検出した。東西方向の長軸5.5m、幅2.5m、深さ50 ～ 60cmの土坑である。この落ち込みより西側の第２層で土師器が出土したことを考慮して、断ち割りを行ったが、この落込みに関しては近・現代の撹乱と判断した。

d　遺物

範囲確認調査時に土師器が出土した。この土師器は第２層から出土しており、この土層の性格から高所からの流れ込みと判断した。

3　吉田谷Ｂ区

a　概要

吉田谷Ｂ区は西側から調査を進めたが、表土直下で地山が検出され、明確な遺構をとらえることができなかった。こうした状況を鑑みて東半分については調査範囲を縮小した。調査の結果、調査区内において明確な遺構をとらえることができなかった。

b　基本層位

表土（第12層）直下において、地山にあたる古琵琶湖層群の第13層をとらえた（断面ｇ－ｈ）。一部において地山由来の風化土が検出できた。

c　遺構

吉田谷Ｂ区では、明確な遺構を検出できなかった。なお、調査区西側の撹乱は現代と考えられる。

d　遺物

範囲確認調査において、瓦質土器が表採されている。しかし明確な遺構が検出されなかったことから、高所からの流れ込みと判断しておく。

4　吉田谷Ｃ区

a　概要

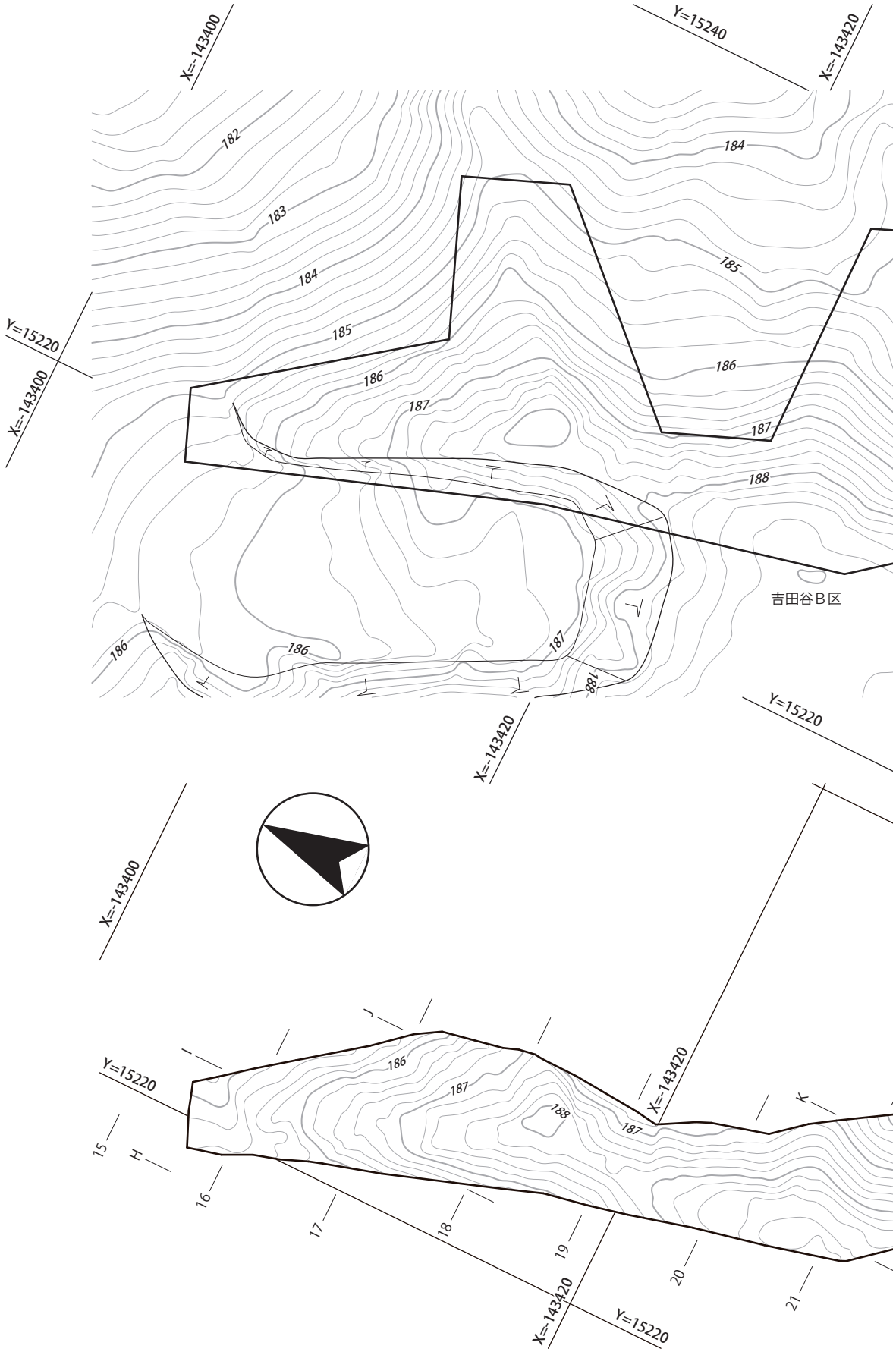
吉田谷Ｃ区では、東西方向の尾根端を対象としており、南側は緩やかな斜面をなす。調査の結果、南側緩斜面において、近世の祠等の基礎と考えられる石列を検出した。

b　基本層位

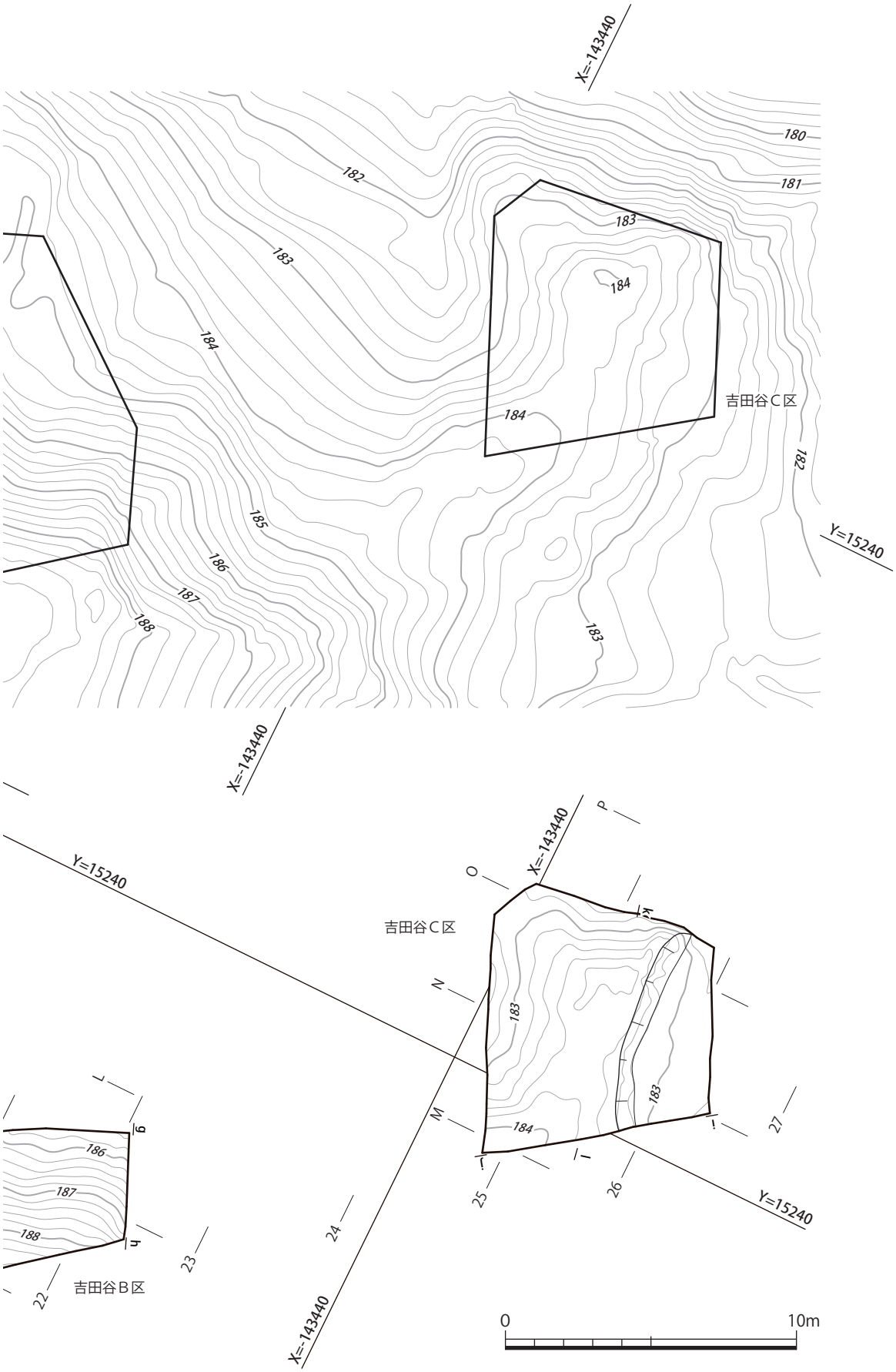
表土直下において流出土の第15・16層、基盤にあたる第17 ～ 21層、地山にあたる古琵琶湖層群・花崗岩の第22・23層をとらえた（断面ｉ－ｌ）。

なお、この調査区では花崗岩の上に古琵琶湖層群

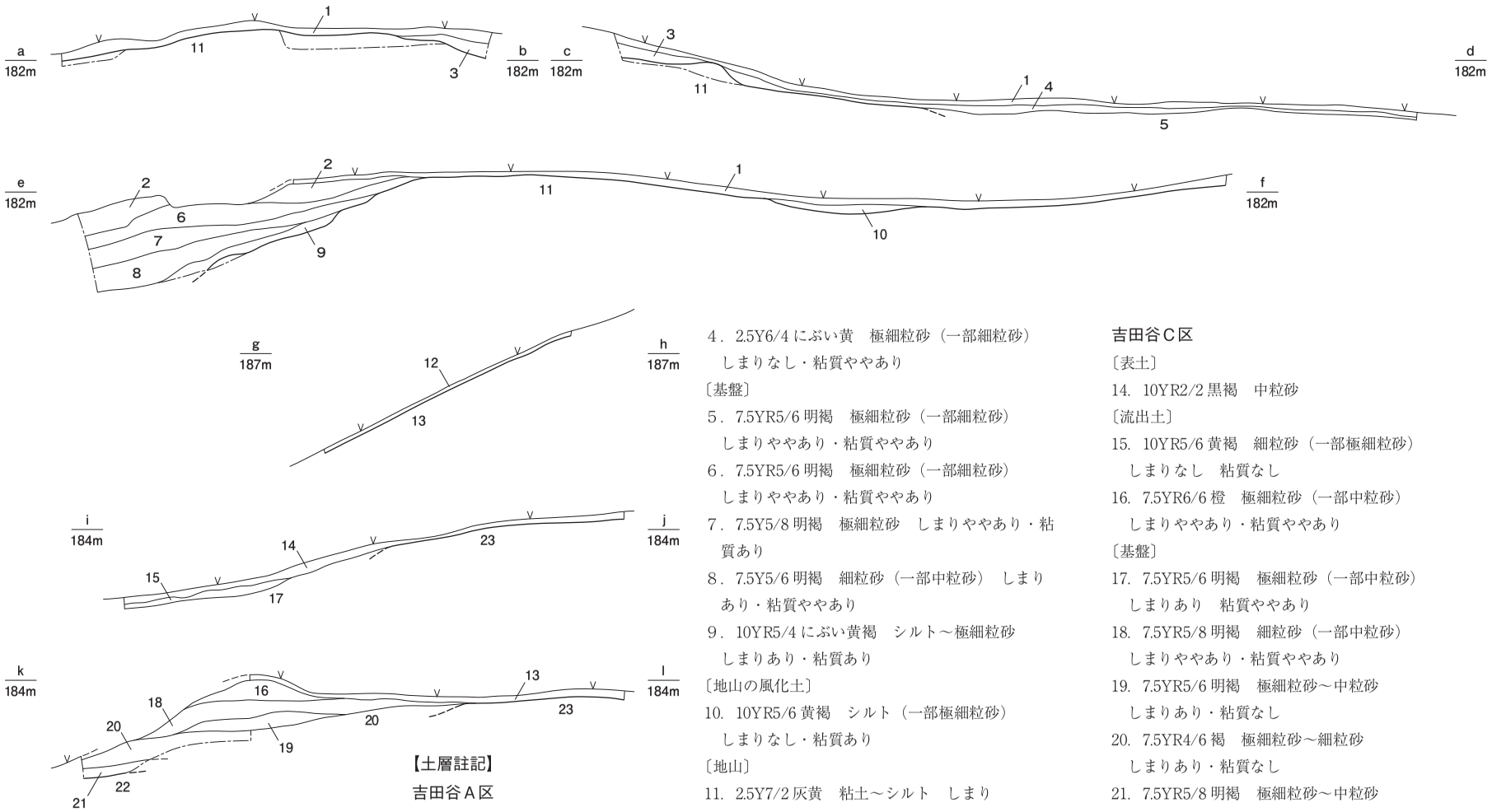
第33図　吉田谷Ａ区平面図（上：調査前、下：調査後）（１：200）



第34図　吉田谷Ｂ・Ｃ区平面図（上：調査前、下：調査後）（１：200）


X=-143440
180
181
182
183
184
185
186
187
188
吉田谷C区
Y=15240
X=-143440
Y=15240
O
P
吉田谷C区
N
M
183
184
25
26
27
Y=15240
L
g
h
186
187
188
吉田谷B区
22
23
24
X=-143440
0
10m

第35図　吉田谷Ａ～Ｃ区土層断面図（１：100）



【土層註記】

吉田谷Ａ区

〔表土〕

１．10YR2/2 黒褐　中粒砂

〔流出土〕

２．10YR5/6 黄褐　細粒砂
　しまりややあり・粘質ややあり

３．2.5Y6/4 にぶい黄　極細粒砂
　しまりなし・粘質ややあり

４．2.5Y6/4 にぶい黄　極細粒砂（一部細粒砂）
　しまりなし・粘質ややあり

〔基盤〕

５．7.5YR5/6 明褐　極細粒砂（一部細粒砂）
　しまりややあり・粘質ややあり

６．7.5YR5/6 明褐　極細粒砂（一部細粒砂）
　しまりややあり・粘質ややあり

７．7.5Y5/8 明褐　極細粒砂　しまりややあり・粘質あり

８．7.5Y5/6 明褐　細粒砂（一部中粒砂）　しまりあり・粘質ややあり

９．10YR5/4 にぶい黄褐　シルト～極細粒砂
　しまりあり・粘質あり

〔地山の風化土〕

10. 10YR5/6 黄褐　シルト（一部極細粒砂）
　しまりなし・粘質あり

〔地山〕

11. 2.5Y7/2 灰黄　粘土～シルト　しまりあり・粘質あり　[泥岩（古琵琶湖層）]

吉田谷Ｂ区

〔表土〕

12. 10YR2/2 黒褐　中粒砂

〔地山〕

13. 2.5Y7/2 灰黄　シルト（一部粘土）
　しまりあり・粘質あり　[泥岩（古琵琶湖層群）]

吉田谷Ｃ区

〔表土〕

14. 10YR2/2 黒褐　中粒砂

〔流出土〕

15. 10YR5/6 黄褐　細粒砂（一部極細粒砂）
　しまりなし　粘質なし

16. 7.5YR6/6 橙　極細粒砂（一部中粒砂）
　しまりややあり・粘質ややあり

〔基盤〕

17. 7.5YR5/6 明褐　極細粒砂（一部中粒砂）
　しまりあり　粘質ややあり

18. 7.5YR5/8 明褐　細粒砂（一部中粒砂）
　しまりややあり・粘質ややあり

19. 7.5YR5/6 明褐　極細粒砂～中粒砂
　しまりあり・粘質なし

20. 7.5YR4/6 褐　極細粒砂～細粒砂
　しまりあり・粘質なし

21. 7.5YR5/8 明褐　極細粒砂～中粒砂
　しまりあり・粘質なし（2.5Y7/2 灰黄　シルトを径２cm 程で５％含む）

〔地山〕

22. 2.5Y7/2 灰黄　シルト（一部粘土）
　しまりあり・粘質あり　[泥岩（古琵琶湖層）]

23. 2.5Y7/4 浅黄　極細粒砂～粗粒砂　[花崗岩]

をとらえた。第22層は、古琵琶湖層群の最も下層にあたる古琵琶湖層群上野累層市部部層と呼ばれる堆積層と考えられる。当地はその広がりをとらえるうえで貴重なデータといえるだろう。

c　遺構

調査区中央に走る東西方向の尾根筋に対して、南側斜面が広がるが、この南側斜面において近世の祠等の基礎と考えられる石列をとらえた(第36図)。この石列は、もともと一辺約１mの正方形を呈していたようで、西側隅を中心に東西約１m、南北約60cm残存する。遺存状況に恵まれなかったため、基底石にあたる部分をとらえたに過ぎない。石列の西側には幅30cmほどの溝状の空間がみられ、これを隔てた西側にも同様の石列があった可能性がある。なお、石列の北側は尾根を直線的に削り込んでいることが観察された。これにより、石列を中心に方形の平坦面を確保したことがうかがえる。

この石列に関しては、才良吉田谷11号墳に「富士大権現」と刻まれた石碑が見られること、「伊賀富士」の別称をもつ尼ヶ岳が遠望できることから、富士講(浅間講)に関連する可能性がある。この場合石列の時期は近世といえよう。

d　遺物

第15層から須恵器が１点出土した。この須恵器片は甕の可能性がある。調査区内には古墳は認められなかったことから、対象地よりも高所にある才良吉田谷11号墳等からの流出と判断される。

<註>

(1) 近畿地方土木地質図編纂委員会『近畿地方土木地質図解説書』(2003年)、森勇一「伊賀盆地のなりたち」(『伊賀市史』第１巻通史編、2011年)

第36図　吉田谷Ｃ区石列実測図(１：40)

第1表　才良吉田谷古墳群・山ノ谷古墳群出土遺物（土器）観察表（1）

番号	実測番号	様・質	器種等	地区	遺構・層名等	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
36	1-6	須恵器	坏蓋	吉田谷	1号墳　石室 5区東a	（口）12.1	外；回転ナデ→回転ケズリ（部分的） 内；回転ナデ	密	5Y5/1　灰	口縁3/12	
37	1-4	須恵器	坏蓋	吉田谷	1号墳　石室 1区東a、2区西	（口）13.2	外；回転ナデ 内；回転ナデ	密	2.5Y6/1　黄灰	口縁2/12	
38	1-1	須恵器	坏身	吉田谷	1号墳石室　2 区西b、11区東	（口）13.0	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ→ナデ	密	5Y5/1　灰	口縁4/12	
39	2-3	須恵器	坏身	吉田谷	1号墳　石室内	（口）12.6 推定	外；回転ナデ 内；回転ナデ	密	2.5Y6/1　黄灰	口縁1/12	
40	2-1	須恵器	高坏	吉田谷	1号墳　石室内	（口）12.4	外；回転ナデ 内；回転ナデ	密	N6/　灰	口縁6/12	石室内3・5・10・11区に破片散乱
41	1-2	須恵器	高坏	吉田谷	1号墳　石室 1・2区東	（口）13.2	外；回転ナデ→回転ケズリ→回転ナデ 内；回転ナデ	密	N6/　灰	口縁4/12	3片
42	1-3	須恵器	高坏	吉田谷	1号墳　石室内	（口）11.4	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	2.5Y5/1　黄灰	口縁4/12	石室内2・4・5・7区に破片散乱
43	1-5	須恵器	高坏	吉田谷	1号墳　石室内	（脚裾）11.4	外；回転ナデ 内；回転ナデ	密	5Y5/1　灰	脚柱3/12	石室内3・4・6・11区に破片散乱 脚柱と脚裾とは接合しないが同一個体
44	2-2	須恵器	高坏	吉田谷	1号墳　石室内	（口）12.8 （脚裾）12.5	外；回転ナデ→3方透かし 内；回転ナデ	密	2.5Y4/1　暗灰黄	口縁2/12 脚裾2/12	杯部と脚部との接合部少ない
45	3-4	土師器	壺	吉田谷	1号墳　石室内	（頸）13.6	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	10YR8/4　浅黄橙	頸部2/12	
46	4-2	須恵器	坏身	吉田谷	1号墳　周溝	（底）4.2	外；回転ナデ→ヘラ起こし 内；回転ナデ	密	10YR6/1　灰	底部3/12	
47	4-1	須恵器	甕	吉田谷	1号墳　周溝	（口）23.1	外；タタキメ→カキメ・ヨコナデ 内；同心円当て具痕→ヨコナデ	密	N5/　灰	口縁3/12	外面底部に重ね焼き時の円形圧痕（坏か?）
48	4-4	土師器	壺	吉田谷	1号墳　周溝	（頸）8.3	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ・板ナデ→シボリメ（口縁部）	密	7.5YR7/6　橙	頸部1/12	長頸丸底壺と考えられる
49	4-3	土師器	壺	吉田谷	1号墳　周溝	（頸）13.7	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	10YR7/6　明黄褐	頸部1/12	
50	1-7	須恵器	坏身	吉田谷	1号墳　石室内	（口）12.9 （高）3.7	外；回転ナデ→ヘラ切り→ヨコナデ（高台） 内；回転ナデ	密	5Y8/1　灰白	高台8/12	高台内面にヘラ記号
51	3-3	土師器	羽釜	吉田谷	1号墳　石室内	（口）22.0	外；オサエ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	粗	7.5YR6/4　にぶい橙	口縁1/12	鍔部に煤付着
52	3-1	瓦器	小皿	吉田谷	1号墳　石室 5区西	（口）8.4 （高）1.7	外；オサエ→ヨコナデ 内；ヨコナデ→暗文	密	N4/　灰	口縁3/12	大和・伊賀
53	2-5	瓦器	椀	吉田谷	1号墳　石室内	（口）15.0	外；オサエ→ヨコナデ→ミガキ 内；ヨコナデ→ミガキ	密	N5/　灰	口縁2/12	大和・伊賀
54	2-4	瓦器	椀	吉田谷	1号墳　石室内 埋土上層	（口）16.0	外；オサエ→ヨコナデ 内；ヨコナデ→ミガキ	密	N4/　灰	口縁1/12	大和・伊賀
55	3-2	瓦器	椀	吉田谷	1号墳　石室 5区東	（高台）4.8	外；オサエ→ヨコナデ（高台） 内；ヨコナデ→ミガキ	密	N2/　黒	高台4/12	大和・伊賀
81	6-8	土師器	椀（坏）	吉田谷	2号墳　石室内 p1	（口）10.4 （高）3.4	外；ナデ→ケズリ・ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ→暗文	密	5YR7/6　橙	ほぼ完存	律令期坏C祖形
82	6-7	土師器	椀（坏）	吉田谷	2号墳　石室内 p24	（口）11.9 推定	外；オサエ・ナデ 内；ナデ	密	10YR8/2　灰白	口縁下部4/12	
83	6-6	土師器	椀（坏）	吉田谷	2号墳　石室内 p3・6・12	（口）13.7 （高）4.8	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	7.5YR8/4　浅黄橙	口縁6/12	
84	5-1	須恵器	坏身	吉田谷	2号墳　石室内 p17	（口）11.4 （高）3.6	外；回転ナデ→板状工具ナデ 内；回転ナデ	密	N5/　灰	受部一部欠損のみ	伊賀産と考えられる
85	5-2	須恵器	坏身	吉田谷	2号墳　石室内 p15	（口）11.0 （高）3.7	外；回転ナデ→板状工具ナデ 内；回転ナデ	密	10Y5/1　灰	受部一部欠損のみ	伊賀産と考えられる
86	5-5	須恵器	坏身	吉田谷	2号墳　石室内 p14	（口）11.0 （高）3.0	外；回転ナデ→板状工具ナデ 内；回転ナデ	密	7.5Y5/1　灰	受部一部欠損のみ	伊賀産と考えられる
87	6-2	須恵器	坏身	吉田谷	2号墳　石室内 p21	（口）11.1 （高）3.6	外；回転ナデ→板状工具ナデ 内；回転ナデ	密	N7/　灰白	受部一部欠損のみ	伊賀産と考えられる
88	6-1	須恵器	坏身	吉田谷	2号墳　石室内 p2	（口）9.1 （高）2.9	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	N6/　灰	口縁一部欠損のみ	猿投産
89	5-3	須恵器	坏身	吉田谷	2号墳　石室内 p14	（口）9.1 （高）3.5	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	N4/　灰	口縁一部欠損のみ	猿投産
90	5-6	須恵器	坏身	吉田谷	2号墳　石室内 p23	（口）9.7 （高）3.6	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	N6/　灰	ほぼ完存	猿投産
91	5-4	須恵器	坏身	吉田谷	2号墳　石室内 p16	（口）10.2 （高）4.2	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	N6/　灰	口縁9/12	猿投産
92	6-5	須恵器	坏蓋	吉田谷	2号墳　石室内 p18他	（口）10.8 （高）3.2	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	N6/　灰	口縁8/12	猿投産 石室内に破片が散乱（意図的か）
93	8-1	須恵器	坏蓋	吉田谷	2号墳　石室内 p5・24他	（口）12.1	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	N5/　灰	口縁8/12	猿投産 石室内に破片が散乱（意図的か）
94	6-9	須恵器	坏身	吉田谷	2号墳　石室内	（口）9.3	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	N6/　灰	口縁2/12	猿投産 石室内に破片が散乱（意図的か）
95	6-3	須恵器	坏身	吉田谷	2号墳　石室内 p4・7・20	（口）12.0 （高）3.6	外；回転ナデ→板状工具ナデ 内；回転ナデ	密	N6/　灰白	口縁7/12	伊賀産と考えられる 石室内に破片が散乱（意図的か）
96	6-4	須恵器	坏	吉田谷	2号墳　石室内 p12	（口）8.9 （高）3.5	外；回転ナデ→ヘラ切り→ナデ 内；回転ナデ	密	N5/　灰	ほぼ完存	猿投産?　重ね焼き痕あり
97	7-2	須恵器	小形壺	吉田谷	2号墳　石室内 p10	（口）7.4 （高）7.0	外；回転ナデ→回転ケズリ内；回転ナデ	密	N4/　灰	ほぼ完存	猿投産?　口縁部に歪み
98	8-2	須恵器	長頸壺	吉田谷	2号墳　石室内 p8	（口）8.6 （高）15.1	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	5Y5/1　灰	完存	猿投産?
99	8-3	須恵器	高坏	吉田谷	2号墳　石室内 p11	（口）10.2 （高）10.3	外；回転ナデ→回転ケズリ→2方透かし 内；回転ナデ	密	7.5YR5/3　にぶい褐	ほぼ完存	猿投産?
100	8-4	須恵器	高坏	吉田谷	2号墳　石室内 p9他	（口）10.1 （高）13.2	外；回転ナデ→回転ケズリ→刻目・3方透かし 内；回転ナデ	密	5YR4/2　灰褐	ほぼ完存	猿投産?　脚裾片の一部のみ奥壁近くから出土
101	7-1	須恵器	平瓶	吉田谷	2号墳　石室内 p13	（口）6.2 （高）11.7	外；回転ナデ→回転ケズリ→口縁付加→ヨコナデ 内；回転ナデ	密	N7/　灰白	口縁一部欠損のみ	猿投産　体部上面にボタン状浮文2個
102	9-1	須恵器	甕	吉田谷	2号墳　石室埋土	（体）－	外；タタキメ（平行） 内；ナデ（ナデ消し）	密	7.5YR4/2　灰褐	体部片	
103	9-2	須恵器	甕	吉田谷	2号墳　墳丘上	（体）－	外；タタキメ（格子目） 内；同心円当て具痕	密	2.5Y5/1　黄灰	体部片	
106	13-1	土師器	椀	吉田谷	3号墳　石室内 p4	（口）12.4 （高）4.5	外；オサエ・ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	10YR7/6　明黄褐	完存	
107	11-1	土師器	長頸壺	吉田谷	3号墳　石室内 p5	（頸）5.8	外；ナデ 内；シボリメ・ナデ	密	7.5YR8/4　浅黄橙	口縁部のみ欠損	口縁部は意図的な打ち欠きか?
108	10-2	須恵器	高坏	吉田谷	3号墳　石室内 p1	（口）14.5 （高）14.5	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；シボリメ→回転ナデ	密	10Y5/1　灰	ほぼ完存	
109	10-1	須恵器	高坏	吉田谷	3号墳　石室内 p2	（口）12.5 （高）14.7	外；回転ナデ→回転ケズリ→3方透かし 内；回転ナデ	密	N3/　暗灰	ほぼ完存	裾部は意図的な打ち欠きか?
110	12-1	須恵器	平瓶	吉田谷	3号墳　石室内 p3	（口）6.7 （高）14.9	外；回転ナデ→カキメ→口縁付加→ヨコナデ 内；回転ナデ	密	N5/　灰	口縁一部欠損のみ	体部にボタン状浮文2個 口縁部は意図的な打ち欠きか?

第2表　才良吉田谷古墳群・山ノ谷古墳群出土遺物（土器）観察表（2）

番号	実測番号	様・質	器種等	地区	遺構・層名等	法量（cm）	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
111	41-1	須恵器	坏身	山ノ谷	28号墳　周溝（SD4）	（口）12.6 （高）5.0	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ→同心円当て具痕	密	N7/　灰白	口縁6/12	
112	41-3	土師器	椀	山ノ谷	G6　包含層	（口）11.0	外；ナデ 内；ナデ	密	10YR6/4　にぶい黄橙	口縁1/12	
113	41-2	黒色土器	椀	山ノ谷	SD3	（口）12.6 （高）5.2	外；ナデ→ヨコナデ 内；ナデ→ヨコナデ	密	5Y4/1　灰	口縁2/12	黒色土器B類
115	43-2	埴輪	円筒埴輪	吉田谷	14号墳後円部北　採集	—	外；突帯部ヨコナデ 内；ナデ（剥離）	密	10YR7/4　にぶい黄橙	突帯部片	土師質（無黒斑）
116	43-1	埴輪	円筒埴輪	吉田谷	14号墳前方部南　採集	—	外；突帯部ヨコナデ 内；ハケメ	密	10YR7/6　明黄褐	突帯部片	土師質（無黒斑）
117	13-2	須恵器	坏蓋	山ノ谷	13号墳　採集	（口）16.9	外；回転ナデ→回転ケズリ 内；回転ナデ	密	N5/　灰	口縁3/12	

第3表　才良吉田谷古墳群出土金属製品観察表

報告番号	実測番号	名称	出土地点ほか	長さ（cm）残存＋	幅（cm）残存＋	厚（cm）	断面形	特徴ほか
1	31−01	金環	1号墳石室　2区東a	3.2	3.4	0.8	正円形	重さ34.05g　銅芯・金鍍金（箔）　金地遺存良好
2	31−02	金環	1号墳石室　4区西b	2.5	2.3	0.6	楕円形	撹乱土内　銅芯・銀鍍金（箔）
18	32−46	鉄刀	1号墳石室　4区西a	3.8+	1.7+	1.1	−	表面腐食が顕著。
19	32−47	刀子	1号墳石室　8・9区西	4.2+	1.5+	0.8	−	
20	32−39	刀子	1号墳石室　3区西a	4.6+	1.2+	0.5	−	茎部に木質痕あり。
21	31−03	金銅装馬具	1号墳石室　8区東b	5.8+	5.4+	0.3	長方形	金銅装、十字形の辻金具か?1足に鋲3本。裏面に皮革痕跡。
22	31−04・42	金銅装馬具	1号墳石室　1区東a	5.1+	2.7+	0.3	長方形	21と同種。
23	31−06	金銅装馬具	1号墳石室　3区東a	1.3+	1.1+	0.3	長方形	用途不明。
24	31−09	金銅装馬具	1号墳石室　3区東	1.5+	0.9	1.2	楕円形	金銅装、鋲部分の破片。
25	31−07	金銅装馬具	1号墳石室　3区東a	1.1+	0.6	1.1	−	鋲頭径0.8cm。金銅装かどうか不明。
26	32−44	金銅製双脚飾鋲	1号墳石室　7区東区西a	1.7+	0.7+	0.2	−	錆化の状態から、金銅装と考えられる。
27	31−05	金銅製双脚飾鋲	1号墳石室　7区東	2.2+	1.5	0.2	長方形	錆化の状態から、金銅装と考えられる。
28	31−10	鉸具	1号墳石室　1区西b	5.3+	1.5+	0.5	長方形	表面腐食。
29	31−43	鉸具	1号墳石室　1区東b	3.8+	1.8+	0.65	長方形	
30	32−13	鉸具	1号墳石室　3区西	4.8+	2.1+	0.8	楕円形	
31	32−45	鉸具	1号墳石室　2区西a	3.3+	1.5+	0.8	楕円形	
32	32−14	小形部材（棒状）	1号墳石室　11区西b	2.0+	0.8	0.7	方形	釘か?
33	32−11	釘（L字状）	1号墳石室　2区東b	1.9+	1.0+	0.5	長方形	木質痕あり。
34	32−12	釘（棒状）	1号墳石室　2区東b	2.8+	0.7	0.45	長方形	木質痕あり。
35	31−08	小形部材	1号墳石室　3区東	1.6+	1.5+	0.3	長方形	用途不明。
57	33−15	茎尻金具	2号墳石室　i1	2.4+	2.1+	0.4	−	釘穴あり。
58	36−50・51	刀子	2号墳石室　6区西a・4区東b	4.9+4.4	1.3	0.4		茎部に木質痕。
59	33−17・18	刀子	2号墳石室　i3・4	6.0+6.6	1.1+	0.4		茎部に木質痕顕著。
60	33−16	刀子	2号墳石室　i2	12.7	1.6	0.4	−	茎部に木質痕顕著。
61	33−19	刀子	2号墳石室　i5	10.5+	1.2	0.3		両端の一部欠損。茎部に木質痕顕著。
62	33−28	短頸鏃	2号墳石室　i13	3.2+4.7	2.8	0.3		平根式。
63	33−29	短頸鏃	2号墳石室（羨道部）	5.6+2.0	3.4	0.4		広根式腸抉三角形鏃。2片。
64	33−34	鏃（茎部）	2号墳石室　0区東b	3.7+	0.5	0.5	方形	木質痕あり。
65	36−49	小形部材	2号墳石室　5区西a	2.2+	1.1+	0.4	長方形	木質痕なし。
66	35−37	釘	2号墳石室　i20	10.4+	0.8	0.4	長方形	木質痕不鮮明。
67	33−33	釘	2号墳石室　0区東b	4.3+	1.0	0.5	長方形	釘頭が潰れていない。
68	34−22	釘	2号墳石室　i8	16.0	1.6	0.5	方形	木質痕2種類。
69	34−21	釘	2号墳石室	15.9	2.1	0.55	方形	木質痕ほとんど見えず。
70	33−30	釘	2号墳石室　i14	15.5	0.5	0.5	長方形	釘頭が潰れていない。
71	34−27	釘	2号墳石室　i6	10.8+	1.8+	0.4	長方形	3方向に曲がる。木質痕2種類。
72	34−24	釘	2号墳石室　i10	10.2+3.0	1.2	0.5	長方形	木質痕2種類。
73	34−23	釘	2号墳石室　i9	12.7	1.2	0.3	長方形	木質痕2種類か?
74	34−26	釘	2号墳石室　i11・12	13.3	1.4	0.5	長方形	木質痕2種類。
75	35−35	釘	2号墳石室　i19	13.0	1.4	0.3	長方形	木質痕2種類。
76	35−38	釘	2号墳石室　i15	8.8+	0.9	0.4	長方形	木質痕2種類。
77	35−31・36	釘	2号墳石室　i17・18	7.0+5.2	1.2	0.4	長方形	木質痕2種類。
78	33−20	釘	2号墳石室　i7	9.4+	0.6	0.4	長方形	木質1方向。
79	36−48	釘	2号墳石室　1区西b	7.1+	0.8	0.3	長方形	木質痕1種類。
80	33−32	釘	2号墳石室　i16	10.1+	0.6	0.3	長方形	木質痕2種類。
104	37−40	鉄刀	3号墳石室　i1	74.5	3.3	0.8		目釘穴1箇所（不鮮明）。腐食顕著。
105	37−41	刀子	3号墳石室　4区東	4.3+	0.8	0.3		腐食顕著。

第4表　才良吉田谷古墳群・山ノ谷古墳群出土石製品観察表

報告番号	実測番号	名称	地区	遺構・層名等	高さ（cm）	直径（cm）	孔径（cm）	重さ（g）	材質	色調	調整・技法の特徴
3	38−15	丸　玉	吉田谷	1号墳石室　5区東b	0.75	0.914〜0.920	0.18	1.055	瑪瑙	橙	断面五角形状。頂部と底（穿孔部）は強い研磨、側面は弱い研磨。
4	38−14	小　玉	吉田谷	1号墳石室	0.298	0.411〜0.442	0.11	0.08	ガラス	黄（不透明）	
5	38−01	小　玉	吉田谷	1号墳石室　1区西b	0.31〜0.34	0.5〜0.63	0.15	0.195	ガラス	青（透明）	側面は丸い。
6	38−13	小　玉	吉田谷	1号墳石室　4区東b	0.292〜0.374	0.593〜0.602	0.17	0.195	ガラス	青（透明）	底面は割れ。
7	38−04	小　玉	吉田谷	1号墳石室　2区西a	0.329〜0.335	0.613〜0.702	0.15	0.225	ガラス	青（透明）	
8	38−02	小　玉	吉田谷	1号墳石室　5区東a	0.228〜0.349	0.510〜0.518	0.10	0.160	ガラス	青（透明）	
9	38−12	小　玉	吉田谷	1号墳石室　1・2区東底面	0.331〜0.342	0.536〜0.552	0.08〜0.10	0.155	ガラス	青（透明）	一部気泡入る。
10	38−08	小　玉	吉田谷	1号墳石室　5区東a	0.340〜0.371	0.632〜0.658	0.15	0.23	ガラス	紫紺（不透明）	側面は丸い。
11	38−07	小　玉	吉田谷	1号墳石室　3区東a	0.301	0.504	0.14	0.11	ガラス	紫紺（不透明）	
12	38−11	粟　玉	吉田谷	1号墳石室　6区東b	0.300〜0.345	0.528〜0.550	0.07	0.15	ガラス	紫紺（不透明）	気泡多い。
13	38−03	粟　玉	吉田谷	1号墳石室　6区東a	0.230〜0.239	0.339	0.09	0.195	ガラス	薄青（透明）	上下面は自然面残る。
14	38−06	粟　玉	吉田谷	1号墳石室　7区東b	0.132〜0.138	0.345	0.13	0.025	ガラス	薄緑（透明）	
15	38−05	粟　玉	吉田谷	1号墳石室　5区東a	0.211〜0.231	0.281	0.09	0.03	ガラス	薄青（不透明）	
16	38−09	粟　玉	吉田谷	1号墳石室　10区西a	0.112	0.303〜0.325	0.05	0.005	ガラス	薄青（透明）	
17	38−10	粟　玉	吉田谷	1号墳石室　4区西b	0.099〜0.131	0.275	0.09	0.005	ガラス	薄青（透明）	
56	38−16	小　玉	吉田谷	2号墳石室　2区東b	0.240〜0.401	0.596〜0.598	0.17	0.165	ガラス	薄青（透明）	下面は研磨か?
114	41−04	砥　石	山ノ谷	28号墳周溝（SD4）	長さ12.0	幅6.65	厚さ1.85	136.66	片岩		使用面1面

Ⅶ　調査のまとめと検討

今回の発掘調査では、才良吉田谷古墳群は３基、才良山ノ谷古墳群は１基、合計４基の古墳が対象となった。その結果、後期古墳に関する様々な資料を得ることができた。

これらは言うまでもなく才良地区のなかで重要な意味を持つものであるが、伊賀地域全体、さらには古墳時代の葬送そのものに対しても有意義な内容となっている。ここでは、とくに調査成果が豊かな才良吉田谷古墳群を中心に、発掘調査で得たことや、今後の課題などについて触れ、まとめとしよう。

１　古墳と古墳群の変遷

ａ　築造の変遷

才良吉田谷１～３号墳は、６世紀後葉から７世紀後葉にかけて造成された古墳群である。３基のなかで最も古く位置づけられるのは３号墳で、田辺昭三氏による陶邑編年のＭＴ85型式(1)に併行し、およそ６世紀後葉頃にあたる。３号墳は、調査した３基のなかで最も高所に位置するが、石室規模は小さい。それでも、全長75㎝にも及ぶ鉄刀を副葬している点は注目できる。

次いで１号墳が造成される。１号墳は３号墳の南、比高差約４ｍほど下にあたる。築造時期は６世紀末頃と考えられる。３号墳と比較して石室・墳丘ともに規模は大きく、副葬品も金銅装馬具を含む優秀なものである。

最後に造成されるのが２号墳である。２号墳は１号墳の北側、比高差約４ｍほど高い位置で、３号墳と接するように造成された。７世紀中葉頃と考えられる。副葬品は鉄製利器類や馬具などを含まないので１・３号墳と比べて見劣りするが、土器類の出土は多い。なかでも、尾張猿投窯系須恵器を多く含んでいることは注目できる。

古墳の造営は以上で終わるのだが、１号墳石室内からは７世紀後半頃の須恵器が出土している。石室内への追葬行為はこの時期頃まで継続していたと考えられる。

今回の発掘調査で確認された３基の古墳は、概ね以上のような変遷となる。ここには大きな特徴が二つ見える。

ひとつは、初現となる古墳はかなり小型（３号墳）で、次代において大型化する（１号墳）、という特徴である。もう一つは築造過程で、高所（３号墳）から低所（１号墳）へ移り、再度高所（２号墳）へ、という動きを見せることである。このふたつの特徴は、一見すると通常の古墳群では見られない特異なもののように思える。この点について見ておこう。

ｂ　初現を小型石室墳とすること

古墳群の造成は、最も古いものが最大かつ最良の占地をするというように、一般に理解されている。しかし、発掘調査事例を丹念に見ると、そうではない事例もかなりある。

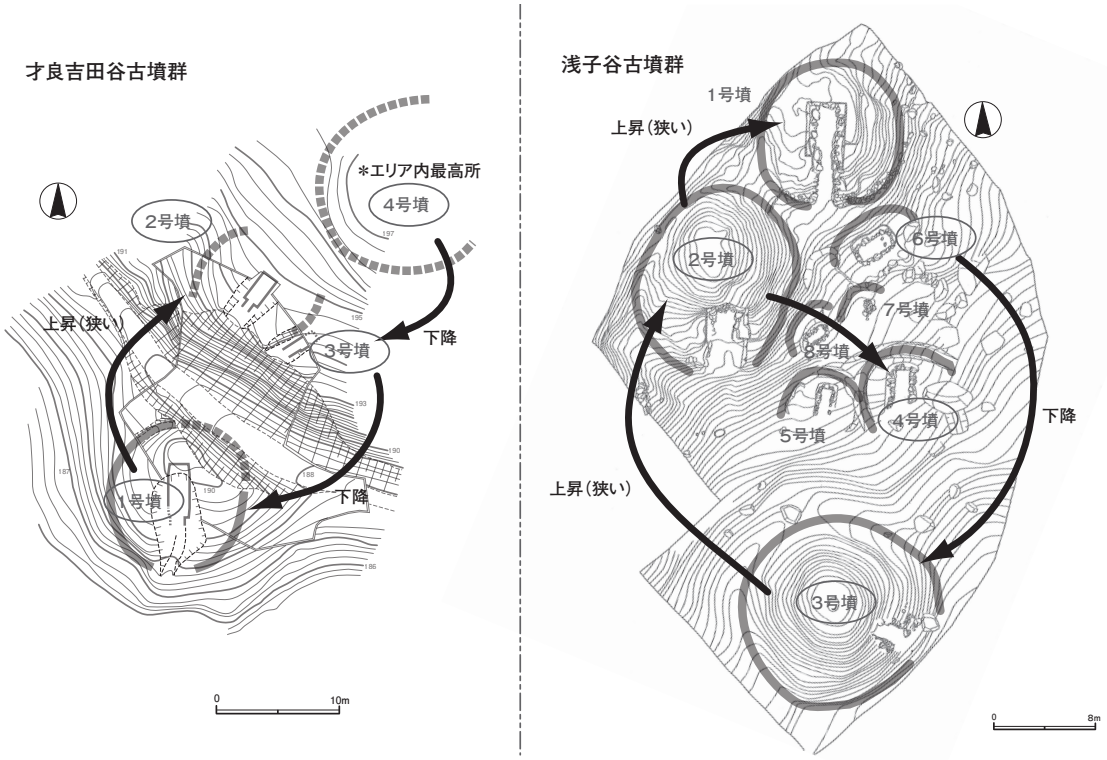
伊賀北部に位置する浅子谷古墳群（伊賀市三田）では、横穴式石室を中心とする８基の後期古墳群が発掘調査された(2)。ここで最も古いのは、陶邑編年のＴＫ10型式の須恵器を伴う６号墳である。６号墳は古墳群域の中程にあるが、竪穴式小石室で、明確な墳丘を持たない小規模墳である。その後は、３号墳・２号墳などかなり立派な横穴式石室を伴う古墳群が続く。

天童山古墳群（伊賀市上郡）も横穴式石室墳を中心とする後期古墳群で、３基（４基）が発掘調査された(3)。ここでは13号墳と「８号墳第２石室」とされる竪穴式小石室が古く、陶邑編年ＭＴ85型式の須恵器を伴っている。注目なのは次代の８号墳（第１石室）で、「第２石室」を取り込むように墳丘が築造されている。最も優秀な副葬品を持つのが８号墳第１石室なので、これもやはり次代の方が立派な石室を構築しているということができる。

以上の僅かな事例を見ても、小規模石室墳が群内で先行する事例を、特異なものとして扱うことはできないといえる。

ｃ　築造過程に関して

未調査だが、才良吉田谷１～３号墳の付近には４



第37図　古墳の築造地点変遷

号墳がある。４号墳は２・３号墳の北部、比高差約３ｍの位置にある（第37図ほか）。墳形と立地は、本報告にある才良山ノ谷28号墳に類似するため、おそらく１～３号墳よりも古い構築と見られる。つまり１～４号墳の一群は、４号墳→３号墳→１号墳→２号墳と考えられる。一群としての動きは、当初は丘陵最高所に位置した後は下降し、最後にまた高所へと移動する、ということになる。

「上がって下がってまた上がる」…こんな占地は異常なのだろうか。これについても、事例をあたると、そこそこ見られる。

浅子谷古墳群は、最古の６号墳の後、３号墳→２号墳→１・４号墳という過程をたどる（第37図）。群域の中程に築造された６号墳から一旦比高は下がり、次には６号墳よりも高位に２号墳→１号墳と築かれる。４号墳は築造箇所の隙間を縫うように、６号墳と３号墳との間に築かれたのであろう。

天童山古墳群も、比較的古い13号墳は比高の低い位置に、より優秀な副葬品を持つ８号墳はやや比高の高い位置にある。しかし、これらよりもさらに比高の高い位置に６・５号墳（調査範囲外）があり、時期的にも古い可能性が高い。

伊賀エリア外にもこの傾向はある。落合古墳群（伊勢市津村町）は４世紀末から６世紀前半にかけての群集墳で、初現の４号墳は丘陵尾根筋から少し低い位置に造られる[(4)]。続く３号墳（群中で最も豊富な副葬品を持つ）が丘陵尾根筋の最高所に位置した後は比高を下げて５号墳他が造られる。６世紀初頭頃になると、これまでの隙間（空閑地）を埋めるように１・２号墳が造成されている。時期こそ才良吉田谷古墳群よりも古いが、「上がって下がってまた上がる」という状況は本質的に同様である。

これらの事例から、古墳群の築造順序と構成は単純に比高差では表せないといえる。というよりも、そもそも複雑な上下を繰り返すのが一般的なあり方とすら言えるかも知れない。

d　群構成と築造過程の評価にあたって

ここで見た小石室墳と築造過程に関することから、今後の課題として以下を提示しておく。

小石室墳は、副葬品や石室規模の違いから、古墳群のなかで注目されることはあまり無い。しかし、初現的な存在として件の小石室墳を位置づける検討が

必要である。小石室墳は、後続する大型墳のよりも下位の人物として扱われがちであるが、そもそもその認識が正しいのかどうかを疑う必要がある(5)。

古墳の比高が上下することについても、小石室墳をどう位置づけるかによって意義付けが異なろう。才良吉田谷古墳群の場合、築造スペースと古墳への意識の問題も絡む。３号墳の存在を意識する必要のあった１号墳は、相応の古墳を築くには比高を下げる位置に占地することになった。さらに新しい２号墳の築造段階は、スペース的な余裕がより一層無くなり、３号墳の横に占地せざるを得なかったのではないだろうか。（伊藤）

２　横穴式石室の形態とその空間

ａ　石室の形態

才良吉田谷１～３号墳で確認された横穴式石室は。それぞれに特徴を有している。

１号墳　１号墳の横穴式石室は、立石状の基底石（腰石）を配置し、その後は平たい石材を横位に積み上げることで構築されている。また、玄室部分は奥壁幅よりも室幅が広く、全体としてやや胴張りとなっている点も特徴といえる。

玄室に立石状の腰石を配する形態は、名張市尻矢古墳群１号墳・２号墳(6)に見られるが、胴張りの形態を近隣で求めると、北伊勢地域となる(7)。竹内英昭氏の整理にあるように、胴張りを呈するという要素そのものは少ないながらも近畿地方にも見られる(8)ので、才良吉田谷１号墳の事例のみで北伊勢地域と伊賀地域との石室を云々することは少し早急である。ただし、後続する２号墳で尾張猿投窯系須恵器が多く出土していることから、両地域の石室形態での関係追求は今後考えていくべき課題であろう。

２号墳　２号墳の石室では、玄室左側壁に２つほど注目できる要素がある。

まず、側壁の中程に見られる縦方向の目地である。石組みの強度を保つためには、縦方向の目地は致命的で、崩壊を誘発しかねない。この点で、２号墳の石室は当初より崩壊の危険性を伴っていたといえる。では、なぜこのような縦目地が通っているのか。

可能性として、石室の奥壁が当初はこの目地位置で、その後の設計変更で広がったのではないかという点を指摘しておきたい。

もう一つは、側壁の両端、つまり奥壁寄りと玄門寄りの石材が上がる、という点である。このような石室形態は、奈良県天理市の石峯５号墳(9)や滋賀県大津市の小山４号墳(10)にもある。石材の用い方としては、大きくは隙間に石材を落とし込む方法であり、明治時代以降に頻出する「谷落とし」を彷彿とさせる。強度が弱い組み方であり、前代に比べて石室構築方法の退化（杜撰化）が見られる。

ｂ　石室空間

才良吉田谷２号墳では、早期に石室が崩壊したと考えられることから、盗掘を免れた状況が確認できた。全体を調査していないものの、３号墳も同様に盗掘は無かった。この事例から、石室内の空間利用について見ておこう。

仕切石　２号墳では、玄室内の羨道寄りに仕切石が見られた。仕切石は玄室を横断し、空間の約1/4を区分けしている。石材は玄室床面整地土上に並べられたもので、床面整形と一体化して造作されているわけではない。

この石列の性格としては、「屍床仕切石」と呼ばれるもの(11)にも似るが、棺の緊結に用いられた釘類がこの石列上にあることを踏まえると、石列は棺台の機能も果たしていた可能性がある。

なお、この石列を境に、玄室内部の副葬品が異なっている点は注目できる。石列よりも奥壁側の広い空間には刀子や須恵器坏類といった遺物が見られるのに対し、仕切石南には鉄鏃や須恵器高坏・壺などが配置されている。

以上の点を見れば、この仕切石は玄室の空間利用区分を示すものと見なされる。

仕切石の事例は、伊賀地域では天童山８号墳第１石室にあるが、才良吉田山２号墳ほど明確ではない。近隣事例では、滋賀県米原市（旧近江町）の黄牛塚古墳(12)のものに類似する。

石室空間の利用方法　２号墳玄室の出土遺物は、羨道から見て左側に集中し、右手は比較的広く開いている状況である。釘の出土位置も石室内左手に集中する。つまり、羨道から入れられた棺は、奥壁に向かって左側に置かれていることになる。

奥壁に向かって左側に棺や遺物、右側は開く、とい

うスタイルは、伊賀地域では名張市尻矢１号墳、同市上山古墳群[13]（名張市）のほか、伊賀市勝地大坪古墳群[14]などにも見られる。伊賀南部での事例は多いといえよう。

これに関連すると考えられるのが、玄室左手前に土器類をまとめて配置する行為である。２号墳・３号墳ともにこの状況が確認できた。まとめられるのは壺・高坏などで、坏類はこれに含まれない。壺類をこの位置にまとめるという行為は、天童山８号墳第１石室、勝地大坪２号墳でも見られる。

破砕土器など　２号墳石室内からは、須恵器類のなかに破砕されたものや、破片の場所を意図的に変えた可能性がある個体がいくつか見られた。儀礼的に須恵器を破壊する事例は、墳丘上で行う事例は落合３号墳などでも確認されているが、石室内での行為としてはあまり認識されていないと考えられる。遺体を納める空間での儀礼行為として、今後注意を要する課題であろう。（伊藤）

３　出土遺物の特徴

ここでは、いくつかの注目できる遺物についてまとめておく。

ａ　金銅製馬具類

才良吉田谷１号墳からは、金銅装馬具類が出土している。ひとつは辻金具で、十字形を呈したものである。形態は単純だが、これまでほとんど出土事例は無い。

また、双脚飾鋲は、馬具の後輪に用いられると考えられているもので、伊賀地域だけでなく、三重県内でも初めての確認事例になる。ちなみに、これまでの事例では伊勢湾沿岸部以東の東日本での確認事例が多い[15]。

盗掘等による散逸を考慮しても、才良吉田谷１号墳の副葬品は相応の優秀さがあるといえる。

ｂ　尾張猿投窯系須恵器類

２号墳からは、伊賀地域産須恵器とともに、尾張猿投窯系と考えられる須恵器[16]がまとまって出土した。猿投窯系須恵器の出土は、伊勢湾西岸地域では比較的多く出土するが、伊賀地域内ではまとまったものとしてははじめてである。

このため、近隣の既調査古墳でも猿投窯系須恵器が出土していないかどうかを確認したところ、いくつか該当事例があった。浅子谷古墳群では、３号墳に１点ある（報告番号17）。天童山８号墳第１石室では、確実ではないが手法的に類似するものが１点ある（報告番号314）。

以上のことから、伊賀地域の当該期古墳には尾張猿投窯系須恵器が多少なりとも見られることが指摘できる。ただ、これらの古墳では才良吉田谷２号墳のようにまとまった量は出土していない。才良吉田谷２号墳の出土量は傑出している。そこには何らかの要因があると考えられる。

伊賀地域における尾張猿投窯系須恵器が、流通といえるものかどうかは、才良吉田谷２号墳の事例のみからは言えない。おそらく、近隣の天童山古墳群では見られない現象であることを踏まえれば、一般的に流通していたわけではないと考えるのが適切だろう。したがって可能性としては、尾張方面か、あるいは尾張産須恵器を普通に入手し得る伊勢湾西岸地域の人物（ないしは集団）と、才良吉田谷古墳群を形成した集団間の狭義の関係が背後にあると考えておきたい。

先述の石室構造も含め、伊勢湾西岸地域（あるいは尾張）との関係という観点は、これまでの伊賀地域にはあまり無かった。今後の伊賀地域の古墳時代を考える上で、今回の調査成果は極めて大きいと言えるであろう。（伊藤）

４　才良吉田谷古墳群と枡川地区

最後に、才良吉田谷古墳群と周辺遺跡の関係をみておく。

今回調査した才良吉田谷古墳群は、現在の行政区分としては才良地区に含まれるが、狭義に見ると枡川地区に向いて開いている。枡川地区は、近世までは才良地区の一角だが、もともとひとつの完結した小盆地の空間で、独立性は高い。

このエリアには、今回内容の判明した才良吉田谷１～３号墳以外にも以前から注目されている古墳がある。枡川山神社古墳である。この古墳は金銅製の山梔玉が出土した[17]ことで知られているが、『上野市遺跡地図』には明示されていない。

昭和36年に森川櫻男氏が作成された「埋蔵文化財

第38図　才良吉田谷１号墳・枡川山神社古墳の位置

包蔵地調査カード」では、その位置は「刀狭間491番地」、立地は「斜面」とされている。この位置を探すと、概ね第38図のような位置となる。現地として明示はできないにしても、枡川集落の東部丘陵裾にあったことは間違いないだろう。したがって枡川集落の地には、枡川山神社古墳・才良吉田谷１号墳と、２基の金銅製品を出土する古墳があることになる。

枡川小盆地の丘陵を隔てた西側は、よく知られている古代寺院財良寺跡（才良廃寺）があった。財良寺跡は、出土瓦から７世紀後葉にはじまる寺院と考えられている[18]。つまり、枡川地区に金銅装製品の副葬される古墳が築造された直後頃に造営がはじまるのである。

比自岐川流域は、古墳時代前期末に石山古墳が、古墳時代後期前半に王塚古墳が造営され、さらに白鳳寺院として財良寺跡のあることから、地域的に重要な地として認識されてきた。今回の才良吉田谷古墳群ほかの調査により、その間隙を埋める資料が揃ったといえる。すなわち、大規模古墳こそ見られないながらも、６世紀末から７世紀にかけての当地には、優秀な金銅製品を入手可能な人物（ないしは集団）が存在しており、後の財良寺跡の造営へとつながっていくのであろう。（伊藤）

５　才良山ノ谷28号墳と才良吉田谷遺跡

ａ　才良山ノ谷28号墳の評価

才良山ノ谷28号墳は、丘陵尾根と直交するように周溝を直線的に掘削していることから、一辺約14mの不定形な方墳ということができる。ただし、墳頂付近は等高線が円形に巡ることから、墳形の成形はあまく、円形とも方墳ともとらえ得るものだったと考えられる。古墳の築造時期は、周溝から陶邑編年ＴＫ10型式の須恵器坏身が出土したことから、６世紀前半と考えられる。

群集墳の研究によるとＴＫ23型式期～ＴＫ47型式期に円墳化の傾向が認められるという[19]。ここでいう円墳は、直葬系の埋葬施設を主体とし、盛土等によって墳丘を成形するものをさす。

才良山ノ谷28号墳は、周溝と墳頂の特徴、ならびに盛土と考えられる土層が認められなかったことから、前代的な形態を強く残すと評価できる。したがって、才良山ノ谷28号墳はこの傾向に該当しない。群集墳の円墳化は一般的な傾向だが、当墳等の実状をふまえた群集墳の展開を評価する必要があろう。この観点から、才良山ノ谷28号墳は重要な示唆を与えている。

ｂ　才良吉田谷遺跡の評価

吉田谷Ｃ工区において近世の祠等の基礎を検出した。この遺構に関しては、近くの才良吉田谷11号墳上に「富士大権現」と刻まれた石碑が見られること、「伊賀富士」の別称をもつ尼ヶ岳が遠望できることから、富士講（浅間講）に関連する可能性がある。この遺構は、当地の近世信仰を知るうえで貴重な事例といえよう。（髙松）

６　才良・沖地区東部丘陵の分布調査成果

ａ　昭和30年代の砂防事業による影響

伊賀では、昭和30年代に国の雇用対策の一環として砂防事業が行われた。この砂防事業によって丘陵の稜線部分は削平され、いくつもの平坦面が階段状に形成された。燃料材採取によって禿げ山となり、しばしば土砂崩れを起こしていた里山の治山が図られたが、丘陵は大きな改変を被ることになったのである。この結果、丘陵稜線上に立地する墳墓等の諸遺跡は、現況での判断がきわめて困難となった。

こうした事情を考慮して、これまでに公表されている遺跡地図を基礎として[20]、改めて詳細な分布調査を行った。本節ではこの成果にふれて、将来の開発等に備えることにしよう（第40図、第５・６表）。

沖藤谷古墳群　直径20m未満の円墳２基で構成される。いずれも築造時期の手がかりとなる特徴はとらえることができなかった。

沖大谷古墳群　直径20m未満の円墳２基からなる。沖藤谷古墳群と同様に詳細を知る手がかりは得られていない。

沖打越古墳群　墳長36mの前方後円墳１基、24mの造出し付円墳１基、直径20m未満の円墳３基で構成される。このうち造出し付円墳の１号墳は発掘調査が実施されており、中期前葉の築造と判明した[21]。４号墳は墳形・墳丘高から古墳時代前期に築造された可能性がある。この他、２号墳・３号墳は１号墳調査時に出土した土器から弥生時代・古墳時代前期に遡る可能性をもつ。

以上の点から、沖打越古墳群は古墳時代前期から中期を中心とした時期に盛んな造墓活動がなされたといえる。

才良山ノ谷古墳群　27基の円墳、１基の方墳の合計28基で構成される。ほとんどが直径20m未満だが、５号墳は直径26mとやや大きい。また、13号墳は石室が露出しており、ＭＴ15型式の須恵器が表採されている（第39図）。この古墳群では28号墳で発掘調査を実施しており、本書第Ⅴ章にて報告している。

才良山ノ谷古墳群は古墳時代後期に盛行期を持つようである。ただし、弥生時代後期から古墳時代前期に遡る可能性をもつ形状の墳墓もいくつか見られる点は注意を要する。

才良吉田谷古墳群　造出し付円墳２基、円墳22基の合計24基で構成される。造出し付円墳の14号墳は墳長37m、21号墳は墳長25mの大きさで、14号墳では埴輪が採集されている（第39図115・116）。当古墳群のうち１～３号墳の発掘調査が実施されており、馬具等の副葬品が出土した。その詳細は本書第Ⅲ・Ⅳ章を参照願いたい。

才良吉田谷古墳群の造営時期は、古墳時代中期から後期を中心とした時期と推察される。ただし、弥生時代後期から古墳時代前期の可能性をもつ墳墓もいくつか見られる点は、才良山ノ谷古墳群と同様に注意すべき点である。

この他、当古墳群の東には既登録の才良山１号墳がある。墳長25mの造出し付円墳で埴輪が表採されていることから、中期に築かれたと考えられる。

枡川古屋敷古墳群　５基の円墳で構成される。いずれも直径20m未満の大きさで、１号墳・３号墳・４号墳は横穴式石室を採用している。当古墳群の主要な造営時期は古墳時代後期といえるだろう。

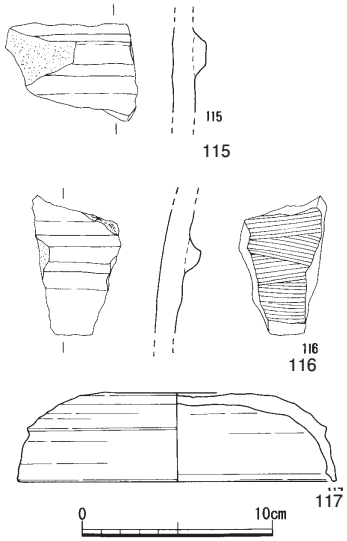
なお、この古墳群内に既登録の観音寺山古墳がある。墳長35mの前方後円墳とされるが、分布調査の結果、古墳の可能性は低いと考えられる。この点は注意を要する。

枡川狭間古墳群　現在のところ１基を確認するにとどまる。なお、枡川刀挟間491に枡川山神社古墳が登録されており、先述のように梔子玉の出土が知られる。

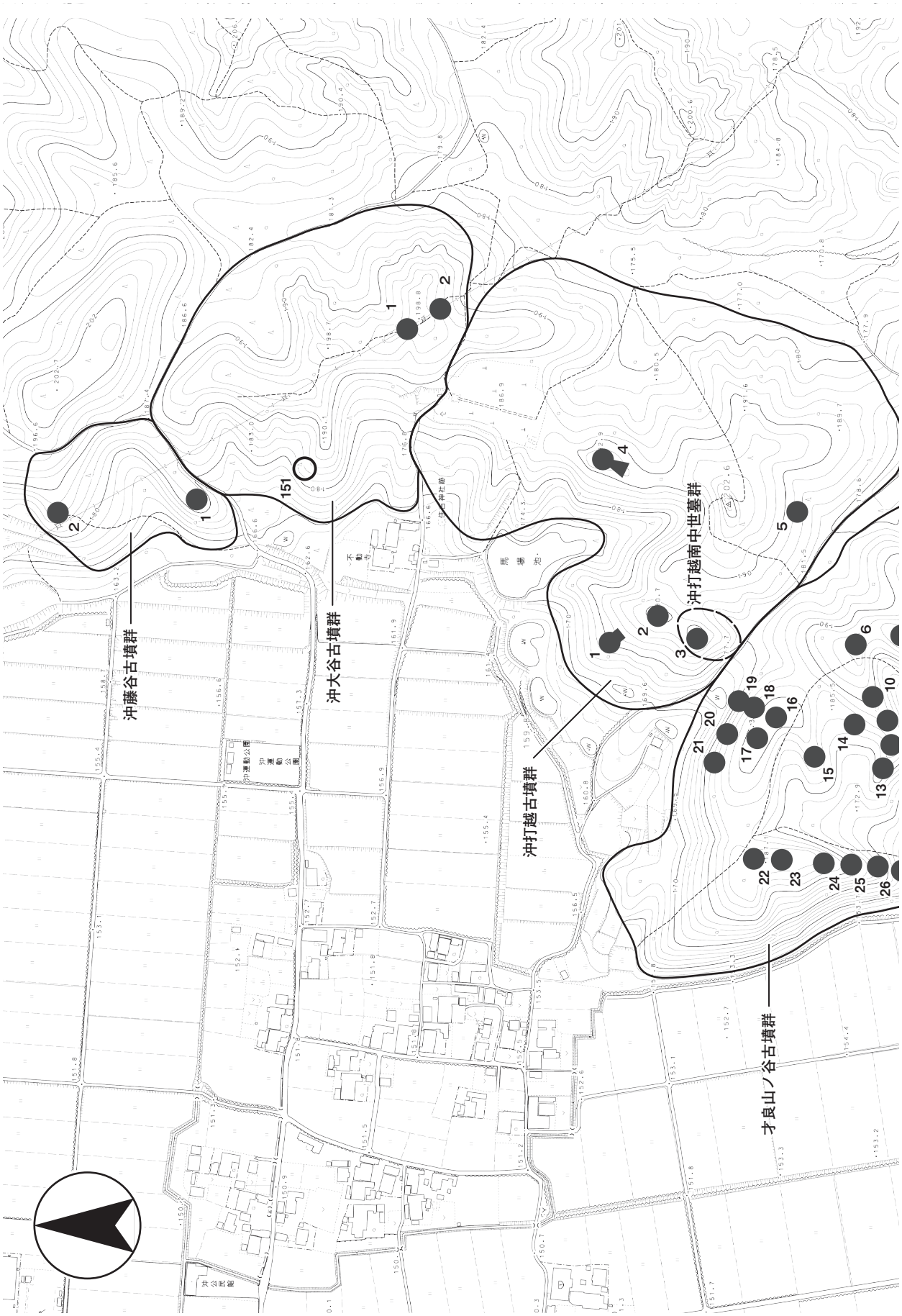
ｂ　対象地の特徴

以上、各古墳群の概要についてまとめたので、対象地全体の特徴をまとめておこう。対象地では、弥生時代後期から古墳時代前期に遡る可能性をもつ墳墓がいくつか見られる。沖打越４号墳等がこれに相当しよう。

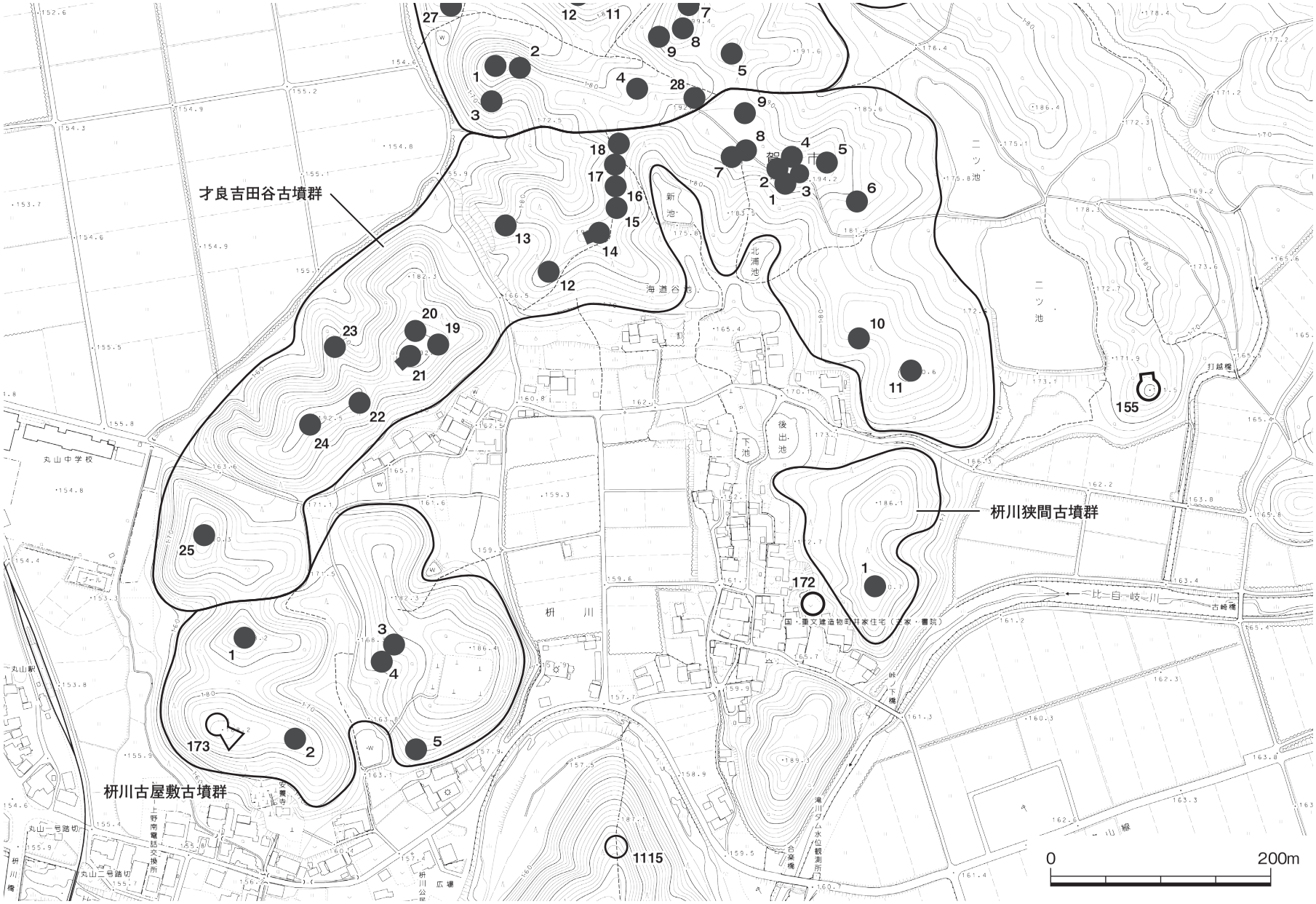
これらを除いた確実な例としては、中期前葉に沖打越１号墳、中期から後期にかけて造出し付円墳の３基のほか、多くの円墳が築造されている。墳丘規模は40m以下であり、中小首長のほか有力家長層に



第39図　才良山ノ谷・吉田谷古墳群採集遺物実測図（１：４）



第40図　才良・沖地区東部丘陵の古墳分布


才良吉田谷古墳群
枅川狭間古墳群
枅川古屋敷古墳群
枅川
比自岐川
国・重文建造物町井家住宅（主家・書院）
0
200m

第５表　才良・沖地区東部丘陵の遺跡分布（１）

古墳群・号名	台帳登録 No.	上野市 1978	墳形	墳丘長（m）	墳丘高（m）	埋葬施設	調査結果	備考
沖藤谷１号墳	1305	339	円	13	1			南西隅に祠あり　北西隅にも祠に伴う石積み
沖藤谷２号墳	1306	338	円	16	0.5			
不動寺１号墳	151	320						確認できず
沖大谷１号墳	1307	316	円	16	2			
沖大谷２号墳	1308	315	円	13	1		石材あり	315 は「包蔵地　須恵器」で登録
沖打越１号墳	1302	−	造出付円	24	3	木棺直葬	発掘調査	
沖打越２号墳	1309	323	円	7	1			
沖打越３号墳	1310	325	円	14	1			
沖打越４号墳	1311	−	前方後円	36	1.5			
沖打越５号墳	1312	−	円	9.5	1	横穴式石室		
沖打越南中世墓	1313	−					石仏１体あり	
才良山１号墳	155	327	造出付円	25	3			
才良山ノ谷１号墳	1275	503	円	16	1.8			
才良山ノ谷２号墳	1276	504	円	16	1.5		石あり	
才良山ノ谷３号墳	1277	502	円	15	1		「山神」碑あり	一時期「杉ノ本１号墳」とされていたもの
才良山ノ谷４号墳	1278	−	円	16	2		盗掘坑あり　周溝・石あり	
才良山ノ谷５号墳	1279	−	円	26	1.5			
才良山ノ谷６号墳	1280	490	円	22	1.5			
才良山ノ谷７号墳	1281	−	円	19	2		盗掘坑あり　石あり　８号墳との間に周溝	
才良山ノ谷８号墳	1282	−	円	14	2		７号墳との間に周溝	
才良山ノ谷９号墳	1283	−	円	8	1.5			
才良山ノ谷 10 号墳	1284	499	円	16	1.5		石あり	
才良山ノ谷 11 号墳	1285	506	円	14	1.8			
才良山ノ谷 12 号墳	1286	497	円	14	1.5		周溝あり	
才良山ノ谷 13 号墳	1287	496	円	16	2	横穴式石室	天井石残存	須恵器採集（本書第Ⅷ章参照）
才良山ノ谷 14 号墳	1288	498	円	15	1.5		盗掘坑あり　周溝あり	
才良山ノ谷 15 号墳	1289	495	円	21	1.5			
才良山ノ谷 16 号墳	1290	−	円	18	2			
才良山ノ谷 17 号墳	1291	−	円	19	2			
才良山ノ谷 18 号墳	1292	−	円	11	1.5		石あり	
才良山ノ谷 19 号墳	1293	−	円	15	2		石あり	
才良山ノ谷 20 号墳	1294	−	円	12	1.5		周溝あり	
才良山ノ谷 21 号墳	1295	−	円	15	1.5		石あり	
才良山ノ谷 22 号墳	1296	−	円	13	1.5			
才良山ノ谷 23 号墳	1297	488	円	18	2	横穴式石室	石材散乱	
才良山ノ谷 24 号墳	1298	489	円	12	1.5			
才良山ノ谷 25 号墳	1299	−	円	12	2			
才良山ノ谷 26 号墳	1300	−	円	16	1		石材散乱	
才良山ノ谷 27 号墳	1301	−	円	9	1.5		石材散乱	
才良山ノ谷 28 号墳	1303	−	方？	14	2		発掘調査	本書第Ⅴ章参照
才良吉田谷１号墳	1246	516	円	12	2.6	横穴式石室	発掘調査	本書第Ⅲ・Ⅳ章参照
才良吉田谷２号墳	1258	−	円	11	1	横穴式石室	発掘調査	本書第Ⅲ・Ⅳ章参照
才良吉田谷３号墳	1259	−	？			横穴式石室	発掘調査	本書第Ⅲ・Ⅳ章参照
才良吉田谷４号墳	1260	493	円	16	1.2		円形　石あり	
才良吉田谷５号墳	1261	−	円	19	1.5		墳丘低い　石あり	
才良吉田谷６号墳	1262	−	円	11	1.5		石あり	
才良吉田谷７号墳	1263	−	円	15	2		盗掘坑あり　石あり	
才良吉田谷８号墳	1264	−	円	13	1.5		道で半壊	本書第Ⅴ章参照
才良吉田谷９号墳	1265	505	円	13	1.5			
才良吉田谷 10 号墳	1266	−	円	13	1		盗掘坑あり　石あり	
才良吉田谷 11 号墳	1267	517	円	19	3	横穴式石室	「富士講碑」あり	
才良吉田谷 12 号墳	1268	511	円	28	2.5			
才良吉田谷 13 号墳	1269	512	円	9	1.5		周溝あり	
才良吉田谷 14 号墳	1270	514	造出付円	37	3		盗掘坑あり　石あり	
才良吉田谷 15 号墳	1271	510	円	14	1.2			
才良吉田谷 16 号墳	1272	508	円	14	2			
才良吉田谷 17 号墳	1273	507	円	11	1.5		周溝あり	
才良吉田谷 18 号墳	1274	506	円	14	2		盗掘坑あり	
才良吉田谷 19 号墳	1314	460 か 465	円	13	2			
才良吉田谷 20 号墳	1315	458 ？	円	21	2			
才良吉田谷 21 号墳	1316	458 と 467	造出付円	22	3		盗掘坑あり	
才良吉田谷 22 号墳	1317	466	円	10	1	横穴式石室	盗掘坑あり	
才良吉田谷 23 号墳	1318	461	円	13	2			
才良吉田谷 24 号墳	1319	454	円	11	1			
才良吉田谷 25 号墳	1320	468	円	18	1.5			

第６表　才良・沖地区東部丘陵の遺跡分布（２）

古墳群・号名	台帳登録No.	上野市1978	墳形	墳丘長（m）	墳丘高（m）	埋葬施設	調査結果	備考
才良吉田谷遺跡	1304						近世の祠等	本書第Ⅴ章参照
枡川古屋敷１号墳	1321	475	円	16	2.5	横穴式石室		
観音寺山古墳	173	477	前方後円	35 ？	2			古墳ではない可能性あり　477は「包蔵地」で登録
枡川古屋敷２号墳	1322	479	円	15	1.5		石材散乱	479は「包蔵地　中世末」で登録
枡川古屋敷３号墳	1323	485 ？	円	10	1.5	横穴式石室	盗掘坑あり	
枡川古屋敷４号墳	1324	484 ？	円	14	2	横穴式石室	盗掘坑あり	
枡川古屋敷５号墳	1325	480	円	13	2	横穴式石室か	盗掘坑あり	
枡川狭間１号墳	1326	－	円	15	1.5		盗掘坑あり	

※このほか、枡川刀挟間491に枡川山神社古墳が包蔵地カード（台帳登録No.172）で登録されている
※沖藤谷地区未踏査部（337（旧社地）・340・341・342）
※沖大谷地区未踏査部（319（寺院跡））
※沖打越地区未踏査部（311（旧社地）・312（旧社地）・321）
※才良吉田谷地区未踏査部（451・450）、確認できなったもの（457・459・464）

よって造営されたと想定される。

c　伊賀盆地南部における首長系譜の変動

次に周辺における古墳の変遷も含めて首長系譜の変動[22]を中心にまとめてみよう。伊賀の首長系譜は、これまでに山本雅靖氏が整理されている[23]。山本氏は伊賀盆地を阿拝地域・山田地域・伊賀地域・名張地域の４地域に区分し、伊賀地域を美旗古墳群のある上流域、石山古墳を擁する比自岐川流域、ぬか塚古墳の見られる中流域に細分する。本稿でもこの区分に従って、伊賀地域の首長系譜を概観しよう。なお、沖打越古墳群・才良吉田谷古墳群等は所属流域を明瞭にしがたい事例であるが、ひとまず中流域に含めておきたい。いずれにしても沖打越１号墳の家形埴輪が示すように、中流域と比自岐川流域の結びつきが深いことをふまえておきたい。

弥生時代後期～古墳時代前期　当該期の確実な例は知られていない。古墳時代前期の候補として中流域の沖打越４号墳があげられるが、不明な点が多い。

阿拝地域では東山古墳・山神寄建神社古墳等が見られることから、伊賀地域においても将来的に当該期の墳墓が明らかになる可能性があろう。

また、中流域では前期後半から大規模祭祀遺構を伴う城之越遺跡[24]の存在が顕著となる。遺跡の形成時期を勘案すれば、石山古墳に葬られた首長の関与が想定されよう。

古墳時代中期　比自岐川流域において墳長120mの石山古墳が築造される。その内容は卓越しており、当該期の示準となりうる古墳である[25]。

上流域では美旗古墳群の形成が始まり、中期前葉に首長墳の殿塚古墳とその陪冢わき塚１号墳・２号墳が築かれる。これに後続するように中期中葉の女良塚古墳、中期後葉の馬塚古墳が築造される。美旗古墳群では、中期を通して首長墳が築造されている。また、わき塚１号墳において甲冑が出土しており、中央との強いつながりがうかがえる。

この他、上流域とも中流域ともとらえ得る位置に近代古墳が築かれる。中期後葉の造出し付円墳で甲冑が出土している。

中流域では造出し付円墳のぬか塚古墳が築造される。また、付近では大規模集落である森脇遺跡の形成が始まり、SD202において小型品ではあるが閂受けをもつ木製扉が出土している[26]点は注目されよう。

古墳時代後期　首長墳の規模が40m程度に縮小する。比自岐川流域では墳長約40mの王塚古墳が築造される。この古墳の人物埴輪には赤・白・緑の彩色が施されており、珍しい事例といえる。王塚古墳を除けばこの流域では群集墳が盛行する。

中流域においては群集墳のさかんな造営が見られる一方で、際立った首長墳がみられない状況にある。なお、古代においては、中流域に規則的に配列された掘立柱建物を中心とした森脇遺跡があり、官衙的な性格を想定できる。この他、古代寺院の才良廃寺が造営される。

上流域では首長クラスの古墳として、貴人塚古墳・赤井塚古墳が築かれる。この他、名張地域西部において琴平山古墳などが築造されており、前代との相違が際立つ。

まとめ　以上をまとめると伊賀地域では弥生時代後期から古墳時代前期においては首長クラスの墳墓造営が低調といえる。

古墳時代中期になると、石山古墳築造を契機とし

て大規模な首長墳が多く築かれる。特に美旗古墳群では中期を通じて首長の造墓が顕著である。首長の盟主権[27]をとらえてみると、中期初頭には比自岐川流域(石山古墳)に求めることができるが、中期前葉には上流域(美旗古墳群)へと移ったと考えられる。美旗古墳群は中期後葉において全国的にみられる首長系譜の変動をくぐり抜けており特異な状況を呈する。畿内辺縁において要となる立地の美旗古墳群が特に重視されていた証左かもしれない。

こうした状況の下、中流域・比自岐川流域では有力な首長墳は築かれなかった。しかし、中小の首長墳はいくつか認められる。このうち、沖打越１号墳・才良山１号墳・才良吉田谷14号墳・才良吉田谷21号墳の造出し付円墳は、継続的に築造された中小首長墳として評価できる可能性がある。盟主権を明け渡した地域が、どのような動向をたどるのかをとらえた貴重な事例といえる。

これまで大規模古墳の消長から盟主的首長の推移・地域間の優劣が論じられてきた。しかし、当地の検討から盟主権を持たない中小首長・地域の実態を明らかにすることができた。この実態を従前のとらえ方に付加することで、古墳時代の首長間・地域間関係の評価・理解をさらに深化させることができるだろう。この意味において、一連の発掘調査および分布調査は大きな意義を持つのである。　(髙松)

＜註・文献＞

(1) 田辺昭三『須恵器大成』（角川書店、1980年）。

(2) 三重県埋蔵文化財センター『浅子谷古墳群高尾北支群発掘調査報告』（2012年）。以下、浅子谷古墳群に関してはこの文献に拠る。

(3) 三重県埋蔵文化財センター『天童山古墳群発掘調査報告』（2006年）。以下、天童山古墳群に関してはこの文献に拠る。

(4) 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告』第３分冊（1993年）。以下、落合古墳群に関してはこの文献に拠る。

(5) 天童山８号墳第２石室は、水銀朱を用いた棺の存在が想定されるとともに、土師器瑕や小型の杓子形土製品など、儀礼的な遺物が見られ、通常の副葬品構成とは異なった様相が見える。初現となる墳墓の被葬者が、このような儀礼的なあり方を示す場合があることも、この問題を考えるうえで重要な要素となろう。

(6) 名張市遺跡調査会『尻矢古墳群』（1995年）。以下、尻矢古墳群に関してはこの文献に拠る。

(7) 竹内英昭「三重県の横穴式石室研究」（『研究紀要』第４号、三重県埋蔵文化財センター、1995年）

(8) 竹内「北勢地域の胴張形石室」（『Miehistory』８、三重歴史文化研究会、1996年）

(9) 奈良県立橿原考古学研究所『天理市石上・豊田古墳群』Ⅱ（1976年）

(10) 大津市教育委員会『滋賀里・穴太地区遺跡群発掘調

(11) 土生田純之「横穴系の埋葬施設」（『古墳時代の研究』第７巻、雄山閣、1998年）

(12) 滋賀県教育委員会『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告』Ⅲ（1976年）

(13) 名張市遺跡調査会『男山古墳群・上山古墳群』（1994年）

(14) 三重県埋蔵文化財センター「勝地大坪遺跡・勝地大坪古墳群」（『平成３年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第１分冊、1992年）。以下、勝地大坪古墳群に関してはこの文献に拠る。

(15) 双脚飾鋲は、千葉県駄ノ塚古墳（国立歴史民俗博物館編『国立歴史民俗博物館研究報告第65集　千葉県成東町駄ノ塚古墳発掘調査報告』1996年）のほか、関東方面での出土事例が知られる（『東京国立博物館図版目録　古墳遺物編　関東Ⅲ』）。

(16) 東海土器研究会編『須恵器生産の出現から消滅』（2000年）。

(17) 小林行雄編『世界考古学大系』第３巻（平凡社、1958年）。

(18) 伊賀市編『上野市史』考古編（2005年）

(19) 和田晴吾「群集墳と終末期古墳」（『新版古代の日本』第５巻近畿Ⅰ、角川書店、1992年）

(20) 上野市『埋蔵文化財第一次調査報告－上野市南部都市開発区域－』（1978年）、上野市教育委員会・上野市遺跡調査会『上野市遺跡地図』（1979年）

(21) 三重県埋蔵文化財センター『沖打越１号墳・沖打越中世墓発掘調査報告』（2012年）

(22) 都出比呂志「古墳時代首長系譜の継続と断絶」（『待兼山論叢』第22号、大阪大学文学部、1988年）

(23) 山本雅靖「伊賀」（『前方後円墳集成』中部編、山川出版社、1992年）

(24) 三重県埋蔵文化財センター『城之越遺跡』（1992年）

(25) 三重県埋蔵文化財センター『石山古墳』第24回三重県埋蔵文化財展図録（2005年）

(26) 三重県埋蔵文化財センター『研究紀要』第12号－森脇遺跡－（2002年）

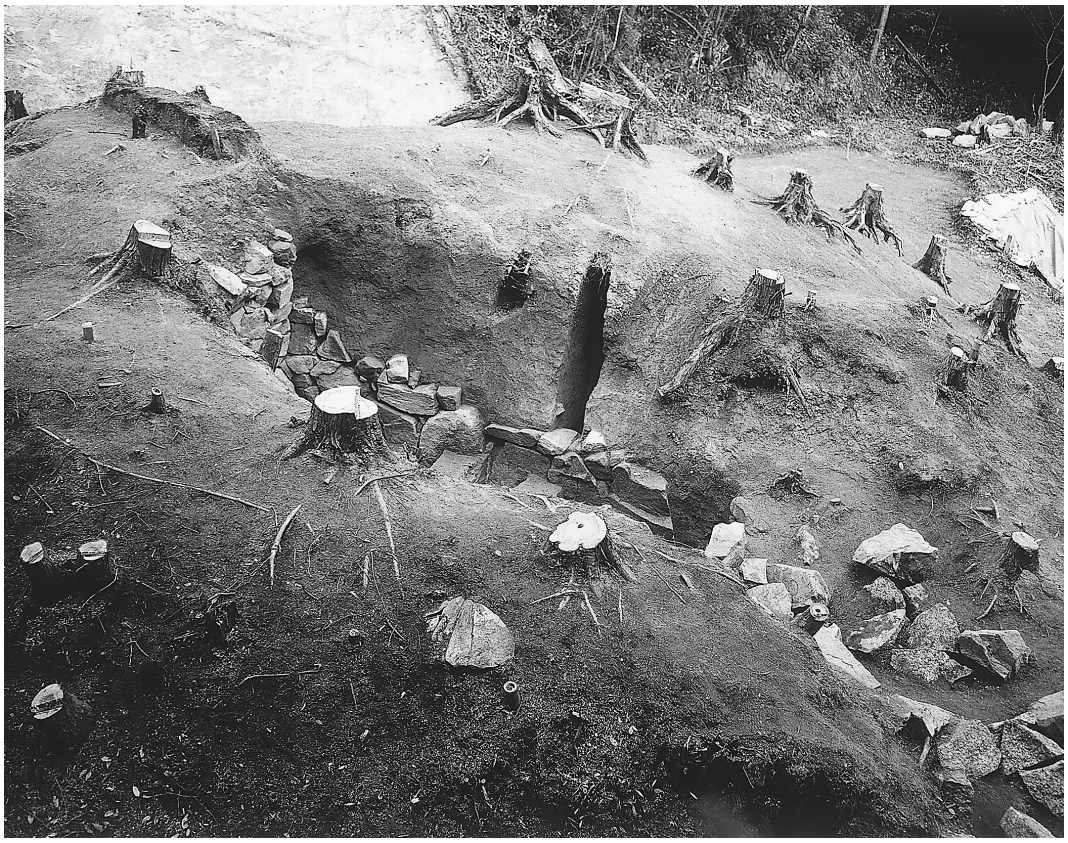
(27) 前掲註（22）文献

写真図版

才良吉田谷１号墳石室（南から）

写真図版 1

調査前（西から）



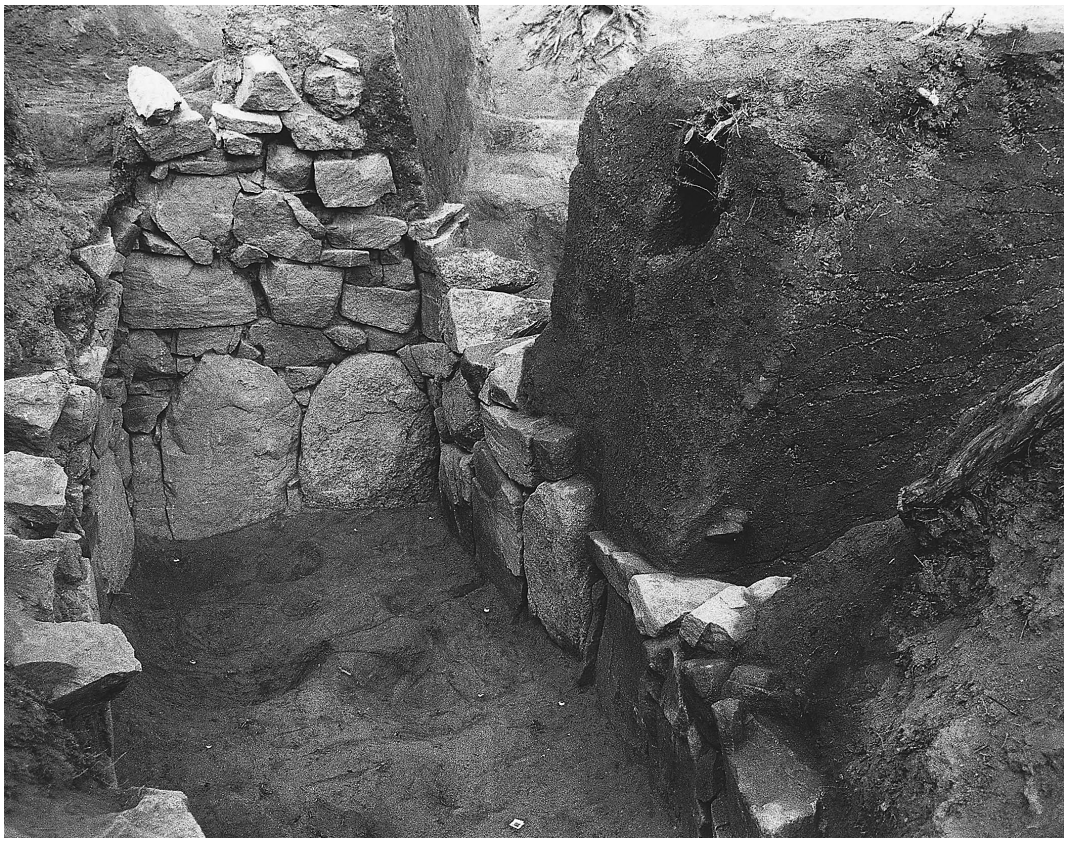
墳丘（南西から）

全景（南から）

２号墳・３号墳

１号墳石室（南から）

１号墳石室（北から）



１号墳石室（南から）

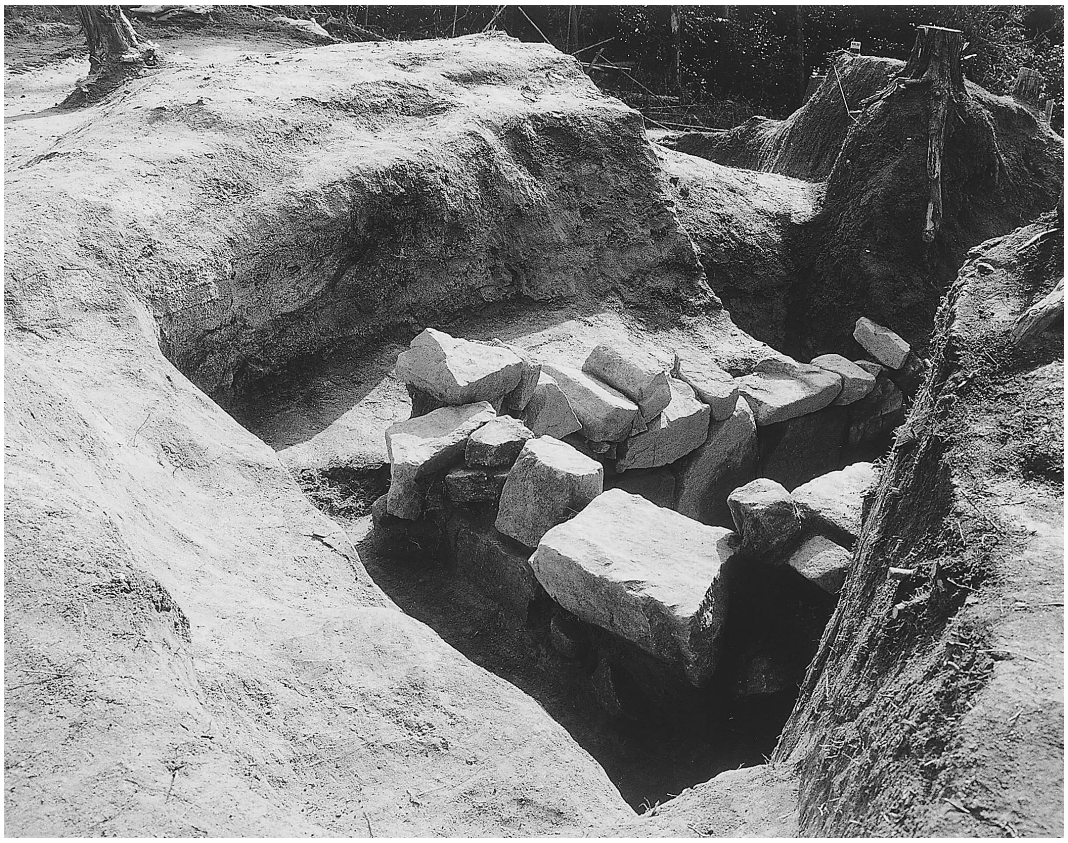
１号墳石室（南から）

写真図版５

１号墳石室掘形（南東から）

１号墳石室左側壁石材裏面（東から）

１号墳石材据形（南西から）



１号墳石室掘形（北東から）

写真図版７

１号墳墳丘盛土・石室掘形・周溝（北西から）

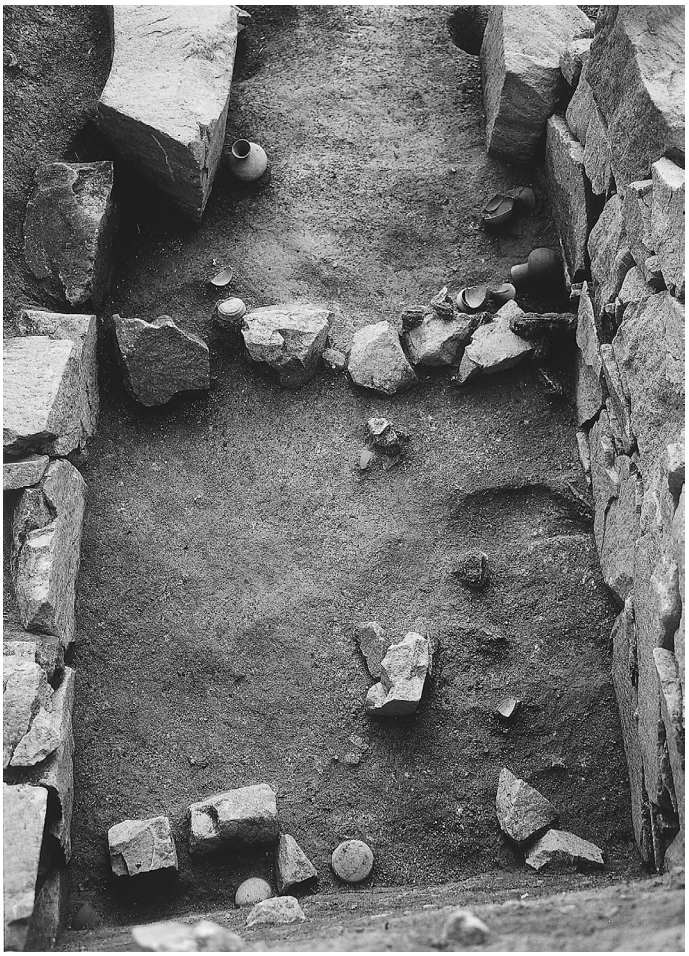
１号墳石室掘形埋土（左側壁部、南から）

２号墳石室全景（南から）

２号墳石室奥壁（南から）

写真図版９

２号墳石室（奥壁側土層除去前、南東から）



２号墳石室内遺物出土状況（北から）

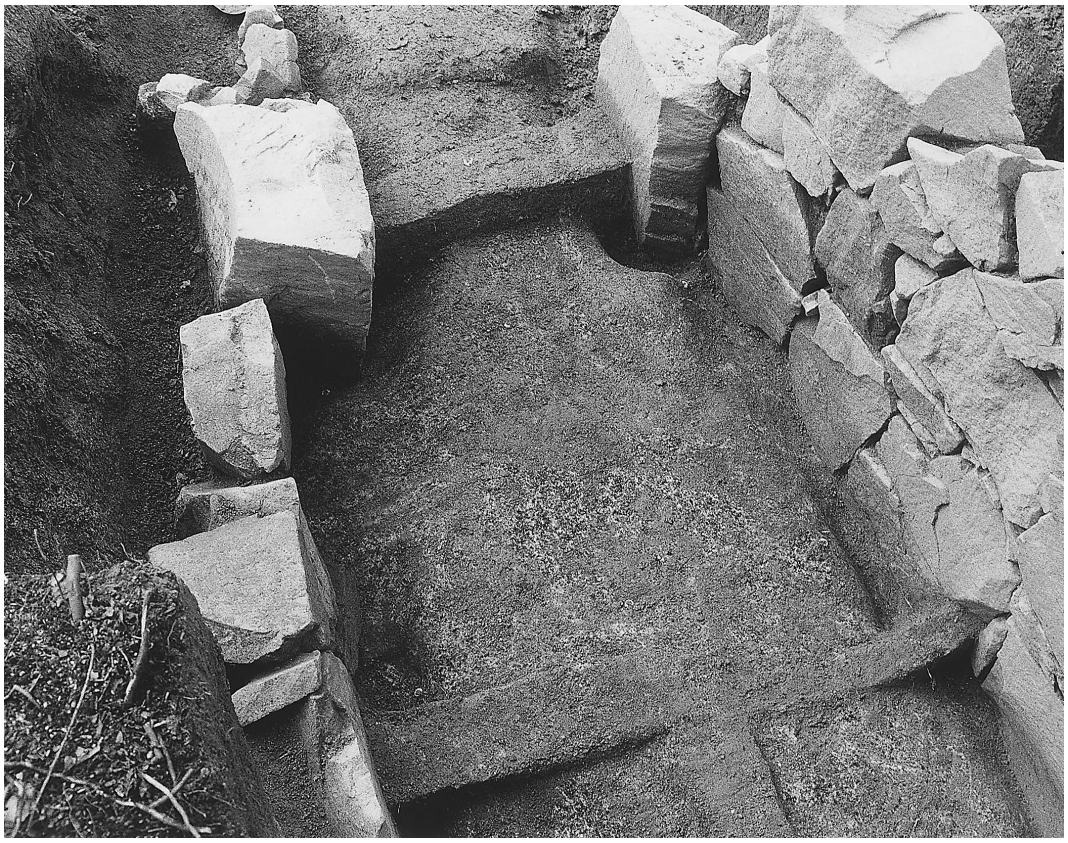
２号墳石室内遺物出土状況（南から）

２号墳石室袖部遺物出土状況（東から）

写真図版11

２号墳石室奥壁寄り遺物出土状況（南から）

２号墳石室床面整地土と石材据形の関係（南東から）



２号墳石室石材据形（北東から）

２号墳石室石材据形（北西から）

写真図版13

３号墳石室全景（床面整地土除去前、南西から）

３号墳石室全景（床面整地土除去後、南西から）

３号墳石室右側壁部（南から）

３号墳羨道部（北から）

写真図版15

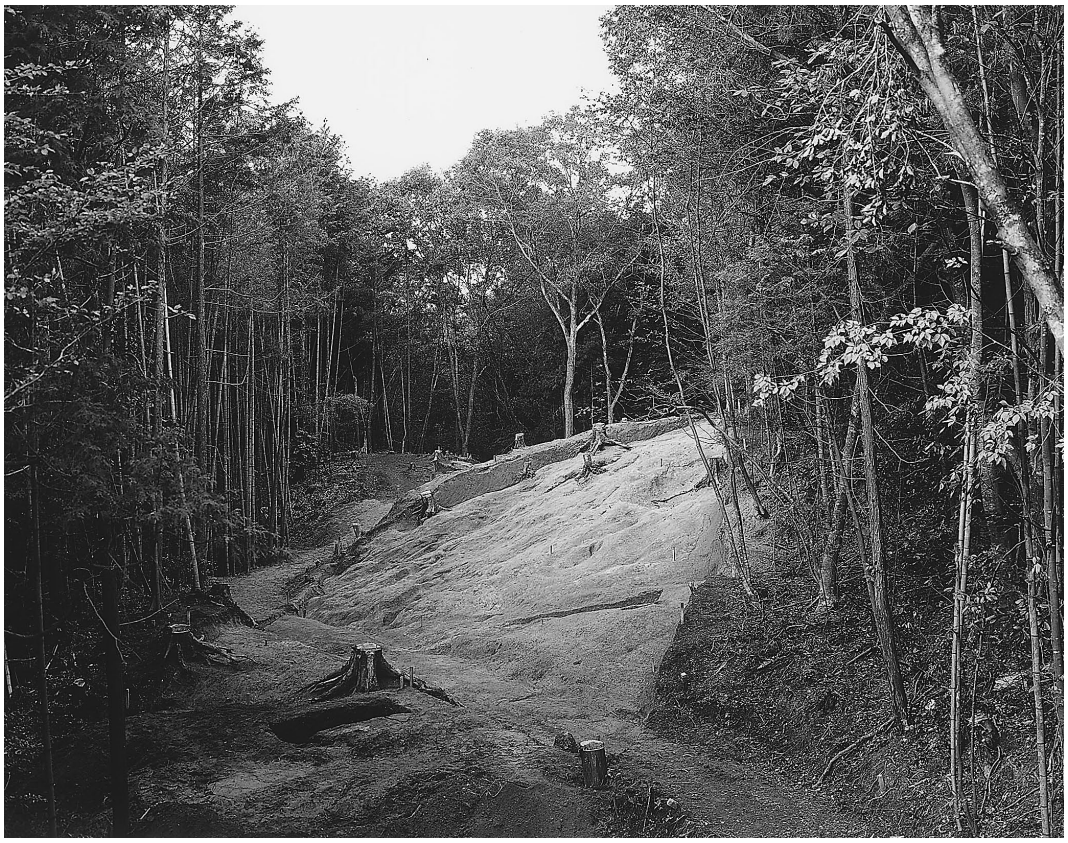
３号墳石室内遺物出土状況（南から）

３号墳石室内遺物出土状況（南東から）

３号墳石室内遺物出土状況（北から）

３号墳石室内遺物出土状況（南から）

写真図版17



山ノ谷調査区全景（南から）

山ノ谷調査区全景（西から）

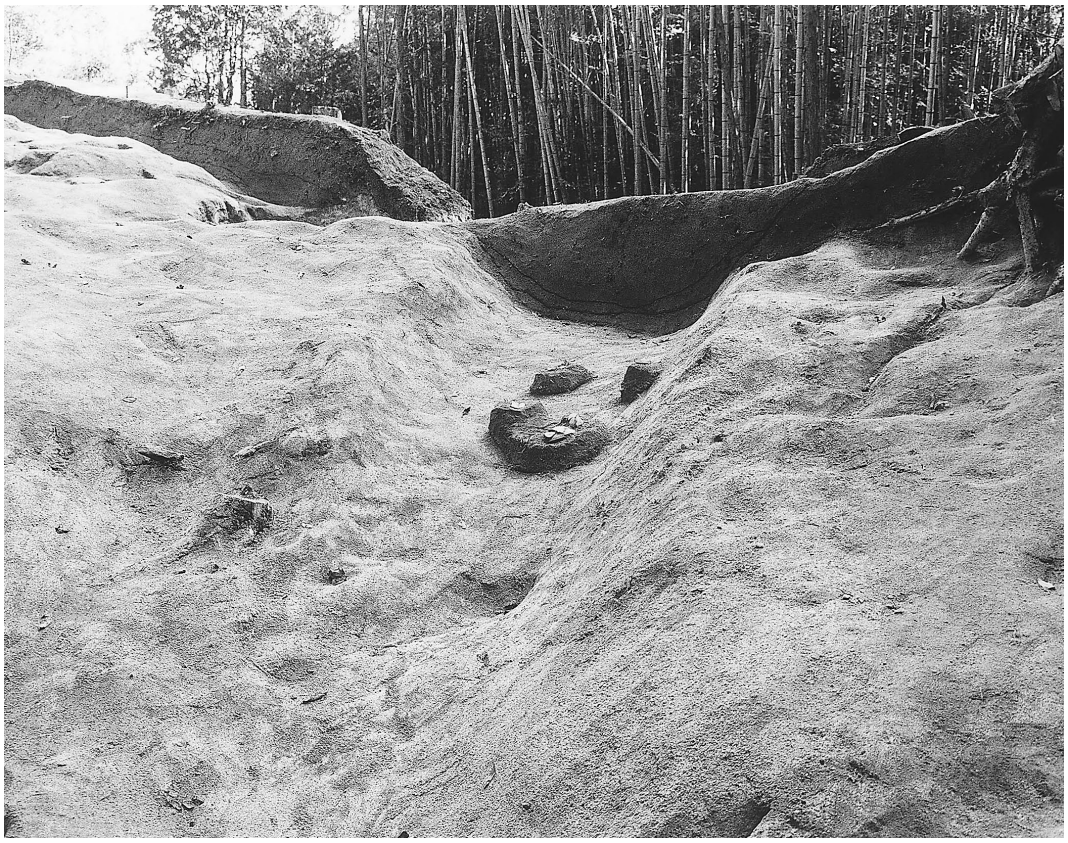
山ノ谷調査区、才良吉田谷８号墳付近（東から）

山ノ谷調査区、ＳＤ２・３（北から）

写真図版19

28号墳全景（北から）

28号墳土層（北から）



28号墳周溝（ＳＤ４）遺物出土状況（北西から）

28号墳周溝（ＳＤ４）遺物出土状況（北東から）

写真図版21

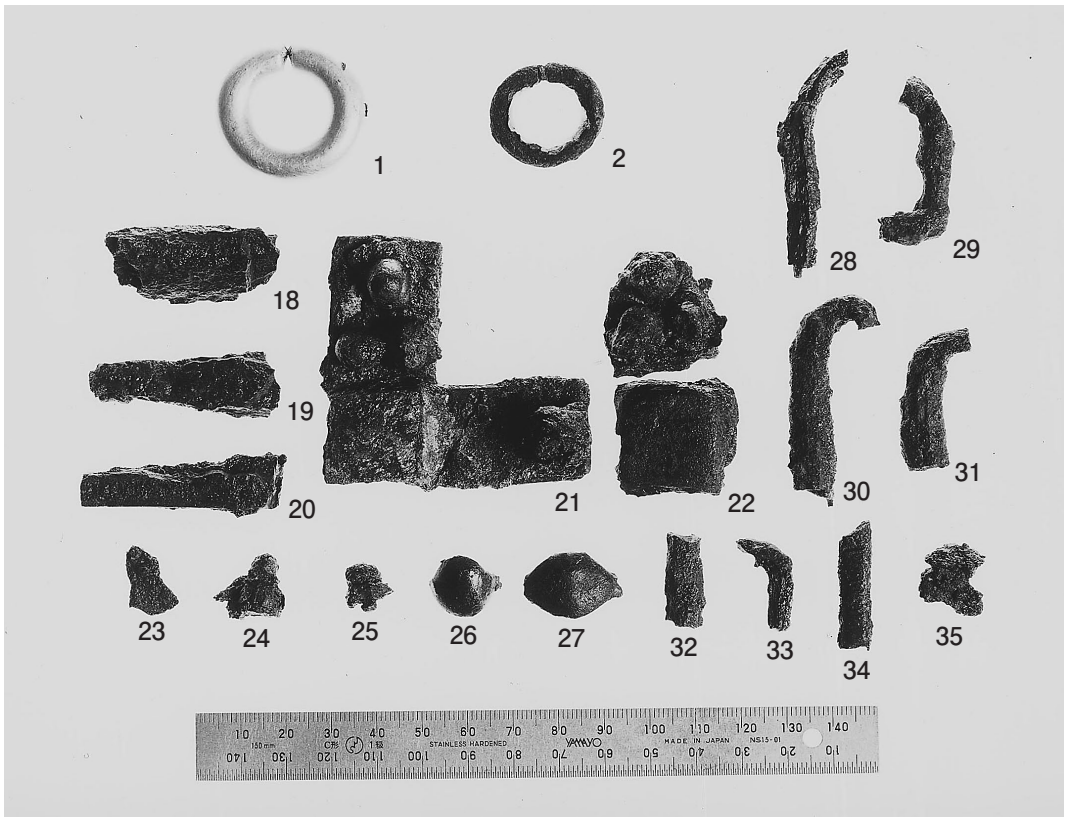
吉田谷Ａ区全景（北西から）

吉田谷Ｂ区全景（北東から）

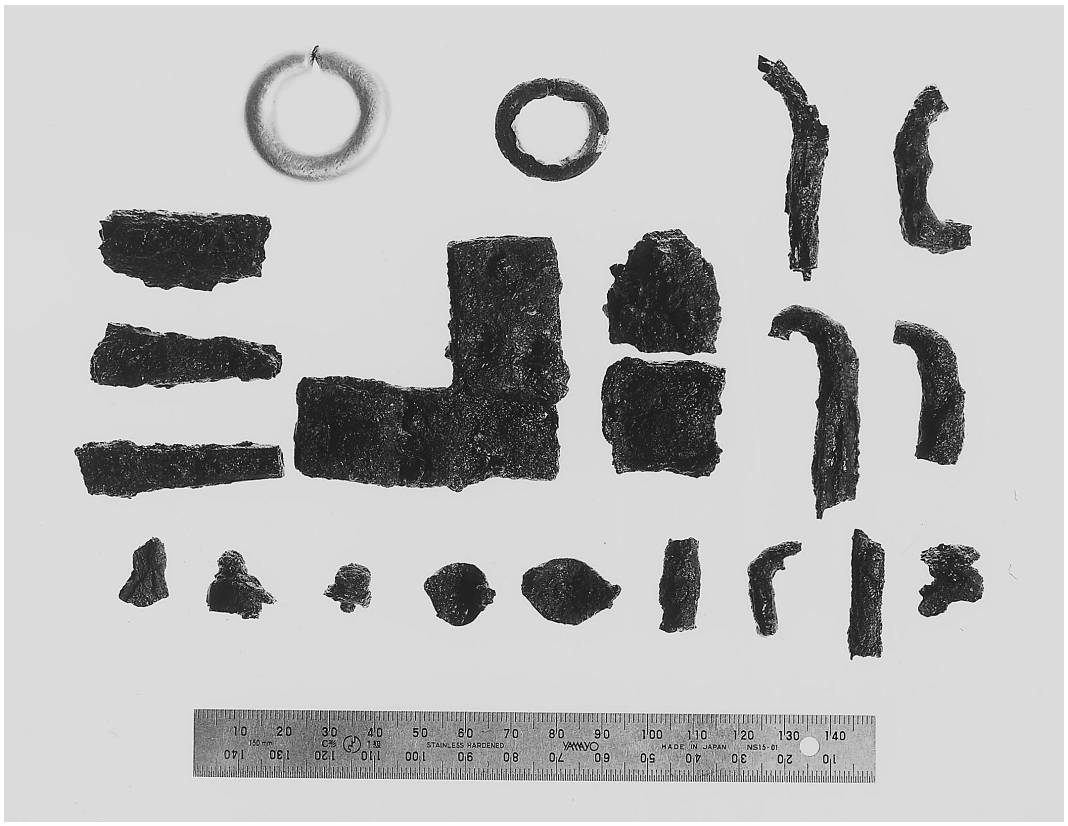
吉田谷Ｃ区全景（北西から）

吉田谷Ｃ区石列検出状況（南西から）

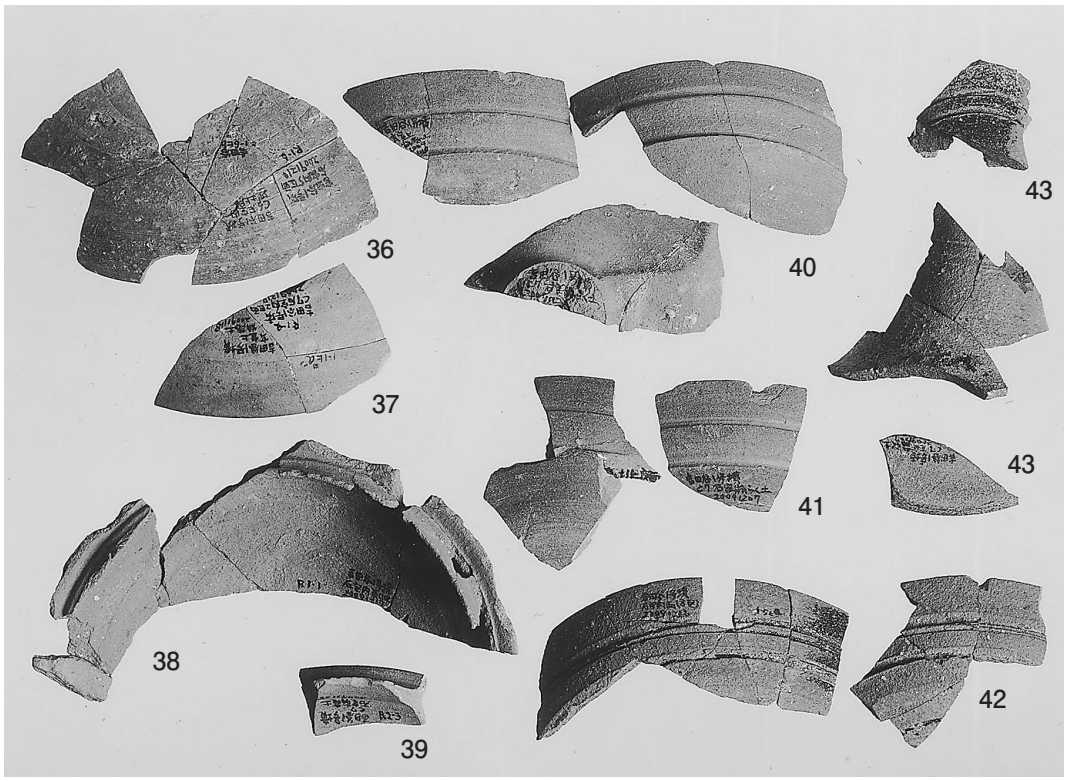
写真図版23



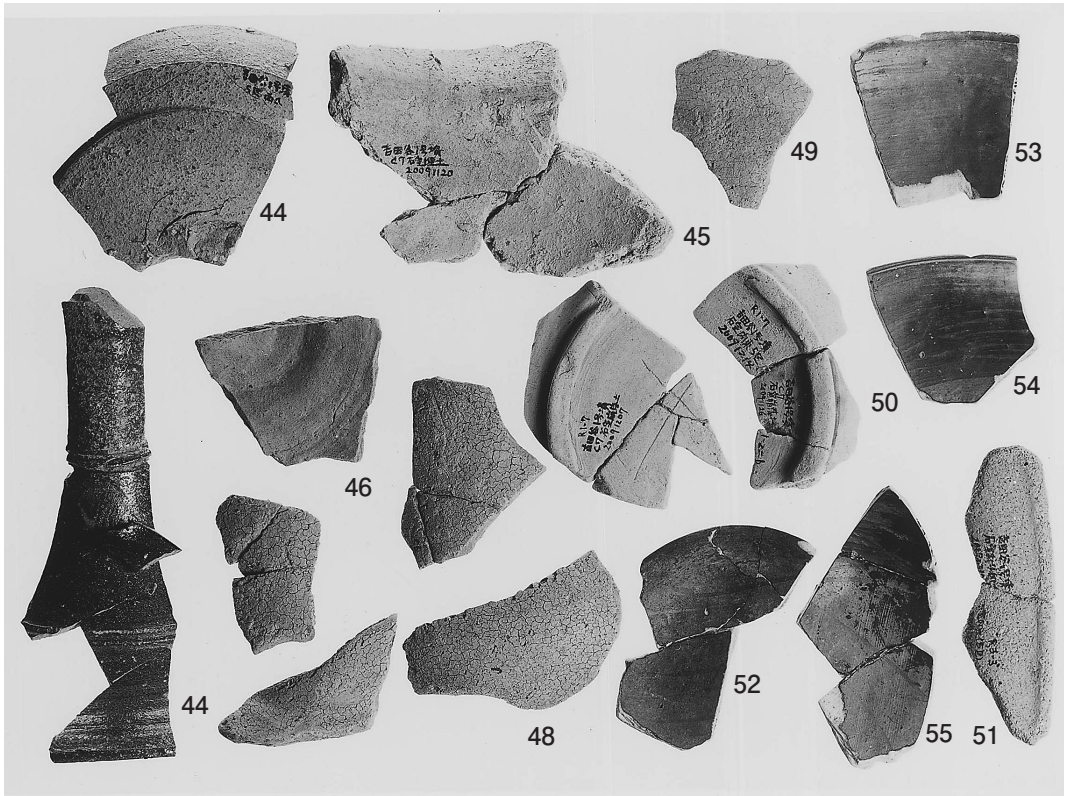
1号墳出土金属製品(表面)（２：３）



1号墳出土金属製品(裏面)（２：３）



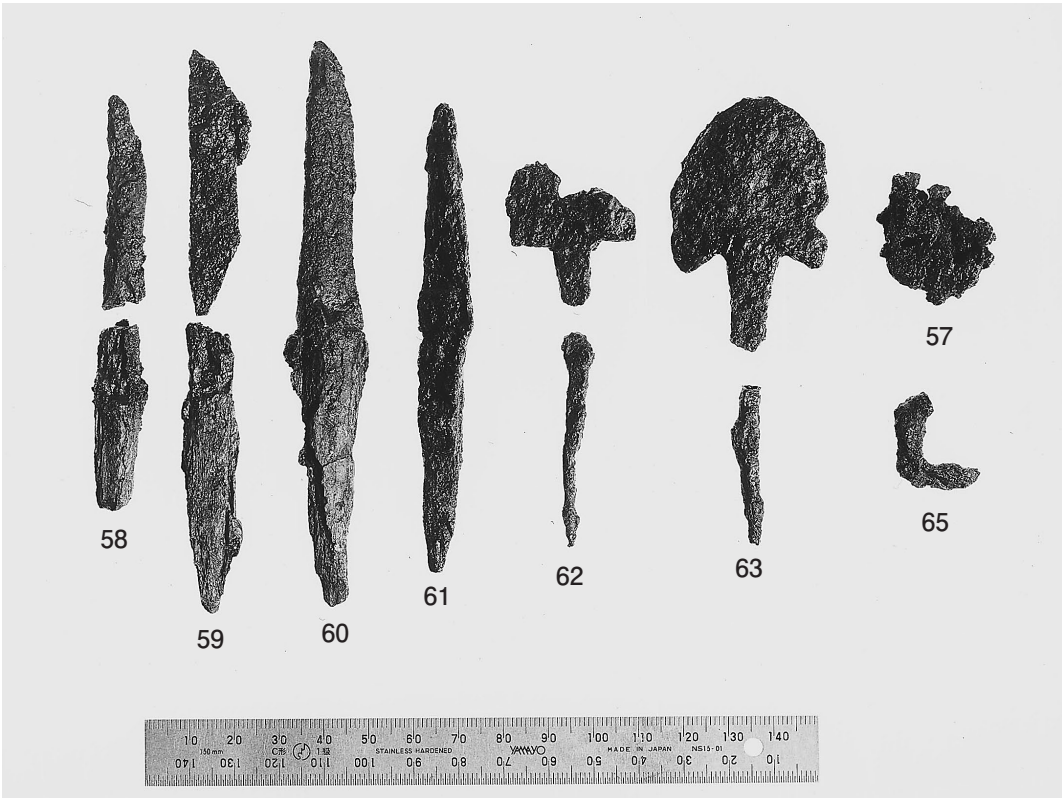
1号墳出土須恵器



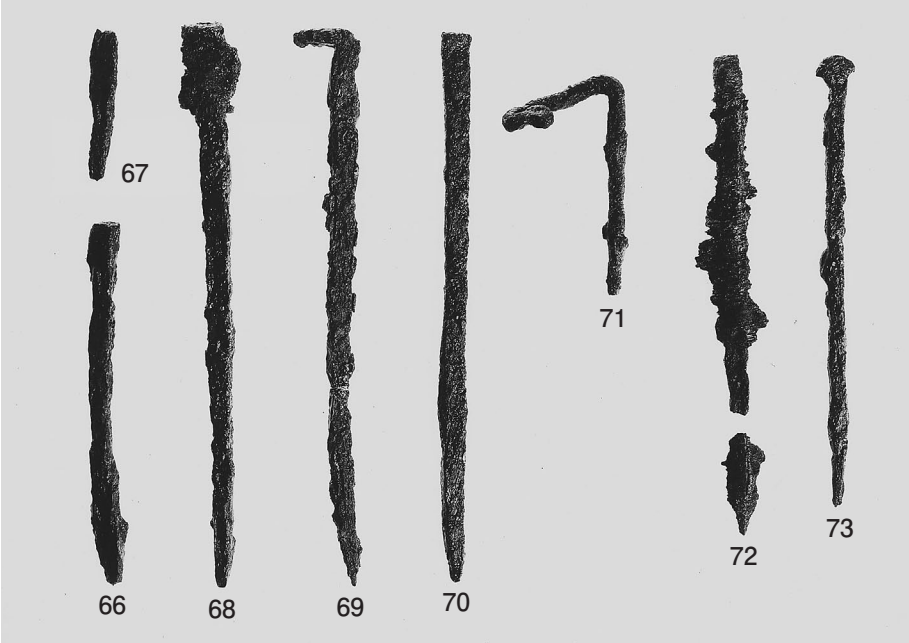
1号墳出土須恵器ほか

写真図版25

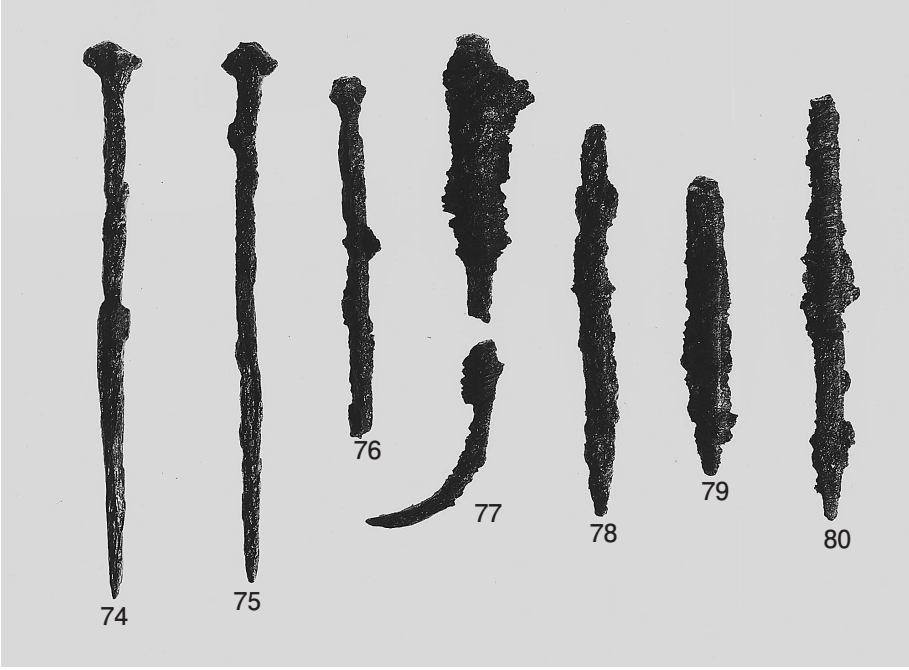
1号墳出土須恵器



2号墳出土金属製品



２号墳出土金属製品（釘類）（２：３）



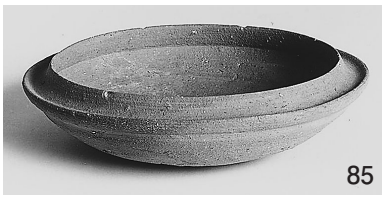
２号墳出土金属製品（釘類）（２：３）

写真図版27

81

83

84


85

86

87

88

89

90

91

92

93

95

96

97

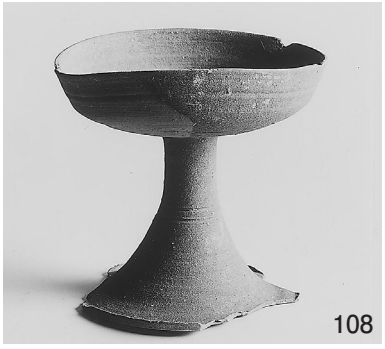
98

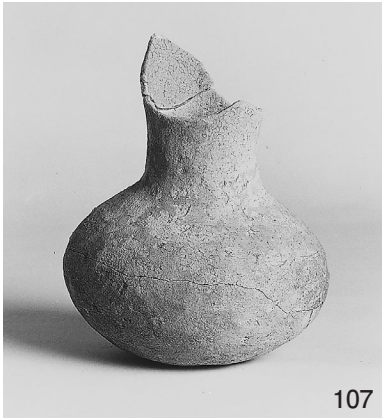
99

100

101

才良吉田谷２号墳出土土器集合





才良山ノ谷28号墳（111）

才良吉田谷３号墳出土遺物（104 ～ 110）

報 告 書 抄 録

ふりがな	ざいりょうよしだたにこふんぐん・ざいりょうやまのたにこふんぐんほかはっくつちょうさほうこく
書名	才良吉田谷古墳群・才良山ノ谷古墳群ほか発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	３３８
編著者名	伊藤裕偉・髙松雅文
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　　TEL 0596(52)1732
発行年月日	2013年３月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
才良吉田谷 １～３号墳 才良山ノ谷 28号墳 才良吉田谷 遺跡	伊賀(いが)市才良(ざいりょう)字 吉田谷(よしだたに)・山ノ谷(やまのたに)	24216	a1246 a1258 a1259 a1303	34° 42′ 24～ 31″	136° 9′ 50～ 58″	20091019 ～ 20100226 20100622 ～ 20101029	H21 330 H22 171 H23 865	平成21～23年 度農免農道依 那古２期地区 整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
才良吉田谷 １号墳	古墳	古墳後期 鎌倉前期	横穴式石室、 周溝	金銅装馬具、耳環、刀子・須恵器・土師器瓦器(少量)	金銅装馬具には、十字形辻金具、双脚飾鋲など
才良吉田谷 ２号墳	古墳	古墳後期	横穴式石室	鉄鏃、刀子、釘、須恵器、土師器	未盗掘墳。須恵器には尾張猿投窯系のもの多くあり。
才良吉田谷 ３号墳	古墳	古墳後期	横穴式石室	鉄刀、刀子、須恵器、土師器	未盗掘墳。小型石室
才良山ノ谷 28号墳	古墳	古墳後期	周溝	須恵器	木棺直葬墳か。
才良吉田谷 遺跡	散布地	平安 近世	石組遺構	土師器・黒色土器	

要約

才良吉田谷古墳群は、６世紀後葉から７世紀中葉の古墳群。横穴式石室墳である。１号墳は盗掘を受けていたが、胴張りで腰石を持つ玄室で、伊勢湾西岸部との関係が考えられる。２号墳は未盗掘墳。７世紀中葉頃の釘のほか、須恵器・土師器がほぼ原位置を留めた状態で出土した。３号墳も未盗掘墳。調査は一部だったが、鉄刀と須恵器・土師器の一括出土があった。注目は１号墳の金銅製馬具類と、２号墳の尾張猿投窯系須恵器。

才良山ノ谷28号墳は周溝部分を調査。６世紀前半の古墳と考えられる。埋葬施設は調査区外だが、木棺直葬かと考えられる。

才良吉田谷遺跡は、古墳群と同じ空間にある遺跡。平安時代の黒色土器、近世の石組遺構などが確認された。

三重県埋蔵文化財調査報告338

才良吉田谷古墳群・才良山ノ谷古墳群ほか
発掘調査報告

発 行 年 月　　2013(平成25)年３月
編 集・発 行　　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　　文　化　印　刷